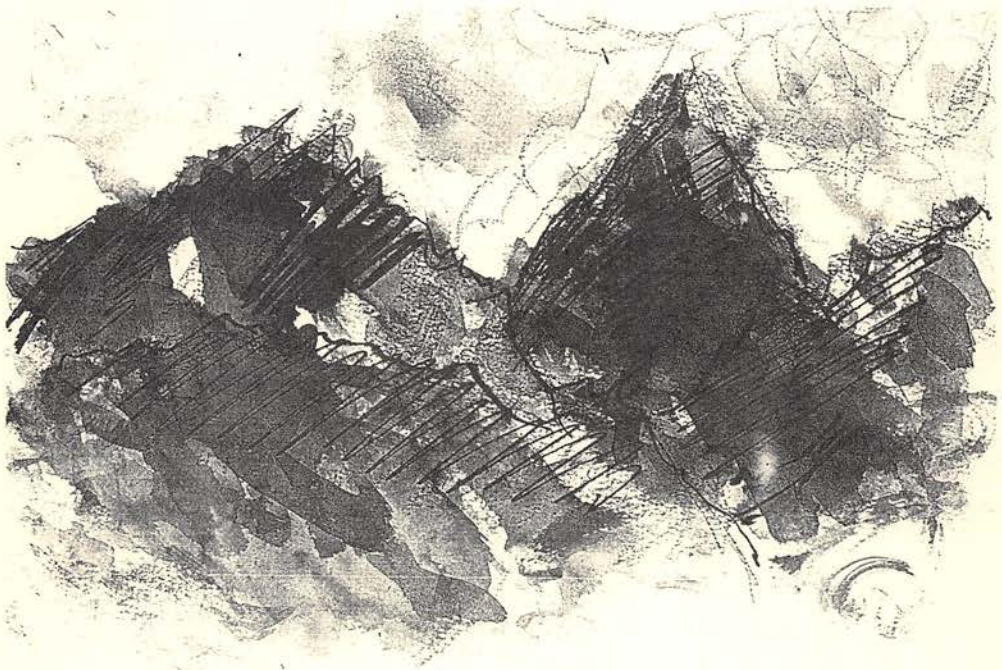


秀麗な峰を攀じよ



日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

カシミールの盟主

ヌン(7,135m)登頂

HAJヌン登山隊 1991年

登山報告書

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN



スノープラトーより



登頂したぞ!!



BCにて



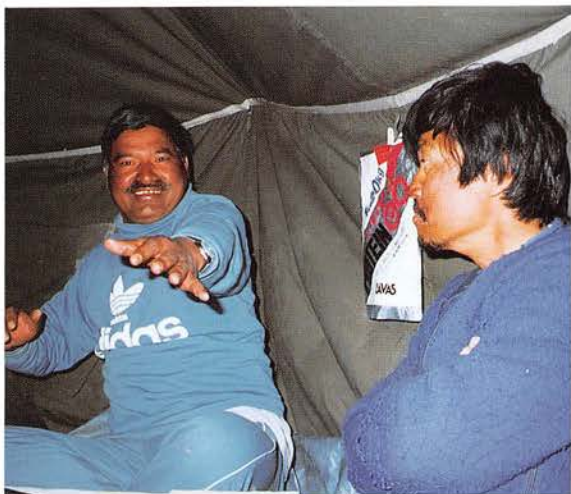
頂上へ延びるロープ



夜空にヌン峰



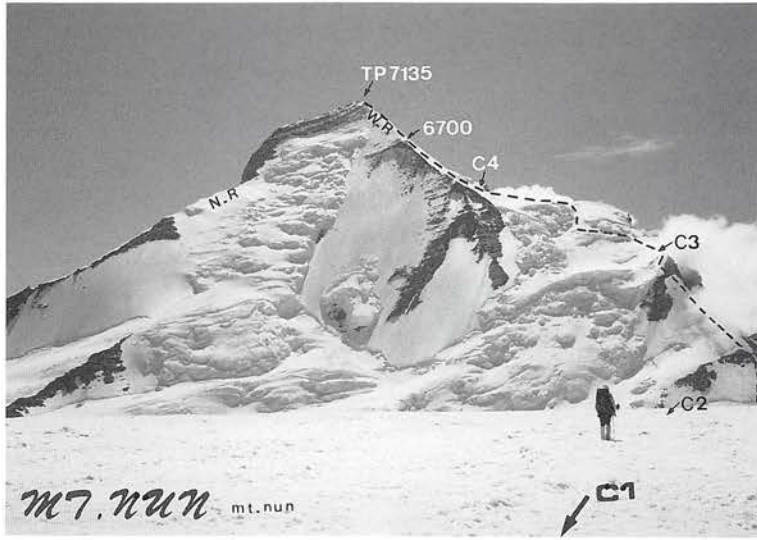
西稜へのトラバース (6,700 m)



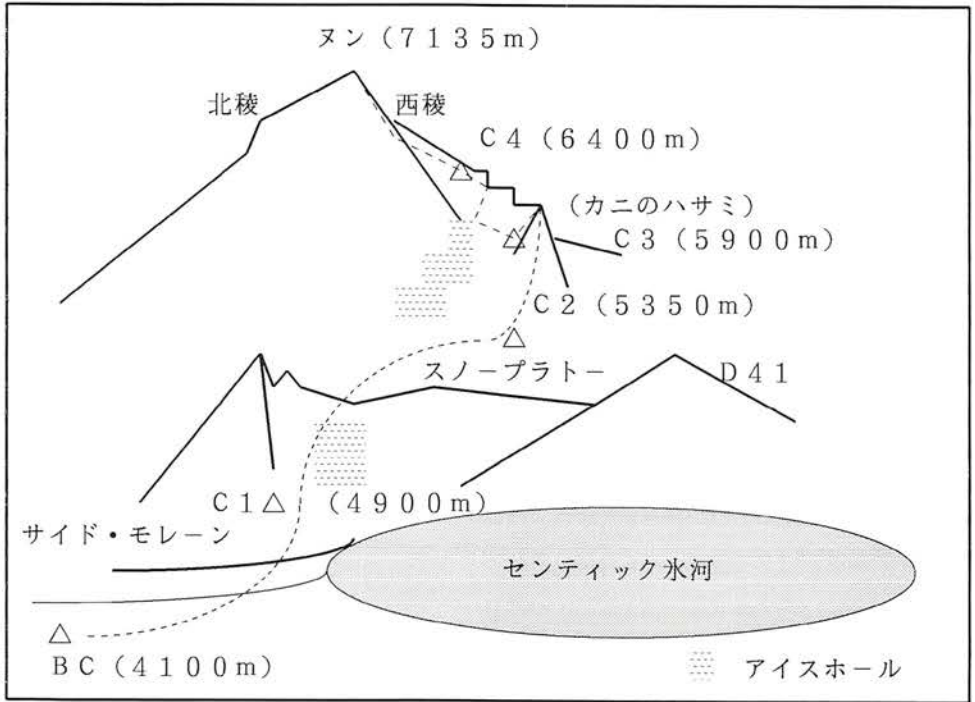
隊長と連絡官



C1への荷上げ



ルート ☒



序

日本ヒマラヤ協会
理事長 稲田定重

1975年から5回にわたり、さまざまなドラマを繰り広げてきたヌンは、H A Jにとって最も親しみ深い山である。

ヌンは、その時々によって適切な位置づけのもとにトライされ、多くのH A Jメンバーの喜びと悲しみをその秀麗な山肌に刻みこんできたものである。

1991年隊においても予期せぬドラマがあり、それぞれにとってのヌンが創られた。特に91年隊は、カシミール紛争の激化をうけて、マナリ経由でいきなりザンスカール、ラダックのプラトーに上がり、そのまま順化するいとまもなく登山活動に入るというストレスを受け、ベースキャンプ到着前において不調者が続発するという困難に見舞われた。隊長の中岡君の心労は如何ばかりであったろうか。

私自身、中岡君とはかってヒマラヤ行を共にし、その後の永いつきあいもあって、特にその真正直さ、こまやかに人を思いやる性格は承知している。それだけに、彼の苦悩するさまが手に取るようにわかるのである。

けれど、隊は見事に3名を頂上に立たせることが出来た。また、登頂こそ未完に終わった隊員たちも十分に燃焼したと聞いている。

78年から81年に実施した「ヒマラヤ登山学校」では今日のH A Jの中核を成す多くの実践者が育てられた。彼らは、ステップを着実に踏んで、ついには超高峰の頂にまで達している。

そして今、回を重ねつつある「サマーキャンプ」のメンバーたちが最近のH A Jの遠征を支えるようになってきた。サマーキャンプは、本来ヒマラヤへの本格的なファーストステップとなるものである。第2歩、第3歩は、望むならば自らの主体性によって築いて行って欲しい。H A Jのモットーは、「創造するヒマラヤ」にある。

この遠征にあたっては、実に多くの方々にお世話になった。あらためてあつく御礼申し上げるとともに、今後とも暖かく見守って下さることをお願いしたい。

ヒマラヤを続けて行けば、熱い感動はいつまでも私たちのものである。

1992年3月31日

目 次

序	稲田 定重	
登山報告		
隊長あいさつ	中岡 久	7
登山計画		8
行動概要		10
先発隊出発	伊藤 守	11
マナリ～レーロード 一直線	沢田 幸子	12
多難のベースキャンプ入り	井上 博之	15
登山日誌	中岡 久	19
登頂記	田村 正勝	23
ヌン峰登頂	中山 裕朗	24
第二次アタック	伊藤 英世	25
帰路キャラバン	吉岡 俊博	26
隊員紹介・紀行		
隊員紹介		29
登山を終えて	中岡 久	36
C1の植物	関根 幸次	40
スケッチと雑感	井上 博之	41
ヌン周辺の地質とか鉱物とかその他について	田村 正勝	45
インドヒマラヤ・ヌン峰 タンゴール村にて	沢田 幸子	49
HNE-91	吉岡 俊博	50
ヌン13年目の邂逅	中岡 久	51
高山病雑感	関根 幸次	52
高山病にもめげず	滝口 良二	53
アーグラ滞在	森山 英穂	54
夜空をバックにヌン峰を撮る	伊藤 守	55
レーの出来事	伊藤 英世	56
遠征中の小遺帳	中山 裕朗	57
ジャイプール	伊藤 英世	58
私の英語力	吉岡 俊博	58
隊務報告		
食料報告	中山 裕朗	61
共同装備	吉岡 俊博	63
医療報告	関根 幸次	64
高所症状について	沢田 幸子	65
ごみ処理について	田村 正勝	67
タクティクス	伊藤 守	68
御協力者名簿		70

登山報告

隊長あいさつ

登山計画

行動概要

先発隊出発

マナリ～レーロード 一直線

多難のベースキャンプ入り

登山日誌

登頂記

ヌン峰登頂

第二次アタック

帰路キャラバン



1971. 8. 4.
11時 20分 2-4峰
el 4,800m 12.7 T8 L-3

スケッチ 井上博之

隊長あいさつ

中岡 久

「ヌンは、H A Jにとって因縁深い山である。今日のH A Jの高所登山の基礎をつくったExpedition 研究グループが最初にとり組んだ遠征がラムジュン・ヒマールとヌン・クンであった。ヌン・クンは“未登峰、未踏査の地域、入域困難な地域を目指す遠征”として設定されたのである。当時この山域はインナーラインの関係から通常の手段では入れず、ためにインドとの合同登山ということで推進されたのである。現在、この山域は、インドで最もポピュラーなエリアとして各登山シーズンを通じて空いている間もないほど各国隊が入っている。昔日の感がある。」(H A Jカシミールヒマラヤ遠征隊1983年・NUN登頂'83 -序-より)

「ヌンは、H A Jにとってゆかりの深い山である。はじめに、74年の沖氏らによる偵察、75年の西郡、山森氏らによる日印合同隊があった。この合同隊の出発までには筆舌に尽し難い数々のプロセスがあり、後のH A Jの遠征のバックボーンを形成することに測りしれない貢献をしたものである。」(H A J女子ヒマラヤ登山隊1987年・カシミールの女神ヌン-序-より)

このようにH A Jは、ヌンに1975年を始めとして1978年・1983年・1987年と過去4回登山隊を派遣してきた。いわばH A Jにとってヌンは、インド登山におけるホームグラウンド的な山である。1977年から1982年の6年間にわたって実施してきた「ヒマラヤ登山学校」の経緯を踏まえ、1989年から実施されている「ヒマラヤサマーキャンプ」の第3回目にあたって、このヌン登山が計画されたのは、いわば必然である。

サマーキャンプは、「年々増加の一途を辿る日本人の海外旅行熱は、ヒマラヤ各地へも伝播し、登山者の海外指向は隆盛を見せております。しかしながらこうした海外指向があるにもかかわらず身近に良きアドヴァイザーが居なかったり、同行の仲間が得られないなどの理由で折角の夢も実現しないまま眠っている実情も少なくありません。

本会では、これらの現状を鑑み、特にH A J会員より要望の多い、夏期にインド・ヒマラヤにおいてサマーキャンプを開設することにいたしました。登山の多様化が叫ばれている現在、ヒマラヤの大自然の懐で参加者の目的に合うような活動を展開したいと思っております。」として計画されているが、この趣旨に賛同し、さらにヌン登山ということで様々な思いを胸に秘め、最終的に13名の仲間が集まったのが、本年の1月であった。

(6月になり、1名が職場の都合で参加できなくなり、12名となった。)

集まってきた仲間は、24才～57才(平均年齢40.4才)という親子ほどの年齢差があったが、海外・高所・リーダー経験者を多く含み、総合的には、トップクラスではないが、中級～上級クラスのメンバーだった。実質的な計画のスタートを昨年11月より行い、正月合宿・2月山行・5月合宿という国内山行及び月1回のミーティングでメンバー相互の意志疎通を図り、輝くヌンの頂き目指して準備を進めていった。

そしてめくるめく暑い夏、40日余に渡るインド・ヒマラヤ、カシミールの盟主であるヌン登山は、3名の仲間を輝く頂きに送り出し、終了した。しかし、準備段階から登山終了まで参加した仲間が共有した意識は、いつまでも消えることはない。いつまでも……。今後折りあるごとに思い出さだろう。アイスフォールを突破して、あの輝くヌンの全容を眼前にした思い出とともに……。又、困難な西稜を一步一步登攀し、輝く頂点に達した思い出とともに……。遥かにナンガ・K2を望んだ思い出とともに……。さらに様々な思い出とともに……。いつまでも。それらを糧にしてさらに新たな山々を目指したいと思う。

今回の1991年H A Jサマーキャンプ・ヌン登山にご協力いただきました多くの方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございます。ありがとうございました。

登山計画

目標の山・遠征の目的

1. 目標の山
インド・ジャム&カシミール州
ヌン峰 (Mt. NUN) - 7,135 m -
2. 登山期間
1991年7月14日～8月25日 (43日間)
3. 遠征の目的
西稜からのヌン峰登頂

隊の名称・構成

1. 隊の名称
日本ヒマラヤ協会ヌン登山隊1991年
(英文名) HAJ NUN EXPEDITION 1991
(略称) HNE-91
2. 主催
日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF
JAPAN (H A J)
3. 推進の組織
日本ヒマラヤ協会ヌン登山隊実行委員会
会 長 稲田 定重 (H A J 理事長)
実行委員長 山森 欣一 (一同専務理事)
副実行委員長 中岡 久 (登山隊隊長)
事務局 長 尾形 好雄 (H A J 事務局長)
委 員 八木原 罔明、小島 守夫、
登山隊隊長

登山隊事務局

〒169 東京都新宿区高田馬場 3-23-1
淀橋食糧ビル 506号
日本ヒマラヤ協会 TEL 03-3367-8521
FAX 03-3367-4509

現地連絡先

C/O Shikhar Travel (P) Ltd.,
209, Competent House, F-14 Middle Circle,
Connaught Circus, New Delhi 110001, INDIA.
TEL 331-2444, 331-2666
Tlx 31-62664 SHIK IN

隊員構成

隊長	中岡 久 (41歳)	埼玉
副隊長	関根 幸次 (57歳)	埼玉
登攀L	橋本 康弘 (36歳)	神奈川
〃	伊藤 守 (36歳)	東京
隊員	井上 博之 (57歳)	東京
〃	沢田 幸子 (50歳)	東京
〃	田村 正勝 (49歳)	東京
〃	瀧口 良二 (42歳)	長崎
〃	森山 英穂 (36歳)	東京
〃	吉岡 俊博 (31歳)	神奈川
〃	中山 裕朗 (27歳)	東京
〃	伊藤 英世 (24歳)	東京
連絡官	P・D・シン (49歳)	ITBP所属
コック	ラクパ (25歳)	
ハイポーター	バサン (34歳)	
〃	ミンマ (22歳)	
〃	ダワン (19歳)	
シカールトラベル・アレンジャー	A・クマール (28歳)	

ヌン峰の概要

—位置と山容—

ヌン峰 (7,135m) は、ジャム&カシミール州の
主都スリナガールの東部のヌン・クン山群に位置
し、この山群の盟主がヌン峰である。隣接峰とし
てはクン (KUN, 7,077m)、ピナクル・ピーク (PI-
NACLE PEAK, 6,930m)、ホワイト・ニードル
(WHITE NEEDLE, 6,600m) などが聳える。一般
には、ヌン・クンと続けて呼ばれているが、全く
別の山である。ヌン峰は別名「セル＝塩山」とも
呼ばれており、全山雪に覆われたどっしりした三
角錐の山で、まさに純白の塩の塊を思わせるよう
な山容で聳えている。隣接する黒々としたクンの
岩山とは、対比的である。

—ヌン峰の登山史—

この山群への偵察は、1898年イギリス人がグル
カ兵を連れて山岳探検と訓練を目的に入ったのが

最初で、以後、1902年にはアーサー・ネーブ博士とバートン師が東面のシャフト氷河に入り、1904年にはヒマラヤの探検家として名高いワークマン夫妻がこの山群第三の高峰、ピナクル・ピークに初登頂した。

ヌン峰の初登頂は、エベレストやナンガパルバットの8,000mが登られた1953年の8月にベルナル・ピエール隊長の率いるフランス隊によって成された。この頃は、スリナガール～レー間の道路は、政治的理由で通行不能となっていた為、アプローチは南面から迫り、ファリダバード谷の上部、4,700mにBCを設けてヌン峰西稜より登頂している。



－アプローチ

西面からのアプローチは、大変交通の便が良く、インド国内線でスリナガールまで飛びバスをチャーターすればキャラバンなしで、センチック氷河の出合うタンゴール村まで入れる。しかし、1989年夏よりカシミール谷を取り巻く情勢がすこぶる険悪となり、スリナガールの治安が、心配される為、今回の登山では、アプローチをマナリ～レー・ルートに採ることになる。

この山岳道路は、バララチャ・ラ(4,954m)、タンラン・ラ(5,342m)と言った高い関嶺を越えて、4,300m位の高所にキャンプしていくので、初期高度体験としては少々辛い。但し、アプローチでこれだけの高度体験をしていくので、BC入りした時の初期高度馴化は楽になる。カルギルからスル河に沿って遡り、パニカルのチェック・ポストを過ぎると暫くしてタンゴール村に着く。村の北斜面を約2時間程急登し、センチック氷河から流れ出る河の側に隊荷を集結してBCを作る。

準備日誌

1990年

11月18日 参加希望者による懇談会(8名)
(東京都山岳連盟海外登山研究会参加後、打ち合わせ)

12月3日 第1回ミーティング(8名)

16日 1991年HAJ隊合同スノーバー作成に参加(6名)、その後ミーティング

30日 } ヌン隊第1回山行

1991年 } 北ア・爺ヶ岳東尾根～鹿島槍ヶ岳
1月3日 } (9名)

12日 } ヌン登山隊発足ミーティング、インド

13日 } ヒマラヤ会議参加(12名)

2月4日 ミーティング

10日 } ヌン隊第2回山行

11日 } 富士山(8名)

3月2日 } ミーティング、東京都山岳連盟高所順

3日 } 応研究会参加(13名)

4月11日 ミーティング

15日 ミーティング

5月3日 } ヌン隊第3回山行

上越・白毛門山～巻機山

6日 } ミーティング(13名)

13日 ミーティング

20日 ミーティング

27日 ミーティング

6月8日 } 隊荷梱包作業

9日 } 隊荷業者渡し

18日 隊荷業者渡し

7月1日 ミーティング

7日 家族会

8日 合同社行会

※この他、資料作成等で多くのミーティングを行い、又、隊員同士の山行を数多く実施した。

行 動 概 要

- | | | | |
|------|---|------|---|
| 7月7日 | 先発隊（伊藤・瀧口）出発 | 8月8日 | } C1（ABC）休養 |
| 8日 | シカール・トラベル打ち合わせ、
内務省ビザ延長申請・IMF挨拶
日本大使館電話連絡 | 9日 | |
| 9日 | 内務省ビザ延長申請 | 12日 | 第1回アタック（橋本・田村・中山）
西稜上大岩（6,700m）まで |
| 10日 | 通関業務 | 13日 | 第2回アタック（中岡・関根・伊藤・
井上・伊藤英）
西稜上大岩（6,700m）まで |
| 11日 | デポ品装備チェック | 14日 | 第3回アタック（橋本・田村・中山）
午前4時出発、午後1時30分登頂 |
| 12日 | リエゾン・オフィサーと会う | 18日 | BC撤収、カルギルへ |
| 13日 | 装備再梱包 | 19日 | カルギル～レー |
| 14日 | 隊荷整理、
本隊出発、先発隊と合流 | 20日 | エアーにてレー～チャンディガール～
デリー |
| 15日 | 午前～シカール社挨拶・打ち合わせ、
内務省ビザ延長申請、出発準備
午後～出発、デリー～チャンディガール | 21日 | シカール社精算・IMF報告等事後処
理 |
| 16日 | チャンディガール～マナリ | 22日 | アグラツァー、市内観光等フリー
キャプテン・クマール氏の自宅にてパ
ーティ（春季HAJカンチェンジュン
ガ総隊長フカム・シン氏出席） |
| 17日 | マナリ～パッセオ（テント泊） | 23日 | 登山隊解散、9名・カルカッタ經由に
て24日成田着 |
| 18日 | パッセオ～デブリン（テント泊） | 24日 | } 3名（伊藤・森山・伊藤英）にて
25日 } デポ品等の処理 |
| 19日 | デブリン～レー | 9月3日 | |
| 20日 | レー滞在 | 10日 | 1名（森山）帰国 |
| 21日 | レー～カルギル、3隊員（瀧口・森山
・吉岡）は25日までレー滞在 | | |
| 22日 | カルギル～パニカル | | |
| 23日 | パニカル～タンゴール（テント泊） | | |
| 24日 | タンゴール～BC（センチック氷河
左岸、4,100m）設営 | | |
| 25日 | 登山活動開始 | | |
| 26日 | ルート工作隊、荷上げ隊に分けて登山
活動開始 | | |
| 28日 | BC滞在、3隊員BC入山、1週間振
りに全隊員合流 | | |
| 29日 | C1（センチック氷河右岸の大岩壁
の下部、4,900m）設営 | | |
| 8月1日 | C2（スノープラトーの奥、5,350m）
設営 | | |
| 5日 | C3（岩の双耳峰～通称カニのハサミ
を下降したコル、5,900m）設営 | | |
| 6日 | } C4（上部スノープラトー上・ヌン南
西壁の基部、6,400m）設営、8名の隊
員が上がる | | |
| 7日 | | | |



国内5月合宿（越後、柄沢山）

先発隊出発

伊藤 守

7月7日 壮行会前日に先発隊出発

本隊出発の1週間前に滝口・伊藤が渉外業務のため一足先に出発。当日はH A Jの家族会なので、見送りもなく2人寂しく、成田を離陸する。機内は夏休み前で日本人は数える程である。8時間の飛行にて定刻、インデラガンジー空港に着陸、機外に一步出ると、2年ぶりのインドの臭に包まれる。到着ロビーの混雑の中、今回のエージェントであるシカールトラベルの社員に呼び止められ、軽く挨拶を交し、タクシーにてデリー市内のホテル・ジャンパトへ到着。夜中、寝るるので戸外へ出る。ムットとする空気に包まれ、明日から始まる諸手続のことを考え、1人ボウーと夜中の明りをみつめインドに来たことを実感する。

7月8日 渉外業務で私が一番不安に思うのは、諸手続に付き添ってくれる、エージェントの社員に振りまわされないこと。リエゾンオフィサーとトラブルなく本隊にバトンタッチすること、この2点をつまづかないようにするだけだ。初仕事はまずシカール・トラベルへの挨拶から始める。キャプテン・クマール(社長)、アルン・クマール(担当者)で今後の予定を話合うが、思うように自分の意見が通じない。打ち合せの後、日本大使館へ電話をいれる。浅野書記官が対応され、J & K州でのツーリスト殺害事件の話がされ、自粛してほしいことをいわれる。会話がとぎれぎみになり、アポイントを取れる状況でないので電話の前で何度もお辞儀をしながら切らせていただいた。昼過ぎビザ延長に内務省へ、通常この種の登山では2ヶ月ビザなのだが1ヶ月しかもらえなかったからだ。しかしIMFからの書類に不備があるのかビザ延長ならず、その足でIMFへ、事務局長のカトチ氏と挨拶をかわす。その奥部屋では前の時にもいたお祖父さんがタイプライターを忙しくたたいている。暑さでボーとしている中、時差を考えると日本では今頃壮行会が催され、盛り上がっていることだろうと、ふと思う。

7月9日 10時過、シカールのメンバーと再度ビザ延長のため内務省へ。長い間待たせられ、全員そろった時点で許可を出す確約をもらう。午後、通関は時間的に無理なので市内見物にでる。

7月10日 隊荷、無事通関する。

朝、シカール事務所へ、パソコン数台、ファックスなどもあり忙しそうに働いている。美人の女性、コーヒサービスと長時間いてもあきない事務所だ。すでに無線機の許可はすんでいた。これで今日は隊荷の通関に集中できる。タクシーにてIMFによってから空港近くのエアカーゴへ、警備がやたら厳しい、シカールの担当者は昼休みをはさみ交代で窓口、倉庫といそがしい。大きな倉庫に入ってまもなくパレットに載った隊荷が出てくる。1ヶ月ぶりのご対面である。早く中身をチェックして欲しいのだがそこはインド、なかなか順番が回ってこない。2時間程してフルオープンの指示にしたがい開封される、無線機のチェックが念入りの他はカートンのバンドを切られた程度で終る。封印されて庫外へ運べる段になったが係官が見あたらず、シカールの担当者が探しまわる。5時半、トラックに隊荷を積みホテルへと思ったが、シカールの倉庫に直行。しかし鍵がなく予定通りホテルに運ぶ。

7月11日 きょう行ったシカールの倉庫へ。暑く、ホコリばい中、2時間でデポ装備を集める。AMP酸素ボンベは3~4本でも多いと思っていたが、6本すべて持って行く。(この判断が後で良い結果になる。)タクシー2台にて運ぶとホテルの部屋がカートンボックスで埋めつくされた。

7月12日 リエゾン・オフィサーと合う。

昼食にシカールのキャプテン・クマール夫妻に招待される。そのあとIMFへリエゾン・オフィサーに合いに行く。ITBPの警官で身体は「ゴック」、用意した支給装備が合うか不安になる。

7月13日 翌日、ホテルでリエゾン・オフィサーの支給装備チェックを約束したが、シカールの担当者もこなく、一日中、装備の再梱包で終る。夕方、デリーを歩く。2年前とあいもかわらず土産屋の呼びこみがうるさい。

7月14日 今日は本隊が夜、到着する日である。昼間は最後の隊荷整理におわれる。夕方今か今かと出向への車を待つが、こないまま夜9時すぎホテルにミニバスが横付けされ本隊と合流、夜遅くまで酒を飲みながら、壮行会の話などで盛り上がり、先発隊の仕事は終る。

マナリ～レーロード 一直線

沢田幸子

7月14日 日本出発～デリー

昨年のサトパント隊と同様A I - 301便に乗り込む。30分遅れで離陸しバンコク経由で夜11時半デリーに到着した。外へ出るとムーンとした熱気につつまれてしばし呆然とする。シカール社の迎いのバスに乗りホテルジャンバスへ向かう。夜の路上にたむろしている人・人・人の群れに驚く…。でも眠い、何でもいいから早く寝たい。ホテルで打ち合わせ後バタン・キュー。

7月15日 デリー～チャンディガール

コンチネンタルスタイルの朝食をとって待機する。手違いがありVISA延長の手続きをすませないと出発できないという。昼食がすすんでもまだ出掛けられず手紙書きをして過ごす。14時すぎや々とスタート。まずIMFを表敬訪問する。けだるい暑さの昼下がりで全身ベトつく感じだ。そしてや々と本番、一路北へ、北へと向かう。

広々とした畑、民家、人の群れの繰り返しで、パンジャブ州に入るとバスは検問のために何度も停車させられる。40℃以上の熱気でムシムシ、ベトベトの身体を土ぼこりがくまなくつつんでくれる。ホテルPICADILYに着いたのは夜9時20分。シャワーをあびてから遅い夕食をとるが、疲れのせいか美味しくない。

7月16日 チャンディガール～マナリ

朝食前に町を少し散策する。2～3階建てのアパートが続きかなり清潔な感じがする。各戸にアンテナが立っているのでテレビはかなり普及しているのだろう。通学途中らしい自転車に乗った女の子が目につく。

今回のMr.ドライバーのハンドルさばきは、かなりアクロバットで昨日も随分冷や冷やさせられた。今日は平原から徐々に高度を上げて標高1,900mのマナリまで270kmを走る。高度差にして1,500m位あり、ヒマラヤ南麓の高原の町レーは避暑地の趣がある。午後7時や々と到着した。荷を整理してから賑やかな夜の町をひとめぐりして果物や水を買う。チベット系の人が多くなり、ヨーロッパからの旅行者もかなりいる。デリーから526

kmの平原の旅がおわり、明日からは山岳道路になる。

7月17日 マナリ～パッセオ

Manali 1,896m～Patseo 3,740m

マナリからレーまでの475kmの山岳道路がBCへ入る前の最大の難所だろう。グレートヒマラヤの山々や5,000m以上の峠を越えて車でも2泊3日かかるというのだから。以前はデリーから飛行機でスリナガルまで行き、車に乗りかえてカルギルを経由して最奥のタンゴール村まで2日で行けた。しかしインド北西部の政治や宗教の不穏な動きが活発化してきており、高度の点から危ぶまれながらもスリナガル経由をとらず、この軍用山岳道路に行くことになった。

カシミールの分離独立運動やイスラム教徒とチベット仏教徒の対立などは新聞の報道でたまに目にすることもある。私達は単純に山へ登りにきているわけだが、これからのグローバルな登山を考えると、相手国の政治や経済・宗教等についても、山に関することと同じように事前調査しておかねばならないだろう。

7時10分出発、電光型の道をぐんぐんと高度を上げていく。青いケシの花が多く見られる所だと聞いたが、霧の中で私には良く分らなかった。マルヒ(3,260m)で休憩する。茶店が数軒、牛や羊の放牧があちこちに見られ、のどかな風景である。スピーカーから聞こえる歌はインドの流行歌だろうか、ヨーロッパからのトレッカーも多い。

10時40分ロータンパス(3,978m)着。ガスっているがこんな荒れ果てた山中でも足許には可れんな花々が、わずかな砂地や岩の間から笑顔を見せてくれる。残雪はごく僅かだった。チャンドラ河の流れに頭から突っ込むのではないかとと思われるようなくだりで一気にコクサル(3,200m)までおりる。眼前にはセントラルラホールの雄大な山なみが、青空にシャープな線を描いている。いつか行ってみたい山々……だ。

コクサルでは車の故障を直すのに1時間以上も停車した。スピティ谷方面への道と合するここは

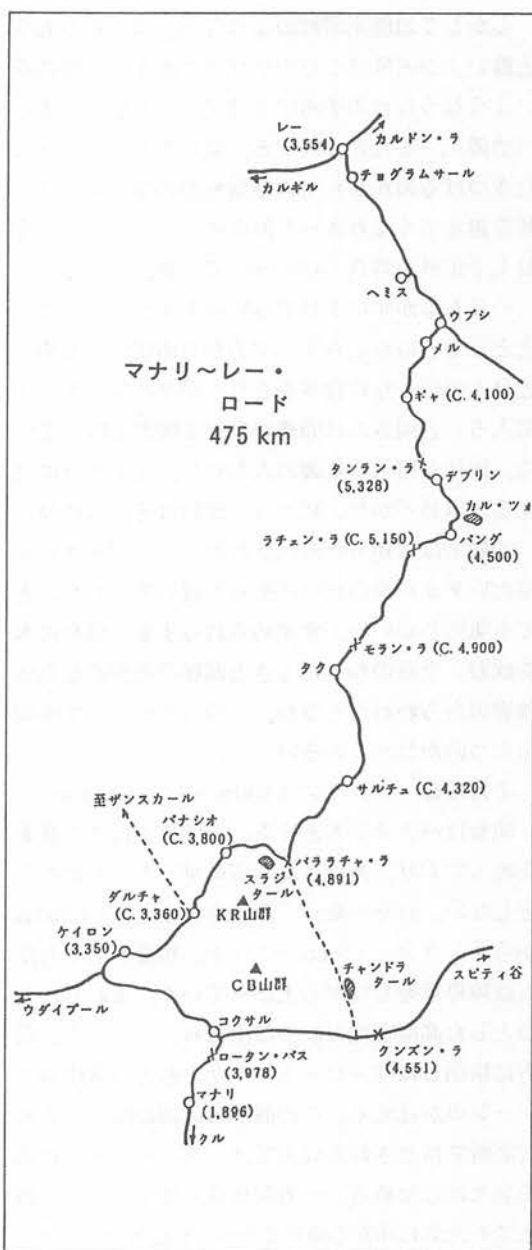
チェックポスト以外にも数軒の茶店があり賑わっていた。やっと走り出したかと思うとランチタイムでまた停車。(ここはインドなのだ、イライラするな。)と我が身に言いかけせる。

大きな山、深い谷の荒れ果てた山肌をたんねんにぬうようにひたすら走り続けた車は、バーガ河沿いにケイロン、ジスパ、ダルチャと通りすぎる。河を渡りまだ喘ぎながら山ひだを登り返して高度を上げていく。キャンプ予定地はジスパと聞いていたが、時間が早いので先へ進んでいるのだろう、と単純に思っていた。しかしこれが最初の事故(高度障害)の第一歩になったのではないかとあとなって思った。19時10分車はバーガ河源頭近くのパッセオ(3,740m)でやっと止まった。

丸一日の車の旅で疲れきった私は、夕食ができるまでテントの中でゴロンしていた。昨日と同じで夕食はどうしても食欲がわかないのだ。皆は大皿でモリモリ食べている。「スプーンに一杯だけごはんをよそって。」と頼んだら、中岡さんに「そんなに遠慮しないでどンドン食べて下さいよ。」と言われてしまった。今朝マナリでチャパティ4枚とたっぷりのヨーグルトを食べたので一日もったのかも知れない。しかし一日中車に乗ってこういう高所でキャンプするのは、何となく不安な気がする。10時30分シュラーフに入る。

7月18日 パッセオ 3,740m～デブリン 4,680m
朝食後羊の群れが2パーティー上がってきた。前後を男の人が守り、犬もいる。こんな荒れ果てた大地でも、どこかに良い草地があるのだろうか。下の方から何日もかけて、夏場はこの辺りの草地へ連れてくるのだろうか。食事は今朝も好調で、おかゆ、パン、目玉焼き、マンゴー等たっぷりと食べる。高度を意識してつとめて水分をとるよう心掛けた。血圧はいつもより高かった。(140/90)

バーガ河はいよいよ源頭の趣をなし、展開される山なみもいっそう迫力を増してきた。スラジ・タルの深い蒼い湖面に倒影される白銀の山々がすてきだ。バララチャラ(4,250m)は昨日越えたロータンパスより高いのだが、あたりは果てしなく広がる高原状なのでどうも実感がわからない。やがてサルチュ(4,340m)に到着。ここから先がジャム&カシミール州である。



しかしこの廃車同然のようなバスは、もうもうと舞い上がる砂ぼこりのデコボコ道を、悲鳴に近いようなうなり声をあげて走り、何度も止まり（故障）、また走り続ける。果してこれでレーに行きつけるのかしら？ 再び電光型の急登となり、峠を越えてくだりきった河原にキャンプする。今日も予定外の地点（4,680m）での幕営である。

一步も歩かずに1日で900mも上がってしまうとどうなるのかしら？ 夕方から頭痛がしてやっとはんの少しだけ食事をとり、早々とシュラフに入る。吉岡さんは頭痛がひどく酸素を吸っている。他にも何人か不調の人がいて、元気そうに見える人はわずかだ。私だって最初はそんなにひどい頭痛ではなかったのだけれど……。関根さんが冷たいタオルをひたいにそっと置いてくれた。とても気持ちがいい。すすめられるままに懸命に水を飲む。全身のかったるさと頭痛は典型的な高所障害のあらわれだろうか、うつらうつらして時間のたつのがひどくのろい。

7月19日 デブリン 4,680m～レー 3,500m

朝食はバナナ2本と紅茶。吉岡さんはまだ酸素を吸っており、滝口さんも車に乗ったきり動こうとしない。何だか変だ。車はラチュンラ（4,950m）からタンランラ（5,250m）へと、相変わらず何度も故障停車をしながら上がっていく。まわりは荒涼とした高原台地のような山なみだ。——と、前方に横倒しになったトラックが1台と作業中のクレーン車が見える。この最悪の体調の時に、こんな高所で待たされるなんて！ モーローとした頭を必死になだめる。一方関根さんはタンランラ越えでも元気に車から降りてチベット仏教のチオルテ

ン（お堂）などの写真を撮っていた。

しかし不思議なもので、峠を越えて高度が下がるにつれて頭痛も少しずつおさまってきた。ウプシへ着く頃にはかなり軽くなってきた。夕暮れの谷間の道から高原へ出て、やっとなら町の町へ近づいてきた。しかし苦しかったこの峠越えで3人も病人がでてしまった。

レーはラダック地方の中心地でチベット仏教文化が色こく残っている。ラダックとはチベット語で“峠のある所”という意味で、ヒマラヤ山脈とカラコルム山脈にはさまれた峻険なこの地に、古くからの仏教文化が残されているというのは驚きに値する。夕食後絵はがきを買いに出たが、7時半で商店はほとんど閉まっており、銃を持った兵士が町のあちこちに立っていた。やっとなら町の町では何と日本語が通じた！

7月20日 レー滞在

5日間の車の旅を終えて今日はチベット仏教の寺院（ゴンパ）を見学に行く。850年前に建てられたというヘミス・ゴンパは、山中にあるにもかかわらずかなり広い。又帰路には廃虚に近いようなシェー・ゴンパを訪れた。

ホテルに戻り昼食をとる。体調の良くない3人（滝口・吉岡・森山）の入院さわぎで、残念ながら王宮跡見学はとりやめになった。どんな病状なのか少しも分らない。夕方町中を散策する。田村さんが靴を一足買った。中山さんはサンダルの底の張り替えを頼んでいた。中岡さん・井上さんは病人の対応に忙しそうだ。2～3日は入院して様子を見るとのことで、明日は一応9名でカルギルへ向かうことになる。

多難のベースキャンプ入り

井上博之

7月19日 レー到着

ホコリと汗と高度障害の長旅を終えてホテルでシャワーを浴びると夏場の山行には馴れているはずのわれわれでも、さすがにホットした気分になる。

シャワーは水だけでお湯が出ないとか、一晩中ホテルの電灯がつかないとかと文句を言うのは、ここでは贅沢というものだろう。バスでの移動中に身体の不調を訴えて酸素吸入を受けていた吉岡さんと滝口さんの2人を病院に連れていく。

レーでは唯一といえる公立総合病院の、その日の夜の担当医は小声でボソボソと話す、なんとも頼りない若いお医者さんであった。『2人とも軽い高度障害であって、心配はない、似たような患者はよく来る』ということで、特に治療も受けずにホテルへ戻る。高地をひかえた場所柄、こうした診断には馴れているのであろうと推測する。

7月20日

体調の良い者はGOMPAとSHEY PALACE見物へとバスで出発。

GOMPAは町からかなり離れた山中にあるチベット仏教のお寺だ。

砂漠と岩山の彼方の不便なところに、よくもこれだけの物を建てたものだ。これと言った文化遺産の少ないこの地方では貴重な共有財産であるのに違いあるまい。

厳しい自然環境の中では、泥土で作られた仏塔も、建物も、どんどん風化していくので、あとからあとから作り代えなくてはならないようだ。財政的な余裕がそれほどあるとは思えない彼等にとってけっして容易な事業ではあるまいが、ここGOMPAのみならず、各所で補修または新築された多くの仏塔や寺院を目にすることが出来る。チベット人がいかにチベット仏教を愛し、誇りとし、かつ心の支えとしているかがうかがい知れる。

チベット仏教のシンボルとしてのダライ・ラマの写真は、バスのなか、タクシーのなか、茶店のなか、民家のなかなど、いたるところでおめにかかれる。われわれには理解できないほどの尊敬と敬慕の念

を受けているらしい。いまは祖国を追われているので、よけいに人々の信仰を集めているのかもしれない。

SHEY PALACE は、池を前にした小山に建てられた、かつての宮殿というが、既に大半は泥土と石の廃虚と化している。現在一部が修復されてチベット仏教の寺院として機能しており、参拝者を集めている。そこでは、子供のラマ僧達が拝観の案内をしていた。彼等は一生結婚はしないのだそうだ。日本にも居るような元気で明るい普通の子供達だ。拝観料の集金は10才ぐらいの年長の子が慣れた様子で、無料で入り込む不届き者が一人もいないように、しっかりと集金をやっていた。多数の経典が納められている部屋では、その子がきちんと包んである厚い布の包みを開いて丁寧に書かれてある経文を取り出し、得意げに読んで聞かせてくれた。勿論われわれにはチンブンカンブンでさっぱり分からないのだが、わけの分からない文字のうえを指でなぞり、子供ながら、もっともらしく唱読してくれると、なんだか感心してしまう。13:30 ホテルで昼食

スパイスとニンニクがよく効いた野菜スープがでる。

森山さんの調子が悪いと言うので、病院へ一緒に行くことにする。今度は院長風のしっかりしたお医者さんと美人の女医の2人だ。

ニューデリーの旅行代理店から派遣されて、われわれに同行しているクマール氏が、まずいろいろと医者に私見をまくしたてたところ、院長風から『診断は医者がするものだ。君が診断するのなら、病院に来てもらう必要はない。ひきとってもらって結構だ。診断を受けるつもりなら医者の質問に対してのみ答えてもらいたい』ときめつけられる。ごもっともである。

昨日の見立てとは違って、即入院となる。肺水腫とのこと。

絶対安静、トイレに行くことさえも禁止される。勿論酸素マスクは外せない。信頼出来るようなお医者さんなので、吉岡さんと滝口さんの病状と昨日

の医師の見立てについて話し、2人をもう一度診てもらいたいと頼む。

早速2人にホテルから来てもらう。

滝口さんにはチアノーゼ反応があり、爪の色は白っぽく、顔色も真っ青だ。手首にも相当な腫れがある。

レントゲンの結果は、いずれも肺水腫で、滝口、森山、吉岡さんの順で症状が悪いという。

吉岡さんの場合は初期の段階で本人が異常を訴え、早めに酸素吸入の処置を受けたのがよかったらしい。

私たちが廊下でおしゃべりをしていたところ、絶対安静のはずの吉岡さんが突然寝たまの姿で廊下に飛び出てきた。

ベッドの上でコキジをうっていたところ、し瓶に付着していた消毒液が彼の局所の先端に着いてしまったという。

強烈な痛みであったらしい。

本人は勿論だが、こちらもびっくりした。

水で直接局部を洗うのが一番だとは思ったが、州都一番の大病院なのにバスもシャワーもない。やむを得ずバケツに水を汲んできてもらい、たまたま私が持っていたタオルを水に浸して自分で拭いてもらうことにした。

吉岡さんは何度も何度も痛みを訴える。真剣だ。

担当の美人女医は『アレルギーだからそれ用の注射をするのが一番だ』という。強い薬品による皮膚の炎症が注射で直るとは信じ難かったが、注射を打たれるご本人は必死になってそれを拒む。注射は非衛生的な取扱いが原因で二次感染の恐れがあるのだ。女医はくすりの効果に疑問を持たれたと勘違いしたのか、あるいは医者への誇りを傷を付けられたと思ったのか、凄惨な剣幕で、執拗に注射を打つと言ってきかない。吉岡さんに言わせると、患部を見もしないで、どうして診断できるのかということだが、美人女医はなぜか、もう診たと言い張って、診察しようとはしない。いろいろなやりとりの末、なんとか注射だけはかんべんしてもらったが、炎症に対する治療は受けられなかった。患部はかなり変色してしまったという。後遺症がなければよいが。

医師によれば『病院には1.5リットルの酸素ボ

ンベが3本しかなく、しかもそれには酸素が十分に入っていない。常時使用を必要とする患者が3人も出たのでは、酸素が無くなるのは時間の問題だ。レーでは酸素が手に入らないので、よその町から取り寄せることにする』と言う。経費を度外視してでも緊急に手配をしてもらうように強く要請する。

われわれの隊が日本から持って来た3リットルボンベ6本のうち4本は既に空になってしまっており、あと2本しか残っていない。これから先きの山行を思うと不安が残る。われわれの空ボンベ2本にも一緒に充填してもらうように頼む。なんとしてでも、酸素だけは是非手配してもらいたいと、祈りたい気持ちだった。

3人の容態が相当に悪い場合には、医者とのコミュニケーションを助ける人が必要であろうから、その時には登山をあきらめて病院に残るようにとクマール氏から要請を受ける。

観念して院長風に申し出たところ、『生命に別条はなく、今後病状は悪化しないだろう。井上が居なくても診療に支障はない、先へ行きなさい』と言われる。3人の身の回りの世話をするために、キッチンボーイのパサン・シュルバ君だけはレーに残ってもらうことにする。

森山さんから重ねて『どうしても登山を続けたい。お医者さんにくれぐれもこの事を訴えてほしい』と頼まれ、その旨伝えたが『彼の症状は外見以上に悪く、高度への挑戦は自殺行為である。帰国後も日本の医者の診断を受ける必要があると思う』と逆に説得される。

中岡隊長は『入院中の3人は、今後登山を続ける場合も、中止する場合にも常に一緒に行動すること。1週間以内に医者への承諾が得られれば、3人は一緒にベースキャンプまで追って来ること。1週間経っても許可がおりないようならデリーに戻る。10日経っても回復しない場合は帰国すること』との指示を与える。

交通の便が悪いこと、バラバラに行動された場合隊は個々に対する目配りが困難であること、予算が限られていること、などを考えると、隊長としては立場上つらいが、やむをえぬ決断であったと思う。

7月21日

7:30 ホテル発 ~ 19:10 カルギル着

延々とつづいた茶褐色の世界のなかに緑のオアシスが現われるとそこはカルギルだ。おおきな川に面したベランダ風廊下のある二階建てのホテルでゆっくりとくつろぐと、リゾートの保養地にも来たような気分になる。何よりも食事がうまい。コック長を食堂に呼び出して皆で拍手をおくる。

7月22日

早朝クマール氏が規定によりカルギル警察署に登山許可申請書を提出したところ、最近その記載方法および必要添付書類についての変更があった、とのことで書類は受理されず再提出を要求されたという。

急遽あらためて書類を作成することになった。

おおあわてでやっと書類を作りあげたところ『今日はイスラムの休日』とのことでタクシーが無く、やむなくクマール氏は歩きで遠く警察署まで行くことになる。(なぜわれわれのバスを使わなかったのかは不明)

11:00出発のところ結局15:30発となる。

18:30 軍隊によるいつものチェックポイントで停車中、左後輪のボルト3本が折れていることが発見された。これではもう走れないという。

山道で何度も何度も車を止めては振動で緩んだボルトを締めていたから、とうとう力で振じ切ったのかもしれない。不用意にも、予備のボルトを持って来ておらず、近くにパーツショップも無い。ボルトを手に入れるにはレーまで行かねばならないという。これまで度々の故障続きでいららさせてくれたポンコツ車は、とうとう使い物にならなくなってしまったのだ。やむなく今日はタンゴール行きをあきらめて、近くの宿泊所に泊まることにする。

月明りの村道をヘッドランプをつけて30分ほど歩く。

20:30 パニカル着

そこはベッドが2台ずつ置いてある部屋がいくつかある比較的きちんとした宿舎だ。公務員用の宿だという。ただ現在は無人のために電灯がつかずヘッドランプが頼りだ。1部屋に3人ずつ寝ることにする。

夕食は外部から用意することので、すきっ腹を我慢して遅くまで待ちに待つ。テントでのヘッドランプ生活は、むしろアットホームな気になれるが、広いホテルは言うに及ばず、この程度のこじんまりした宿舎でも、闇の空間が多い建物の中では気がはずまない。皆でテーブルを囲んでも話とは切れがちだ。

7月23日

7:45 パニカル発 ~ 9:00 タンゴール着

個人の荷物は各自、共同装備はトラックでタンゴールまで運ぶことになる。バスで行くはずのところ、タンゴールまでの車道を荷物を担いで歩かされるはめになり、損をしたような気分になる。

それでも、ひさしぶりに歩くわけで、習性により、だんだんと足に弾みがついてくる。ヌンはもう遠くない。体調も良い。

パニカルの村はずれにはめずらしい花が咲き競っていた。

タンゴールで集結。『いざベースキャンプへ!』と張り切っていたところ、突然クマール氏が『今日はイスラムの休日だからポーターが集まらない。したがってベースキャンプへは行けない。今日はタンゴール泊まりだ』と言い出す。これまでに自動車のトラブル、登山許可申請書の作り直し、病院での不手際等々腹に据え兼ねる問題がいろいろとあった後だけに、わたしもつい激昂して『イスラムの休日など事前に分かっていたはずだし、ポーターとの交渉などもあらかじめ済ませておくべきだ。帰国の日程が動かせないことから、登山の行動期間は限られており、1日の遅れが隊の登山目的の成否に係わる可能性があることは、登山隊への協力斡旋を業務とするシカル社は、当然承知している筈だ。今更ポーターがあつまりませんで済むと思うのか』と言葉荒く大声でなってしまった。

あとで冷静になってみると『クマール氏はこれまでわれわれのために出来るだけの努力をしてくれた。これは認めなくてはいけない。インドで日本流に物事を進めるように要求することは無理難題を言っていることになるのかもしれない』と反省して、言い過ぎたことは謝った。

しかし、その時はなんともやり切れない気持ち

になっていたことは事実である。はやばやとタンゴールにテントをはる。

いろいろあったが停滞してみるとタンゴールは悪くなかった。

ここは高山の花の楽園だ。クン峰がみえる。神々の山と呼びたくなるような秀麗なヒマラヤの山々が姿を見せる。

時間があるので、自然のお花畑に飛び込み、花の上にかがみこんだり、手前で寝転んだりして、夢中になってシャッターを切る。

皆と囲碁、将棋、トランプ、などに打ち興じ、夜は降るような星と明るい月光の下で合唱を楽しみ、ハモニカをふく。

20:00 クマール氏がパニカルから戻ってきた。明日のポーターの手配がやっと出来たという。本当によかった。

7月24日

朝、起床時には目覚ましのために、それぞれのテントまでキッチンボーイが暖かい紅茶を持って来てくれる。リッチな気分になる。

パニカルからは既に荷物がポーター達によって運ばれてきていた。

ところが、わがクマール氏がポーターの代表と現地の言葉で盛んに口論しているではないか。聞くと、何でもポーターが15キロしか担がないと主張していて、プラバールなどそれぞれの梱包の重量が重過ぎるので、小さくして欲しいと要求しているという。

さてはポーター代を値切ったのかと勘ぐったが、この際議論を続けて時間をロスするよりはと、みんなで梱包をし直すことにした。

普通ポーターは25キロから50キロは担ぐものだという判断にもとずいて、日本で梱包して来たのだから、これは問題である。今後の海外遠征の参考にして欲しいと思う。

秤が無いのにどのようにして重量を計るのかと案じていたら、これは簡単で、おおよその重量調整をした荷物をクマール氏が持ち上げて、『よし』と言って1人ずつに手渡せばよいのだ。

ザックを含めて荷物に直接マジックで番号をふ

り、ノートにポーターの名前とその番号を記入していく。番号通りの荷物がベースキャンプに運ばれたのを確認してから、ポーターに代金を支払うというシステムになっている。

15キロの梱包が出来た者から逐次出発するので、楽しみにしていた堂々たる隊列を組んだいわゆるキャラバン隊とは異なって、三三五五とまとまりの無い行列になってしまった。

ローティーンの子供ポーターも混じっている。

日本人隊員もいくつかのグループに別れて出発する。

わたしはリエゾンオフィサーのシン氏と行くことにする。ここでは荷物を持たずに手ブラで行けるので楽だ。登山道もしっかりしている。しかるにシン先生は『近道がある』と言って、登山道を離れてさっさと稜線に向かった。あわててあとに続く。結局とんでもない所へ出てしまい、急斜面を恐る恐る降りるようなことになってしまった。苦勞してなんとか登山道へ戻る。

シン氏は登山学校の教師をしている山のベテランと聞かすが、今回はついにベースキャンプより上には登ろうとしなかったし、ベースキャンプへのこの楽な登山でもゼーゼーと言って休んでばかりいた。本当にクライマーなのかと首をかしげたくなる。

途中振り返ると、眼下に遠くタンゴールが緑と花の桃源郷のように見える。とても、そこにあの貧しい生活があるとは思えない。あたり一面には、紫、エンジ、白、黄色などの花で一杯だ。エーデルワイスも咲いている。

羊の群れを追っている子供が手を振って送ってくれる。

10:00 タンゴール発 ~ 15:20 ベースキャンプ到着

大分遅れてコルへ到る。ここからはベースキャンプ、氷河、そのむこうには白い氷雪の山脈が展望出来る。

ついにヒマラヤの末端に到達したとの実感が沸く。

コルからベースキャンプへと一気に下る。

登山日誌

中岡 久

C1建設からC2建設まで

7月25日

隊荷が全部集まっていないので、BC整理ということで関根副隊長と沢田隊員にはBCステイをお願いし、残り7名の隊員と3名のハイポーターでC1への荷上げを行う。

出発前に安全登山の祈願を行う。左方正面にD41峰を望みながらセンチック氷河をゆっくり登る。センチック氷河が左に回り込むようになると右岸の大岩壁を目指して登って行く。その大岩壁の基部をC1とした。高度約4,900m。1987年の女子隊と同じ場所である。

7月26日

今日よりパーティをルート工作隊と荷上げ隊の2隊に分けて行動する。

ルート工作隊(橋本・田村・中山)はC1に上がり、アイスフォール帯を突破(フィックス6P 300m)し、スノープラトーに上がり、C2予定地(スノープラトーの奥、高度約5,350m)を確認し、C1へ戻る。

荷上げ隊(中岡・関根・伊藤守・井上・沢田・伊藤英)はハイポーター3名と共にC1への荷上げを行い、BCへ戻る。伊藤英は調子悪く4,400m地点に荷をデボし、引き返す。

7月27日

ルート工作隊はC1からC2へ荷上げし、BCへ戻る。荷上げ隊はハイポーター3名と共にC1への荷上げを行い、BCへ戻る。伊藤英は、不調でBC滞在。

レーに入院していた瀧口・森山・吉岡の3隊員は退院し、この日タンゴールまで入ることができた。

7月28日

ルート工作隊、荷上げ隊共全員BC滞在。この日、昨日タンゴールまで入ってきた3隊員は無事元気でBCに入り、一週間振りに全隊員が久しぶ

りに顔を合わせることができた。ホッとしてBCはいつにも増して賑やかになったような感じがした。

7月29日

ルート工作隊、荷上げ隊全員及びハイポーター3名でC1に上がる。以後C1はABCとした。瀧口・森山・吉岡の3隊員は様子を見るためBC滞在。

7月30日

ルート工作隊、荷上げ隊5名及びハイポーター2名でC1からC2へ荷上げし、C1へ戻る。沢田は不調でC1からBCへ降りる。今一つ順応が完全でないようだ。瀧口・森山・吉岡はC1往復をするが、森山は、調子はやはり今一つのようなのである。



クン峰

7月31日

ルート工作隊はC2へ上がり、C3への工作を行い、C2へ戻る。C3(岩の双耳峰—通称カニのハサミを回り込み、下降したコル、高度約5,900m)まで、特にカニのハサミまではかなりの傾斜の雪壁を登攀することになるのだが、雪の状態が非常に悪く、ほとんどフィックスを張るようになる。今回1,800mのフィックスを用意したのだが、これから先のことを思うと少し心配になる。

荷上げ隊はハイポーター2名と共にC2への荷上げを行い、C1へ戻る。

沢田は再度BCからC1へ上がり、瀧口・森山・吉岡は再度C1往復をする。

8月1日

ルート工作隊は前日に続きC3へのルート工作を行い、予定地まで達し、C2へ戻る。

荷上げ隊はC1からC2へ入るが、中岡・伊藤英はC1で滞在。伊藤英は、どうも新しい高度を経験すると翌日は調子が悪くなるようだ。

沢田は再度C1からBCへ降り、瀧口・森山・吉岡はBCからC1へ入る。

※ このようにして、C1建設からC2建設まではアイスフォールの突破、広大なスノープラトーの横断、そして並行してC3へのルート工作と一步一步着実に進めていった。

C3建設からC4到達まで

8月2日

ルート工作隊は、さらに前日に引き続きC3を確定し、C2からC1へ戻る。

荷上げ隊（関根・伊藤守・井上）はC3への荷上げをし、C2へ戻る。中岡・伊藤英はC1からC2へ上がる。

瀧口・森山・吉岡はポーター2名と共にC2を往復する。順応の遅れている3人だが、出来得る限り上部に行ってもらいたいと思うが、森山はいかにも苦しそうだ。あまり無理はさせられない。沢田はBC滞在。

8月3日

荷上げ隊はC2からC3へ荷上げし、関根・伊藤守・井上はC2からC1へ戻る。中岡・伊藤英はC2に留まる。荷上げ隊の順応をより確実にするためだ。

ルート工作隊はC1で休養だが、元気の良い中山はBCまで下り、休養した。

瀧口・吉岡は前日に続きC2を往復したが、不調の森山は、やはり調子が悪く、体が浮腫み出したのでC1からBCに降りた。入れ代わりに沢田がBCよりC1に上がってきた。

8月4日

C2に留まった中岡・伊藤英はC3へ荷上げの後、C2からC1へ戻る。C2へ戻ると天幕・食糧等がカラスに荒らされ、悲惨な状態になっていたので整理してC1へ戻る。

ルート工作隊は橋本・田村がC1から、中山がBCからC2に上がる。

BCに残る森山を除く他の隊員はC1で休養。

8月5日

ルート工作隊はC2からC3に上がり、C3を完成させ、さらにC4（上部スノープラトー上、ヌン南西壁の基部、高度約6,400m）への工作を開始した。

荷上げ隊及び瀧口はC1からC2に上がる。沢田はC1に残り、吉岡はBCに降りた。

8月6日

ルート工作隊はC3から懸垂氷河を縫って上部スノープラトーに出てC4予定地に到達した。C4までは傾斜はあるものの距離は短いため、比較的楽である。C4に到達した後、アタック体制に備えるため一気にC1まで下った。

荷上げ隊はC2からC3へ上がる。瀧口も根性でC3に達し、満足してC2まで戻った。一時はBCだけでもと思っていた3人の中で、最初にC3に達したのだからやはりさすがというべきだろう。沢田はこの日初めてポーターと共にC1からC2に達し、眼前にヌンの全容を仰ぎ見ることができた。

8月7日

C3に泊まった荷上げ隊はC4まで荷上げし、



C3上の懸垂氷河

一気にC1まで戻った。

龍口もC1まで下り、沢田は昨日に続き、再度C2を往復した。

アタック

8月8日

アタックの人選は隊長を一番悩ませる問題であるが、今回はルート工作隊と荷上げ隊の2パーティが最後までほとんど交代することがなかった。そのため、この2パーティがそのまま第1次隊・第2次隊として2日の休養の後、アタックすることにした。隊長としては2次隊の中から若干はこぼれる者が出るかなと思っていたが、全員最後のアタック体制まで行けたことは幸いだった。

この日は全員C1にて休養。明日からのアタックに備えて、各人思い思いに過ごす。その中で余裕か吉岡・中山はBCを往復してきた。

撤収のこともそろそろ考えなくてはいけないので、BCにずっといるL・Oには定期的に状況連絡をしていたが、この日、アタック日程・撤収予定を報告し、ポーターの手配等を依頼した。

8月9日

第1次隊3名（橋本・田村・中山）はヌンの頂き目指して午後出発。吉岡も出来るだけ高みへということで、C3目指して同行する。

第2次隊と沢田はC1で休養。龍口は連絡等のためBCへ降りる。BCには森山が3日以来ずっと滞在している。

8月10日

夜半から今回の登山中初めての降雪となり、C1では20cmほども積もり、白一色の世界となる。そろそろ天候も崩れる兆候なのか。アタックを前にして不安さが増してくる。しかし、日程の都合上、第2次隊5名（中岡・関根・伊藤守・井上・伊藤英）も午後出発する。

C2でもかなりの積雪となり、第1次隊はやはり逡巡していたが、結局停滞とし、第2次隊が上がってくれば明日はC4を目指すこととした。

第2次隊は風雪のアイスフォール・スノープラトールを越えて予定通りC2に入る。このためC2

は9名となり、風雪の中、狭いけれども楽しい我が家となった。

しかし、この日C1に1人残った沢田に危難が起こっているとは誰れも考えられなかった。

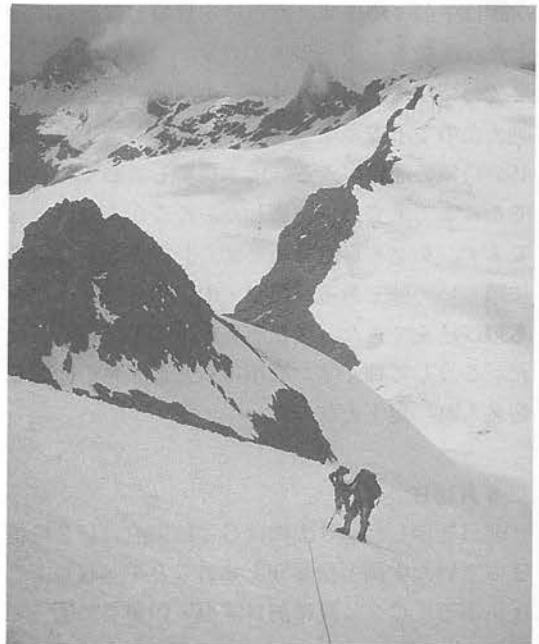
8月11日

風雪一過、今日は快晴であった。C2に宿泊した9名全員上部を目指す。第1次隊はC4を、2次隊はC3を、吉岡はC3往復を。これが最後の登り、後は下るだけだと思いながら。

今日は元気な伊藤英をトップに第1次隊・第2次隊・吉岡と続く。C2の天幕は昨日の風雪で1幕は傾き、1幕はつぶれていた。C3はよほど風が強かったのだろう。2次隊と吉岡で整備する。吉岡はC3まで上がった嬉しさで一杯だ。ともかく最大限の努力をしてここまで上がってきた。後は今後に期待しよう。そして彼は下っていった。第1次隊は、さらにC4目指して登っていった。

8月12日

少し風が強いが、今日も良い天候である。第1次隊は4時に出発する。しかし状態の悪い南西壁に手こずり、西稜の顕著な大岩の所に出たのは、11時近くになってしまい、今日中の登頂は困難とのことで、引き返した。約6,700mだった。明後日



カニのハサミへ（5,700m）

の再アタックに期待をかけて。

第2次隊はC3からC4に上がりながら南西壁に展開する第1次隊の様子を見ながら明日の我が身を思う。C4にて第1次隊と第2次隊が合流、交代する。

8月13日

第2次隊、午前5時出発。昨日の第1次隊と同様に南西壁に取付き、大岩を目指す。第1次隊のフィックスのお蔭で9時過ぎには西稜の大岩に達した。しかし、ここから望む西稜は稜線の状態が非常に悪く、5人一緒に登攀するには無理だった。関根副隊長がそれでも1ピッチルートを伸ばしたが、引き返してきた。ここで潔く登頂は断念、約6,700mだった。

第1次隊は、再度のアタックを期してC4に入る。ギリギリの日程である。登頂の有無は明日1日に賭けるしかない。

中岡・井上がC2に降りると、瀧口隊員が登って来ていた。聞くと、沢田隊員が顔面に火傷を負い、タンゴールまで下ったとのこと。10日夜1人C1に残った沢田は夜半強風にテントを焼かれ火傷を負ったとのことだった。しかし、話をよく聞くと重症ではないとのことだったのでホッとする。

8月14日

最後のアタックの日は快晴の内に明けた。第3次隊は午前4時出発。南西壁を登攀し、西稜に達した。西稜を一步一步スタカットで登攀する。C2で待機していた隊長は8時の交信以後連絡が途絶えたので不安が増してきた。しかし、午後1時45分待望の通信が入る。橋本登攀し「意地でここまで来てしまいました。ここから先は下ってます。クンも良く見えます。」隊長として本当に嬉しい一瞬である。田村・中山の元気そうな声も飛び込んできた。後は無事に下るのを祈るだけだ。こうして輝くヌンの頂は新たに3名の仲間を迎え入れ、足下となった。

8月15日

前日登頂した第3次隊はC4に宿泊。C2に留まっていた中岡・伊藤守と共にC2を撤収してC1に下る。C3は既に前日関根・伊藤英によって撤収されている。上部にはフィックスを除いては



南西壁の登攀

一切のものを残さないようにした。

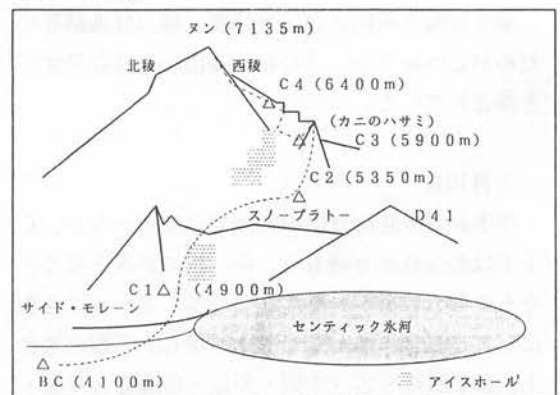
C1も既に撤収準備が始まり、明日にはC1を撤収することになっている。

8月16日

C1を撤収して、上がってきたハイポーター2名と共にBCへ降りる。C1全部の荷を持つと大変な荷である。重荷に喘ぎながらBCへ。C1をABCとして使用していたので、BCは久しぶりである。L・Oに感謝の意を表する。BCのみで上に行かないL・Oは本当にありがたい。シカールのアレンジャー、A・クマール他コック、ハイポーターにも感謝。

火傷をした沢田隊員は、既に井上隊員と共にカルギルまで下った。最後のBCを皆思い思いに過ごす。

ルート図



場所	フィックス	メートル	支点その他
BC→C1	0P	0	
C1→C2	8P	400	スノーバー、ポイントフラッグ
C2→C3	21+2P	1150	スノーバー、アイス・ロックハーケン
C3→C4	2P	300	スノーバー、ポイントフラッグ
C4→西稜	8P	400	アイスハーケン
西稜→頂上	0P	0	スノーバー、スタカット12P
合計	41P	2250	

注 C3～C4のフィックスは、ノルウェー隊の残置(1P=150kg)を荷上げて使用。

登 頂 記

田 村 正 勝

8月9日午後も後半、橋本登攀リーダー、中山、田村の一次アタック隊と吉岡は、C1からC2へ。途中から雪がちらつきだし、夜は風雪となる。明けて10日、風雪止まず、新雪は30センチに達した。よりによってここに来てはじめての悪天である。昼頃まで様子をうかがうが、ときおり晴れ間にヌンが見えるものの、風強く視界が悪い。逡巡しつつ微妙なところで停滞をきめる。ここから無線は通じない。2次隊は登って来るだろうか？ 関根さんだもの、五分五分で来る……はたして16時頃、プラトーの彼方に黒点が現れ、やがて寒空の下を関根さんを先頭に次々と到着。この夜は1幕5人の窺屈な眠りとなった。

11日、快晴。1次隊はC4、2次隊はC3までということでそれぞれ出発。若手伊藤がラッセルを買って先行し、1次、2次隊と続いた。若手伊藤と1次隊は昼頃C3に到着。案じていたが、昨日の嵐で1幕は傾き1幕は無残に潰れていた。東風が束になってこのコルを抜けたのだろう。始末は2次隊にお願いし、1次隊は先行する。フィックスロープの掘り起こしぐらいで、あとはたいしたことなくC4着。テントは無事だった。除雪をし、南西壁を眺めて明日のルートを確認する。それぞれくたびれてこの日はこれまで。暮れて風が出、明日が危ぶまれるほど、テントを叩き、夜通し吹き荒れた。

12日、快晴。3時起床で4時出発。風は止まないものの、外に出ると満天の星である。かなり寒い。地吹雪にさらされながらキジを済ませ、ランプをつけて出発。プラトーを進み、南西壁に達して、基部を走る小セラック帯からロープを施す。ルートは過去の隊に同じ、西稜岩稜帯上部の顕著な大岩目指して左上トラバースし、西稜に至るもの。傾斜はきつく、表面がクラストしたがりがりの氷壁で、支点にスノーバーは使えない。カルギルで擦れ違ったノルウェー隊敗退の因だろうか。2ピッチほど行って白々と明けてくるが、あいかわらず風は強く、トップをゆく登攀隊長の様子がひどく寒そうだ。6ピッチ工作してロープがなく

なり、前日回収したノルウェー隊のナイロンロープを引いて西稜に抜ける。取りつきから見上げる西稜は、厚くクラストした不安定な氷の盛り上がりで、この先かなりやりにくそうである。しかもすでに11時であり、隊長は時間切れと判断、撤退と決定した。あさって再挑戦と聞いてほっとし、次の成功を期待して下る。C4で明日アタックの2次隊にテントを明渡し、下ってC3で待機。

13日、快晴。8時過ぎテントから出てみると、2次隊が南西壁に展開していて、一部は西稜に達している。やがて集結。9時過ぎ、しばらくして下りはじめた。どうしたのだろうか？ これも時間切れか。辛い決断だったのだろう。われわれはC4に上がり、入れ代わり2次隊は麓に下った。思いを断ち切るようにどンドンと降りて行く。もう上がって来ることはないのだろうか……

14日、再アタック。4時出発。そよ風に星がまたたき、文句なし。南西壁トラバースのフィックスロープを伝って行くと、やがて夜があげて来、西方の峰々が赤く輝き出す。荘厳な一時だ。ヒマラヤの真っ直中で行動中という実感がいやがうえにも迫って来、脇の下を汗が流れた。ついこの前まで極東の片隅で影も薄く燻っていたものが、いまこうしてここにいるということの不思議さと思う。上部登攀用にフィックスロープを2本外して持って行く。例の大岩の上に7時頃着。上々だ。1ピッチ直上して西稜に出た。木の角材の残置支点があり、ここから西稜の登攀開始。隊長がロープを引いて先を行き、固定してこれを中山に登り、着いて隊長が先を登り、同時に田村がラストを行くという繰り返し。時間はかかるが安全第一というものだろう。案に相違して雪稜の状態はよく、一直線にのびる稜線をただひたすらに登るだけだ。とはいうものの、これが7千メートルというやつか、意識して呼吸をしながら登るが、10歩も行くとしんどきに足が止まってしまう。頑張ってはいるのだが時間は容赦なく先に行き、制限の11時半はとうに過ぎた。もどかしくて仕方がない。続行と聞いて安心し、嬉しくなる。登攀隊長にはなにが

なんでも登頂しなければならぬ訳があるのだそう
だ。訳はどうあれ、それに引っ張られて登頂で
きたわれわれは幸せであった。私はといえば、勝
つて来るぞと勇ましく誓って国を出たからにゃー
あえぎながらもこんな歌が出てしまう。これは余
裕なのか、やけくそなのか？ 父親の、山西省の
山地を行軍する写真を思いだす。いやはや、昔は
戦争、今はヒマラヤ。かくしてここは、なにがし
3%の戦場というわけだ。我は遙かヒマラヤの何
を好んで3% — 全く嬉しくてしかたがない。

ともかくも、いよいよ上部の露岩脇に達して傾
斜が落ち、ほっと一息。どうやらこれで登頂は確
実だ。小さな岩場を越え、短いナイフリッジを渡
って、隊長は振り返った。山頂だった。13時半着。
登れてよかった、これで大手をふって帰れるぞ！
これが正直なところであり、この安堵感がたまら
ない。続いて中山も到着。握手。旗をひろげて、
はじめての儀式。なんとなく信じがたい気分があ
るものの、これは本当なのだ。改めて眼下の四方
を見回し、足元から地平の果てまでぼうぼうと広
がるヒマラヤの荒地に感じ入る。あれらの巒の間

をはるばると縫って来てここに収斂したのであり、
確かにここは世界の頂点だ。無風。ぼかぼかと暖
かく、眼鏡を外して真っ白な眩しさにひたる。と
はいえ、こうした感動の一方、降りてしまった人
達のことを思うと、残念であり、心が痛む。どう
考えればよいのだろう。隊長から無線機を渡され
たが、下からの呼び掛けに、言葉がなかった。そ
れに声がかすれ、泣き声になりそうで、ありがと
うございました、としか言えなかった。



7,135mにて 田村(左)、中山(右)

ヌン峰登頂

中山裕朗

C4上部、南西壁の登り。

「調子悪ければ戻ってもいいんだぞ。」と橋本。
慌てて首を振る中山。本人は、とりたてて調子が
悪いとは思っていない。

西稜の登り。息が苦しく口を開けて呼吸する。
低温の空気が突き刺さり舌が痛い。首回りが寒い。
登りながらアンザイレンしていたロープをまとめ
る。ちょっとしたロープワークがかかったらしい。快
適なイメージで登っているとは言えず、気持ちは
イライラしていたと思う。

山頂は狭くりッジ状、岩が少し出ている。先に
着いていた橋本、田村と握手。

「これからが大変だぞ。」と橋本。

「田村さん、やったね。」と中山。

田村と中山は、初めての7,000m峰の頂上だ。
「無線は(終わったの)?」と聞くと橋本が黙っ
て渡してくれ、C2へ報告する。

「中山です。1時50分登頂しました。」

「登頂おめでとう。」と中岡。

「ここまでの苦労は大変なものがあり、努力の結
果だと思います。良くやった。」と関根。

関根には、借りたパイルのお礼を言う。自分の
ピッケルの石突きでは南面壁の氷に刃が立たず、
二次隊とすれ違う時に借りたのだ。

「本当によく登ったね。」と伊藤(英)。

皆ありがとう。自分の努力の結果で登れたわけ
でなく、たまたま登る順番に自分が回った、という感じだ。

見回すと、回りは山また山。上から見るとこん
なにも山がたくさん見えるのか。北稜の切れ落ち
た先にクン峰そしてカラコルムの山々、ナンガ
バルパット。西稜側は、雲がわき上がっている。ス
ノープラトーがずいぶん下に見える。

交替で写真を撮り終え、行動食を詰め込むと早
々に下る。

第二次アタック

伊藤英世

8月12日、第一次アタック隊は西稜大岩（標高6,700m）迄行って引き返してきた。そしてC3に下りて、明後日14日、再びアタックしみごとと登頂に成功した。

夜、C4の第二次アタック隊5名は夕食を早目にとり、アタックに備えていた。

今日アタックした3人は、フィックス4本張りながら行動したので西稜大岩に11時。時間切れで下りてきたと思う。それなら二次隊は、そのフィックスでスピーディに登っていけば西稜大岩に8時に着けるだろう。でも頂上に伸びている西稜は、悪い雪稜になっているので確保しながらだと、とてもじゃないけど5人全員は時間がかかり過ぎて、1日ではC4に下りてこれないことになる。ピバークだけは、絶対避けたいので5人全員ではなく2、3人ならばピークが踏めるんじゃないかなあと自分なりに推測してみた。

13日、朝3時に起きるが、ほとんど眠ってなく食欲も無く4時半に出発。頂上攻撃する日が不調とは、ついていない。トップに登りたかったが仕

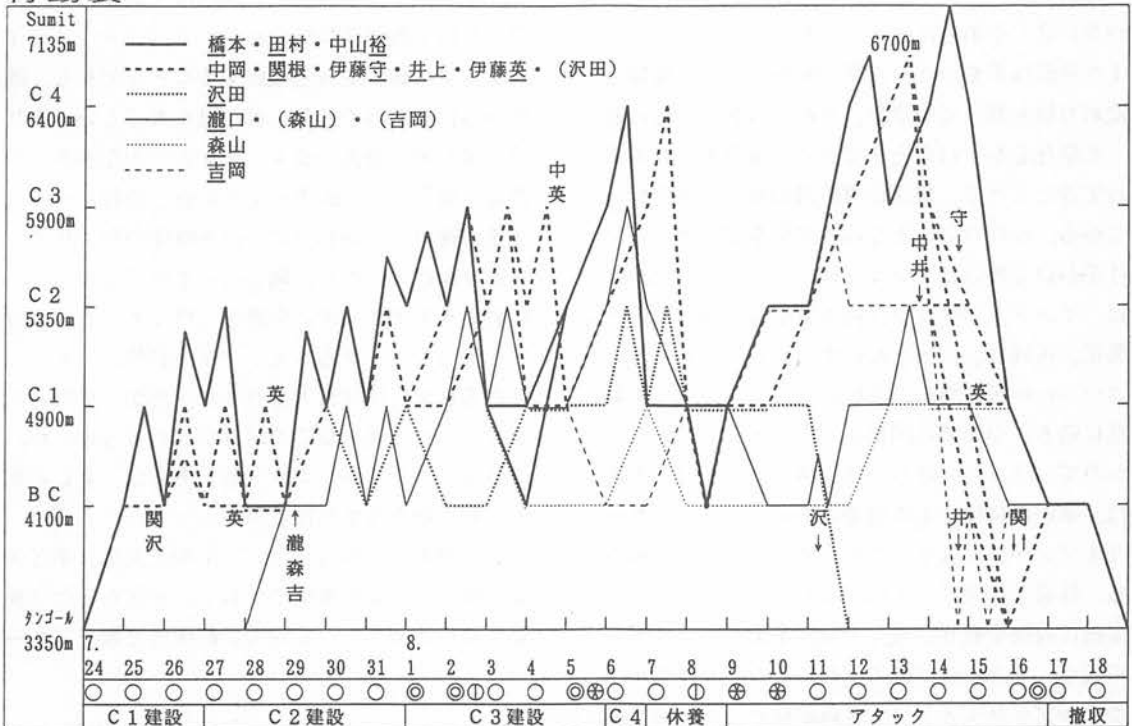
方がない。関根さんを先頭に5つのヘッドランプの明かりはフィックスを伝って登高していく。

明るくなった南西壁は氷化していて慎重に斜上していく、斜面の状態は2、3回、蹴り込めばスタンスになる感じだ。しかし寒い。風がキツイ。天候は晴れていたが、風が冷たくブルブル全身、震えていた。

5名は関根・伊藤(守)・伊藤(英)と中岡・井上の2パーティに分かれていたが、フィックス終了点で僕が、中岡・井上パーティに懸垂してザイルを渡した。少しロスしたかもしれないけど西稜の目立つ大岩に8時過ぎに着いた。そして関根さんが、半ピッチ程登った。僕は、イケそうな気がした。しかし、戻ってきた。エビのしっぽだらけのナイフリッジは悪く、風も強くバランスを失ってしまいそうだ。残念だがやめることにしてC2の吉岡さんにトランシーバーで連絡をとった。その時、僕は内心、ホッとした。あまりの寒さに登るより下りたい気持ちで、いっぱいだったからだ。

9時過ぎ、我々はC4に下降し始めた。

行動表



帰路キャラバン

吉岡俊博

8月16日、先にカルギルに降りた沢田さんと井上さんを除く隊員がBCに戻ってきた。ガイドに引き連れられたフランス隊も上ってきて、中州にBCを設営、私たちのところにもやってくる。ザンスカールをトレッキングしてきて高度順化はできているので一気に登りたいとのことで、ルートや残置について聞いていた。久しぶりに賑やかなBC。皆、それぞれの想いを胸に、隊荷、個装の整理、洗濯、ゴミ焼き。中には、今さらポーター達にコイコイを教えている隊員もいる。クマールの話では、レーからデリーの便の予約は9人分しか取れていないらしい。笑ってMaybeなんて言ってるが、大丈夫だろうか。

翌17日朝、6時にはもうタンゴールのポーターがBCに上ってきた。陽があたらず寒い中、慌ただしく個装、シカールデポ品など振り分け梱包し、ポーターに渡す。物を捨てようとすると、ポーターの間で奪い合いとなる。どこかの大統領と名前が同じポーター頭のフセイン氏は、物知りで紳士で仏教徒であった。帰路キャラバンといっても、歩くのはタンゴールまで。8時過ぎ、隊員はバラバラにBCをあとにする。秋が近づいたようで、1ヶ月前は華やかだった草の斜面は、花の種類も変わり数も減っているが、それでも数十m毎に違った草花を楽しむことができる。放牧もだいが上ってきたようで、娘達が燃料用の乾いた糞を拾いながら、かなり高いところまで牛を追っていた。汗をかいて着いたタンゴールの“バス停”は、隊員、インド人スタッフ、村人でごった返していた。関根、吉岡は、沢田さんの手当をしてくれたタンゴールの村医を訪ね、血圧計、パイルパンツをお礼に贈る。ついに関根さんのカメラも買ったたかれてしまった。厳しい冬が待っている村の人達は、寒い冬に備えての防寒衣を欲しがっていたが、リエゾンがどんなボロでもだめだというので諦める。昼過ぎに来たバスは、なんと普通の乗合バス。屋根に荷物を載せ、村々でお客を乗せてカルギルに向う。ヌンの姿は雲に隠れていた。カルギルのホテルゾジラでメンバー全員が揃う。久しぶりの

ビールが旨かったこと。

18日、こんなのに14人も乗れるのかというようなバスに乗り込み、ゾジラ特製の弁当を渡されて、7時半に出発。町はずれで軍隊の通過待ちがあって、結局カルギルから離れたのは9時過ぎだった。悪路、暑さ、空腹の12時間の末着いた懐かしのホテルリンジは停電中。ろうそくの明かりで夕食をとる。埃っぽい身体に、予想外のお湯のシャワーは好運だった。やはりデリーまでの飛行機はとれないそうで、チャンディガール経由となる。

いよいよデリーに戻る日。真っ暗な5時前に起き、ここで別れるポーター達と再びあの5,000mの峠越えをするシカールデポ品を分け、6時に少しケバイGOODSCARRIERのトラックで飛行場に。谷間だけに、雲が多いと発着できないらしく心配したが、リンジの主人タシはこれなら飛ぶよと言ってくれる。「地球の歩き方」に書いてあったとおり、レー空港はトレッカーで一杯である。インド人では軍人が多く、軍人の夫を見送りに来ている着飾った子供連れの婦人たちが目立つ。行き先チャンディガールの天候回復を暫く待ち、搭乗直前にも機関銃に見つめられてのセキュリティチェックの後、やっと離陸することができる。機内からは、CBやKR山群が見えたらしい。約45分で蒸し暑い曇天のチャンディガール空港着。標高は一気に3,000m下って730m。12時45分発の予定が遅れて15時45分に。待ち時間の間、皆でレストランに入ったが、随分待って出てきたのは1切れのサンドイッチと卵焼きだけであった。30分で小雨でむとするニューデリー到着。シカール社から迎えるは冷房付大型バスだったが、乗り込んでほっとする間もなく冷房は切られてしまった。18時頃、ホテルジャンパス着。あとは、楽しい観光や買い物を残すだけである。

なお筆者は、かなりひどい下痢と共に、某区保健所職員に「よく無事ですなぁ」と言われた2種類の食中毒菌をもって帰国。最後まで散々であった。

隊員紹介・紀行

隊員紹介

登山を終えて

C1の植物

スケッチと雑感

ヌン周辺の地質とか鉱物とかその他について

インドヒマラヤ・ヌン峰 タンゴール村にて

HNE-91

ヌン13年目の邂逅

高山病雑感

高山病にもめげず

アーグラ滞在

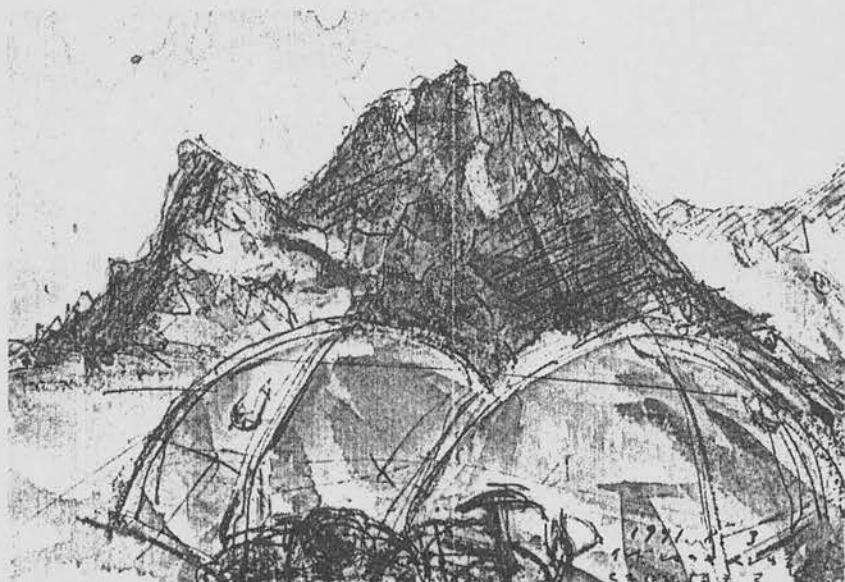
夜空をバックにヌン峰を撮る

レーの出来事

遠征中の小遣帳

ジャイプール

私の英語力



隊員紹介

- 1) 生年月日
- 2) 住所
- 3) 勤務先
- 4) H A J 以外の所属団体
- 5) 海外登山経験 (又は国内冬山経験)

隊長

中岡 久 HISASHI NAKAOKA

- 1) 1949年9月 生
- 2) 〒343 埼玉県越谷市
- 3) 明大付属明治高等学校・中学校事務室
- 4) 東京白稜会
- 5) 1974年 韓国・雪岳山
1978年 インド・トリスル I (7,120m) 登頂
1981年 ネパール・ランタンリ (7,205m) 初登頂
1985年 パキスタン・K 2 (8,611m) 副隊長
1986年 中国・雪宝頂 (5,588m) 初登頂
1988年 ボルネオ・キナバル (4,101m) 登頂



愛児と奥様や家族の見送りを受ける姿は、我々隊員の目に焼き付く光景であった。隊長の重責の中、日夜隊員の健康、明日のタクテックス等を合理的に処理することは隊長のヒマラヤ遠征経験から来るものである。何時もヒゲ顔に安全祈願の守り布を“ほおかぶり”日焼止めなど一度も使用せず、真黒な顔と白い歯、これがヒマラヤニストの姿か。3人の登頂を遂げ、C 2 で見せた笑顔が最高の隊長の姿であった。ビックなヒマラヤ遠征に期待する。

副隊長

関根 幸次 KOJI SEKINE

- 1) 1933年10月 生
- 2) 〒333 埼玉県川口市
- 3) ㈱アルム化学
- 4) わらじの仲間
- 5) 1984年 ヨーロッパアルプス・モンブラン
1987年 ネパール・メラピーク (6,654m)
1989年 台湾・玉山 (3,950m) 登頂
1990年 インド・サトパント (7,054m) 副隊長、登頂



昨年のサトパント峰登頂に続き、2つ目の7,000m 峰登頂を目指して参加した。生涯現役を自他共に認める山屋で、その行動力には我々圧倒される思いである。今回は残念ながら登頂できなかったが、これは隊長の責であり、本当に申し訳ない。その無念を晴らす為、92年ヌン隊にも参加を希望、準備に余念がない。さらに93年には8,000m 峰をと、その意欲には驚倒されるばかりである。

登攀リーダー

橋本 康弘 YASUHIRO HASHIMOTO

- 1) 1954年8月 生
- 2) 〒221 神奈川県横浜市
- 3) ㈱大建工業
- 4) 東京徒歩山溪会
- 5) 1980年 ヨーロッパアルプス
1985年 中国・クラウン(7,295m)
1986年 中国・ギャラベリ(7,294m)初登頂
1987年 中国・ラブチェカン(7,367m)初登頂
1989年 アラスカ・マッキンレー(6,194m) 捜索
1989年 中国・チョモランマ(8,848m)
1990年 中国・クラウン(7,295m) 登攀隊長



沉着冷静にして現場主義。ロマンチスト。将棋をうち、1人静かにトランプを引く。言葉を選ぶようにして語り、その言には誰も逆らえない。ルート工作、登頂と、たえずトップで果敢にピッケルを振るい、2人の初心者を頂上に引っ張り上げた。登頂しなければならぬ訳がある、とほのめかされたが、帰ってから、よく訳がわかった。結婚である。条件として求められたにしろ自らに課したにしろ、同じこと、大きなエネルギーに転化したことは頷ける。悩ましく、切ない思いの登攀だったのである。我々は珠樹さんにも感謝したい。

登攀リーダー

伊藤 守 MAMORU ITOU

- 1) 1954年11月 生
- 2) 〒133 東京都江戸川区
- 3) ㈱ミザール 技術部
- 4) 東京朝霧山岳会
- 5) 1989年 インド・ヴァスキパルバット(6,792m)



先発隊として、なかなか大変であったろうと思うが、持前のユーモアと、粘り強い性格で無事成しとげた。いつでも安定した技術、精神力を持っていて、信頼できる山ヤである。どこの山岳会も、若手の育成が難しいと聞かすが、守さんなら若手も一緒に登っていくだろう。次は、どこに登るのだろうか楽しみである。

隊員

井上博之 HIROYUKI INOUE

- 1) 1934年4月 生
- 2) 〒167 東京都杉並区
- 3) アグロポール(株)
- 4) 三峰山岳会
- 5) 1987年 ヨーロッパ・グロスクロックナー(3,797m) 登頂
1989年 ソ連・ハンテングリ(7,010m) 登頂、
バヤンコール西峰(5,200m) 登頂



本格的な登山を始めたのが、50才を過ぎてから。7,000 m 峰、2度目の挑戦だが、今回は残念ながら登頂ならず。

流暢な英語で「難問有り」の涉外を解決。重い革製靴を履いてスタスタ、やはり昭和1ケタは強い。強さの秘密は人並みの食欲とどこでも眠れるという特技のせいか。

休養日には「スケッチ」と多才ぶりを発揮。関根副隊長同様、好奇心旺盛な中年?登山家の鏡である。

隊員

沢田幸子 SACHIKO SAWADA

- 1) 1940年12月 生
- 2) 〒170 東京都豊島区
- 3) 住友銀行高島平支店
- 4) わらじの仲間
- 5) 1982年 ヨーロッパアルプス・ブライトホルン
1989年 台湾・玉山(3,950m) 登頂



言うまでもなく我が隊の紅一点。本人は子育てブランクを強調するが、主婦業をこなしながら登山歴豊富なスーパー良妻賢母。だからこそ、ご家族の理解、支援があったのでしょう。いつもの穏やかな笑顔のまま、若者には厳しいご意見もありましたが、病人に対する配慮は細やかでした。いつまでも登山を続けて、またご一緒したい女(ひと)。最後は辛い想いをされたけど、ますます美貌に磨きがかかったかな?

隊員

田村正勝 MASAKATU TAMURA

- 1) 1942年4月 生
- 2) 〒166 東京都杉並区
- 3) 中野企業
- 4) 黒稜山岳会
- 5) 1991年 北ア・槍ヶ岳北鎌尾根 他



一見してもの静かなヤマ屋。

ヒマラヤ初見とは見えない。皆が高所障害でうなっている中、BC、C1のうら山に石ころ探しに出かける余裕の行動は必殺仕事人タイプ。

てぬぐいでほっかぶりして登頂する姿は純日本人タイプ、今後の行動・夢は大きい。

隊員

滝口良二 RYOJI TAKIGUCHI

- 1) 1949年1月 生
- 2) 〒854 長崎県諫早市
- 3) ㈱西部川崎 サービス部
- 4) 諫早サワガニ山の会
- 5) 1988年 ネパール・パタールヒウンチュリ (6,441m) 隊長



滝口さんは多くは喋らないが、決断実行、我慢強く、日頃登山の為のトレーニングを欠かさない。見るからに頑強で、優しい心の持主であろうと、初対面の時からそう理解し、頼もしい仲間だと思っていた。今回我慢強さが災いして早期治療を逸して高山病をこじらせたのは残念だった。当然登頂が期待された一人だ。ただ一人関東圏以外、それも遠く九州からの参加だった。

隊員

森山英穂 HIDEO MORIYAMA

- 1) 1955年2月 生
- 2) 〒208 東京都武蔵村山市
- 3) 日産自動車村山工場
- 4) 東京雪稜会
- 5) 1988年 中国・新青峰(6,860m)
1989年 アラスカ・マッキンレー(6,194m)



街中での好奇心旺盛なところは隊一番！

山では残念ながらキャラバン途中の肺水腫で入院。二泊三日の遅れを取りもどせないまま、スノープラトール(5,350m)まで。隊解散後のインドひとり旅の美談？は涙なくてはかたれない。

隊員

吉岡俊博 TOSHIHIRO YOSHIOKA

- 1) 1959年7月 生
- 2) 〒214 神奈川県川崎市
- 3) 日本電気㈱ 機能エレクトロニクス研究所
- 4) 同人バイネ・ニ・アソブ
- 5) 1991年 北ア・鹿島槍ヶ岳 他



初めての遠征で準備段階から熱心に装備担当に取りこんでいた。本番で肝心の体調を崩してしまったが、懸命の努力で高度順化しヒマラヤ登山の概略を確りとつかんだようだ。テント炎上の事故で一足先に麓の村におりていた隊員を、BCから二度も見舞いに降りるといふ心優しさを持って、これからも山を自然を愛し続けていこう。

隊員

中山 裕朗 HIROAKI NAKAYAMA

- 1) 1963年12月 生
- 2) 〒190 東京都立川市
- 3) ㈱セントラル情報センター
- 4) 奥多摩山岳会
- 5) 1985年 ネパール・アンナプルナトレッキング



担当の食糧を率先し、なしとげ登山期間中は高所障害しらずか、食欲旺盛とスピーディーな登高で、ルート工作、隊への貢献度は計りしれない。その彼の体力の凄さのひとつはキャラバン最終のパニカル〜タンゴール間を先頭で歩いた時の足ごしらえはナント、トラックタイヤのゴム底のかなりヘビーな草履、その後ろ姿にヒマラヤニスト、初戦白星の姿を見た。

隊員

伊藤 英世 HIDEYO ITOU

- 1) 1967年1月 生
- 2) 〒174 東京都板橋区
- 3) 自営
- 4) 東京水河山岳会
- 5) 1990年 北ア・槍ヶ岳硫黄尾根 他



隊員の中で最年少。登山期間前半は、高所障害に苦しめられながらの荷上げとなる。アタック前は本領を発揮して、降雪で埋まったフィックスを掘り起こしながらラッセルをする。安物買いが得意。「ノー、マネー」を連発し、身振り、手振りを交えての値下げ交渉に、マナリの土産物屋の前は人だかりとなる。



連絡官 P. D. シン



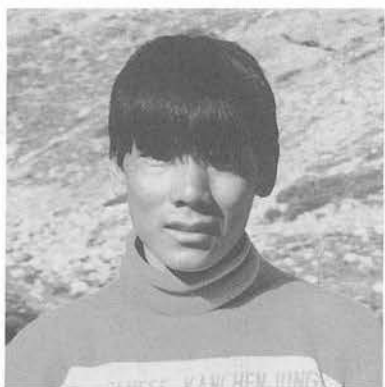
シカールトラベル
アレンジャー A・クマール



コック ラクパ



ハイポーター パサン



ハイポーター ミンマ



ハイポーター ダワン

登山を終えて

中岡 久

—初めに—

1991年ヌン登山を運営・実践するにあたっては、昨年のサマーキャンプ・サトバント登山の運営・実践を大いに参考にさせていただいた。又、自分が初めてHAJの登山隊に参加した1978年の登山学校・トリスル登山のことも思い出しながら運営・実践をしていった。さらにヌンをいかに登るかについては1983年・1987年のHAJヌン登山隊の成果を利用させていただいた。このように今回のヌン登山は、過去のHAJの経験に基づいて得られた様々な成果のうえに成り立って実施されたのである。

そのため、全員が初めて顔を合わせた第1回目のミーティングでは、この登山隊の理念を提示し、その後のミーティングの中でチームワーク・登山タクティクス・高所順応等について決定していった。そして最終的には次のような内容にして、全員の理解を得てヌン登山を運営・実践したのである。

登山隊の理念

1. 登山隊の運営・基本方針

1)本登山隊は、HAJの'91サマーキャンプ・ヌン登山公募により広域より参加・組織された登山隊という階の性質により、経験者・未経験者を問わず、単純な事柄でも一つ一つ確認しながら意志統一をはかり、運営・実践します。

2)本登山隊の第一目的は、ヌン・7,135mの登頂ですが、当然のことながら無事に帰国することが前提となりますので、そのことを優先して考えます。

3)本登山隊の構成は、20代から50代までの幅広い年齢構成となっていますので、昨年のサトバント隊同様に特色ある登山の可能性を模索

したい。

又、登頂は、オーソドックスな極地法（ポーター）による可能な限りの全員登頂を目指します。

4)本登山は、ヒマラヤ登山という海外での登山であり、相手国（インド）との対連絡官等言動に充分注意したい。又、人種・宗教・カーズト・軍事・性・病気等タブーをよく理解して対処したい。

5)本登山隊の参加隊員は、自己の健康に充分留意し、日々の体力増強・維持に努力する。出発前の怪我等は、本登山隊の損失・不幸であると心得てください。

又、保険等の対策は、各自の責任において処理してください。（登山隊としての保険は、HAJ受け取りとして加入します。）

2. 組織

1)隊の構成

隊長 1名、副隊長 1名、
登攀リーダー 2名、隊員 8名
リエゾンオフィサー 1名、
ハイポーター 3名、コック他2名

(2)隊員の概要

性別	男	11名	※既婚者	4名
	女	1名		
年齢	20代	2名	※平均年齢	
	30代	4名		40.4歳
	40代	3名		(24歳～57歳)
	50代	3名		
海外経験		9名		
登山経験		8名		
	(内訳)	1回		2名
		2回		3名
		4回以上		3名
トレッキング経験				1名

高度経験	4,000 ~ 5,000 m	1名
	5,000 ~ 6,000 m	4名
	7,000 ~ 8,000 m	3名
	8,000 m	1名

※ 7,000 m 峰登頂者 4名
(内 2名は 2 峰)

海外リーダー経験者	4名
地域	東京 7名
	神奈川 2名
	埼玉 2名
	長崎 1名

- ※ 全隊員とも単一山岳会に所属している。
- ※ 総合的には、トップクラスではないが、中級～上級クラスのメンバーで構成されており、目標とするヌン登山には支障なく対応できる。

3) チームワークについて

- ① ヒマラヤ登山は通常、組織による登山である。普通、登山隊は計画段階から多くの人に関係して組織するか、あるいは強烈な人（リーダー）が存在し、その人のもとに組織されるものである。
- ② しかし、HA J ヌン登山隊91は、HA J のサマーキャンプ・ヌン登山公募隊であり、隊員の概要のとおり、12人のメンバーが、わずか半年余の短期間で隊を組織し、約40日間で一種極限の地域であるヒマラヤ 7,000 m 峰に向かうものである。
- ③ そこで隊員に望むこと
 - 「自分1人の能力では実現できない登山であるが故に参加した」と言うことを基本原則とする。
 - 一人一人の持っている能力には差があることを理解し、了承すること。従って登山の成功は、集まってきた隊員の総和によって左右されることを原則とする。
 - HA J は会員間の国内登山はしない。このため登山隊を組織する場合は、初対面が多くなる。「国内合同」とも言

えるこのような組織では、それぞれが違う土壌で培ってきたものを「認め合う」ことが必要である。その上で、本登山を実行するための原則を確立して実行に当たるべきである。この原則を円滑に行うためには、相手を思い遣る「優しさ」が大切である。

- ※ 以上はHA J 登山隊の基本姿勢です。
- 登山隊の運営・基本方針を理解し、実践すること。

さらに

- 隊員の概要のと通りのメンバー構成であり、いわゆる大人の隊を目指す。
- ヒマラヤ登山に関する企画・研究・実務・準備・実践・評価等全過程について体得するよう目指す。
- 今後の各人のより高度な登山への継承・発展を目指す。
- HA J の活動に対する理解を目指す。
- ※ 以上は、1月に正式に隊を組織して以来、ミーティング・山行・梱包作業等を通じて、隊の中で確認してきたものです。



登山タクティックスの基本

1. 登山期間とキャンプ位置

1) 登山期間を4期に分ける（基本行動表参照）

第1期 アプローチ～BC

初期順応を完全にしてBC入り

第2期 BC～C2

C2を2回以上トレースし、

C2に滞在

第3期 C2～C4（AC）

C3に滞在・順応し、C4を1

回以上はトレース

第4期 休養～アタック

C1（ABC）にて2日間休養

し、アタック

2) キャンプ位置

BC 4,200m

C1（ABC） 4,800m

C2 5,300m

C3 5,800m

C4（AC） 6,350m

2. パーティ編成

1) 4パーティ編成（3名編成）

2) ルート工作、装備荷上、食料荷上、休養（キャンプ整備）

3) パーティリーダー

（中岡、関根、橋本、伊藤守）

4) パーティの力量により、（強） $A > B > C$

$> D$ とし、A・Bパーティにてルート工作を行う。

※ パーティメンバーは現地で決定する。

又、パーティ編成は適宜変更する。

アタックパーティは第1次6名・第2次6名とする。

尚、ハイポーター2名はC2まで使う。

3. 高所順応のための原則

1) 新たに獲得する高度は1日500m前後とする。但し、順応が獲得されたと判断される段階であるアタック時は、1日1,000mの行動は可能である。

2) 新たに獲得した高度には宿泊しない。

3) できるかぎり多くの登降行動を行う。

4) 休養はできるかぎりBCでとる。

〔但し、後半はC1（ABC）〕

5) アタックの前には2日の休養をとる。

4. 高所順応のための促進と個人差の克服

1) 今回のアプローチはテリー～マナリ～レーのルートであり、最高所であるタンランラ(5,328m)を越えるので、このアプローチを積極的に利用する。（このアプローチで高所障害が出てしまった方がよい。）

2) 高所への順応だけでなく、インドという環境への適応が必要である。（特に食事・習慣等への適応）

3) 順応は意志力による積極的行動がプラスになるのでメンバーの自覚的行動が必要である。又、基礎体力がベースとなるので、出発前の体力養成が必要となる。（出発までに富士山登山が有効）

4) 健康チェック表による自己管理、メンバー同士の相互管理により健康管理を積極的に行う。（特に今回は医師はいないので、この健康管理は重要。又、出発前に健康診断等しておくことが望ましい。）

5) その日の到達高度は泊まる予定のキャンプ高度より少しでも高い地点まで到達し、下って泊まり、障害の緩和を図る。

6) 可能な限りの全員登頂を目指す。絶対ではないことをメンバー全員が認識し、個人の順応レベルに応じた管理を全面的に承服することを確認・理解する。又、そのことを快く応じるメンバーシップを目指し、チームワークづくりを進める。

（確かな信頼関係の設計である。）

5. 事故対策

1)酸素器具

医療用としてBC及び上部キャンプ（C2又はC3）に配置する。

2)医療品

BC及び各キャンプに使用するレベルの高い医薬品等を配置し、使用法等を明記する。

3)エマージェンシー

隊の医療レベルでは対応不可能な事態が発生した場合は、市街地の病院に収容する。さらに一刻を急ぐ緊急事態の場合は、ヘリコプターの要請が必要となる。

このため、隊員用デポジットマネーとしてメンバーより徴収する。

（昨年サトパント隊の場合、ヘリ要請費用の半額を隊員でデポジットした。

1人20,000円×10名）

本登山隊も20,000円×12名=240,000円をデポジットし、緊急の場合これをあてる。尚、不足費用は当事者負担とする。又、残金が生じた場合は登山終了後の報告書出版費用にあてる。

4)死亡事故への対応

状況にもよるが、登山期間中に転滑落・雪崩等により死亡事故が発生した場合は本登山隊の性格からして登山中止とすることが原則である。

5)死亡事故への国内対応

－終わりに－

今回のヌン登山は、以上のような登山隊の理念・登山タクティックスの基本ということを明示し、実施した訳であるが、結果はどうであったろうか。自分自身当初からある程度は予想していたが、やはり100%うまくは行かなかったと考えている。このことは参加した隊員全員が感じていることだ

ろう。これは登頂した・しないにかかわらずである。隊長として感じることは、1つの反省点として、基本方針の中であげた特色ある登山の可能性の模索ができなかったことだ。これはやはり難しかった。自分が考えるには、ヌン登山ということで集まってきたのであるからもちろんヌン登頂が第一の目標であるが、サマーキャンプと銘打っている以上、参加したメンバー個々の様々な志向をもっと生かしたかった。そこから特色ある登山の可能性を求めたかったのであるが、出来得なかった。2つ目は、現地ではやはり様々な問題が発生したことによるものだ。それはチームワークの問題でもあったし、アプローチでの高所順応の失敗でもあった。それに伴って一部意志の疎通もきたし、パーティ編成の固定化等にも繋がった。そして、帰国後一番感じたのは、アタックについてである。パーティ編成の固定化という先入観があったためか、アタック体制は第1次3名、第2次5名としたが、これを4名ずつにできなかったかということである。結果は神のみぞ知るだが、4名にした場合、チャンスはあと1名にも与えられたかも知れない。

これらすべての責は、隊長である自分が負うものであり、自分自身まだまだの思いで一杯である。そういう意味で、自分流の思いを出してしまったことをご容赦願いたい。そして今一番うれしいことは、全員が無事帰国できたこと、これに尽きる。海外、特にヒマラヤ登山に絶対安全などない中で、全員がとにかく無事に帰国できたこと、これに勝るうれしさはない。いたらないことの多かった隊長を持ち上げてくれたメンバー、又、ご協力いただいた多くの方々には、本当に感謝いたします。ありがとうございました。

最後に今回のヌン登山に参加したメンバーの内、今夏、関根副隊長は再度ヌンを目指し、橋本登攀リーダーと田村隊員は中国・クラウン峰を目指して準備を進めていることを報告し、その成功を祈るものである。又、他のメンバーも次の新たな目標に向かって邁進することを期待するものである。自分自身も又、新たな目標を定め、密かに想を練っているところです。

C1の植物

関根幸次

C1 4,800mの砂礫や岩陰に自生している。植物の花や葉の色彩は、タンゴールやBCに比較して鮮やかさが無い。ヌンの場合 4,800m のC1周辺が限界であった。

アタックの前日、C1で休養日の暇をみて、約2時間観察した結果、9種類の植物を見出すことができた。

大きな岩陰に緑色のシダが3枚の葉を重ね、冬の厳しい環境から身を逃がれようとしていた。

写真1 エーデルワイスに似た植物と思って観察してみると、日中太陽の光が射すと、紫色の小さな花を咲かす。夕方になり、雪融け水が氷る頃に、花はしぼみ、葉の周辺から水滴が無数に出てくる現象を見た。夕日も落ちる時刻に水滴は見事に氷化し、寒さに対抗しながら守る自己防衛とい

えよう。

写真2 キク科の植物で花ビラがピンクで花弁が黄色で、これも夕方の厳しい寒気から逃がれるかのように、花ビラはしぼんでしまう。

写真3 キク科の植物で奇妙な坊主草の型をし、白い綿毛で包み、寒さから耐える自己防衛をしながら育生している。

写真4 ヒマラヤ花図鑑で同定しても解らない花である。サクラ草に似た花ビラをつけ、可憐で美しい。花が散ると細長い実をつける。

7月～8月にかけて、タンゴール、BC周辺は高山植物の宝庫である。日本で見られる、リンドウ、オキナ草、キンポーゲ、ミヤマウスユキ草等数限りない花が私達の目を楽しませてくれた。



写真1



写真2



写真3



写真4

C1に咲く花（写真1～4）

スケッチと雑感

井上博之

8月13日、登頂をあきらめてC3からC1へと下るために重い足をひきずってスノープラトーを涉っている時、思いがけずに突然こみあげてきた感情の高ぶりに胸がつまってしまった。

このうんざりするように長くて単調なスノープラトーを繰り返し何度通ったことか。そこは5,000メートルの高度にあるために、一気に駆け抜けることは出来ない。少し歩いては酸素不足に喘ぎ、しばらく息を整えることになる。体調がよくない時には荷あげの重量を軽くしてもらっても、先行の人に遅れまいと、ありったけの力を絞り出すおもいだった。

休暇のやりくり、出発前の仕事の整理とトレーニング、現地での高度順応、荷あげ等々いろいろあってヌンへの道は遠かった。それを象徴するかのようなこの延々と続くスノープラトーの反復横断もこれで最後だ。子供のときは虚弱体質であったし、その後特に身体を鍛えたわけではない。50才になってから山登りをはじめて7年、この年でもよくここまでこれた。これは自分の力だけで出来るものではない。いろいろな人のおかげであった。また幸運にも恵まれた。かつて、あれやこれやと持病の多かった非力な自分自身もよく頑張った。力の限界への挑戦に臨むことが出来た自分は幸せ者といえるのだろう。

年齢からいって、このようなハードな海外遠征はもう出来ないかもしれない。

いずれにしても、お祭りはおわたったのだ。などと、混然とした想念がミックスして自己コントロールが出来なくなったのかもしれない。一方では、第三者的にこの感情の起伏を楽しんで観察している別の自分もあった。

不思議なことに頂上が踏めなかったことへのくやしきはまるでなかった。むしろ全力を出しきったあとに残る爽やかさがあった。

せい一杯やったのだ。

2年前のハンテングリでは、7,010メートルの山頂が踏めたのに、下山するとき感じたものは充実感とはほど遠いボロボロになった自分であっ

た。敗残兵をすら連想したものだ。大自然に対して自分だけが意気かって、キリキリ舞いしたにすぎないことを思い知らされたわけだ。

私にとっては大きかったこの2つの山行のいずれがより有意義であったのか、比較することはむずかしい。

登山は登頂だけが目的ではないということの一例であろうか。

スノープラトーを涉り切るとヌンはもう見えなくなる、だがあえて振り返るまいと自分自身に言い聞かせた。『ヌンはもう終わったのだ、さあ次は何をすべきかを考えよう』

インドは以前からぜひ来たい国だった。高校時代に読んだ堀田善衛の『インドで考えたこと』の印象が強かったせいもあるが、仏教の発祥地としてのインドには興味があった。しかし、来てみてその貧しさには正直ショックをうけた。聞きしにまさるものであった。

仕事柄少し英語をしゃべるので通訳を兼ねて、不運にも入院することになった4人の仲間と一緒に幾つかの病院へ行くことになった。そこでは医療施設の現状や付近に住む人たちの生活ぶりなど、直かに接することが出来た。

軍関係の施設は別として貧しさからくる非衛生的な環境があちこちで見られた。だが、そこで勤務するお医者さんたちの多くは態度が立派だった。患者やわれわれに接する態度は自信に満ちていた。



1年のうち9ヶ月は雪の中、冬季には零下40～50度にも外温が下がるというタンゴール村の場合、このたいへんな無医村に、奥さんを町に残して単身赴任、満身に医療器具も薬品も無い石と泥と埃の小屋の診療所で、貧しい村人の診療にあたって、若いお医者さんのおだやかな表情に接した時には、お釈迦さまを産んだインドの顔の一面を見る思いがした。

タンゴールといえば、そこにある自然の美しさは見事なものであった。背景にあるヒマラヤの山なみは神々の山とも呼びたくなるように秀麗であり、そこに咲き競う高山の花々は可憐で、時には健気であった。

この高山の花は高みにいくにつれて数こそは減るが、すがた種類を変えて4,900メートルのC1付近にまで咲いており、われわれの心を和ませてくれた。道すがら何度も立ち止まっては見とれ、時には登山遠征中であることも忘れて夢中になってシャッターを切った。

頭に透明な朝露をいだいてC1のキジ場に咲いていたあのちいさな花の、ぼってりとした独特な姿とモスグリーンの味わい深い色は今でもはっきりと目に浮かぶ。

今回ルート工作は橋本さんをリーダーとする田村さん中山さん3人の強力メンバーがやってくれたので、われわれは全ルートを通してほとんどフィックスロープをユマールすればよく、体力は消耗したものの登攀に技術的なむずかしさはあまり感じられなかった。しかし、8月12日寝苦しかったアタックキャンプを未明4時半にとびだして、頂上をめざした時には、さすがに緊張した。

すでに前日第1次アタック隊は、高度約6,700メートルの大岩付近で登頂をあきらめて敗退していた。西稜は過去の記録に基づいて予想していたような雪山ではなくて堅い氷で覆われていること。しかもその稜線は幅が30センチほどしかないナイフリッジであること。用意してきたスノーバーが使い物にならないこと。氷での確保に必要なアイスピトンを使い切ってしまうて手持ちがないこと。フィックスロープも同様であること。パートナーの滑落を止めるには反対側急斜面に飛び込むほか

ないが、これは実際問題としては非常に困難であること。制約された時間内で頂上から下山することはむずかしからう。といったことなどを敗退の理由としてあげられていた。大岩から上は同じ条件でアタックせねばならないわれわれ第2次隊が登頂に成功する可能性は極めて少ないであろうことは当然予測された。

稜線めざして西側斜面をトラバースする時1次隊の報告が誇張でないことがよく分かった。そこはそれなりに傾斜があり、氷が固くてピッケルの効きが悪くて砕けやすい。スノーバーなど勿論使い物にならない。ザイルパートナーとなった中岡さんを確保するためにピッケルとバイルを何度も何度も氷面に打ち込み直さなければならなかった。

その日は、雲ひとつない快晴で風は無かった。だが私はGORO製のバカデカ二重山靴をはいていたのにもかかわらず、寒さで足の指先がかじかみ、感覚が失くなってきた。確保の姿勢にある時には凍傷になるのを防ぐために休みなく靴のなかで指先の屈伸運動を続けねばならなかった。

ザイルを引いて第1次隊の最高到達地点、大岩直上の稜線にとどいていた中岡隊長、関根副隊長の2人はしばらくそこにとどまって話し合いをしていたが、やがて敗退を決定、エクスペディションの終焉をわれわれに告げた。

全天を覆う深海のように濃いブルーの空の色が目にしみた。

今回は大きなクレバスを渉る作業は無かったが、ヒドンクレバスには気を使った。とくにC2、C3間の緩傾斜部には、それらしきものがあちこちにみられた。1人で下っている時にルートを見失



山の花は美しく
タンゴール
7月25日

って、いやな所を通過するはめになり、そこそ薄氷を踏む思いがした。

雪解け水がトンネルをつくり、落とし穴になっている所もあった。

あろうことか、私がそこに見事はまりこんでしまった。

フィックスロープを付けていたので、大事には至らなかったが、そこから抜け出そうにも手掛かり足掛かりが無く、しばらくは、紐でぶらさげられたカメさんよろしく、大まじめに空間を遊泳するはめになった。

登攀スケジュールを終えて、C2まで降りて来た時に、『C1で沢田さんが大ヤケドをしてタンゴールの診療所に入院している。容態によっては井上は通訳を兼ねてカルギルまで同行するように』と中岡隊長より指示を受けた。

予定では、われわれはこれからC1でテントの撤収作業をすることになっていた。それまではなんともなかった痔の具合がかなり悪くなっていた矢先であったので、沢田さんには悪いが、ひそかにこれは有り難いと思ったのは事実だ。なにしろカルギルまで行けばホテルにシャワーはあるし、食事が旨いのである。痛みで歩き難いものなんのその、いっきにC2からベースキャンプまで下った。途中C1では沢田さんの黄色いテントが半分焼け落ちて無残な姿を残していた。ベースキャンプに着いたところ、リエゾンオフィサーのミスター・シンは『沢田さんは元気で、明日にはベースキャンプに戻ってくる。井上に先行してC2から下りて来た吉岡さんは既にタンゴールへ向かった。退院の手助けは彼1人で十分であろう。井上はベースキャンプで待つほうがよい』との御宣託であった。

明るく朝早くタンゴールから吉岡さんがベースキャンプに戻ってきたが、彼の報告はミスター・シンの話とは大分違っていた。

『診療所の環境は非常に悪く、彼女は心身共にすっかり参っている』ということであった。クマール氏と2人で早速沢田さん救出に向かう。

高みからは地上の楽園とも見えた村落は、中にはいると、およそ近代文明からとり残された感じ

の石と泥土の世界で、厳しい現実生活の匂いがたちこめていた。地べたに座って、もの珍しげにわれわれを見つめていた、下着を付けていない少女の内股が皮膚病でただれているのが見えて痛々しかった。

診療所はほかの家と同じような作りの小さな家で、沢田さんはその2階の狭くてうす暗い診療室の土の床の上に1人マットを敷いて寝ていた。それはなんとも侘しい光景であった。電灯が無く、小さな窓からのわずかな明かりだけではヤケドの状況はおろか、どのような医療設備があるのか、床や壁は清潔なのかどうかすら見きわめることがむずかしかった。ローソクとヘッドライトが頼りだ。

夜になると天井から何か虫が落ちてきて刺すのだと聞いて、よく1人で5日間もこのような環境に我慢出来たものだと感心した。追いかけて関根さんが下りてきた。ヤケドは沢田さんの顔の皮膚を変色させていたが、体調はそれほど悪くないよううかがえた。気分転換ということで、関根さんに誘われて近くを3人で散索することにした。夕暮れ前の村落には、溜め息をつきたくなるような神々しいカシミールの山並みが映えていた。

翌16日タンゴールの診療所では十分な治療が受けられないので、沢田さん、クマール氏と私の3人は乗り合いバスに乗ってカルギルへ向かった。

ゆけどもゆけども続く同じような茶褐色の眺めにあきて睡魔に襲われるのだが、悪路と堅いスプリングのせいで、車の振動が激しく、繰り返しいやと言うほど頭を前の座席に打ちつけては目を覚ました。

約4時間かかってカルギルのホテルに着き、久しぶりにシャワーを浴びてから飲んだビールの旨かったこと。忘れられない思い出の一つだ。3人は早速軍の病院へ行ったが、軍医が生憎不在とのことで、沢田さんは医療兵から仮に治療を受け、改めて翌日診てもらうことにした。病院での折衝に当たってくれたクマール氏はその足でベースキャンプへ戻って行った。

明るく日クマール氏に言われた通りに、何の疑いもなく当然のように病院にやって来たのだが、意外な事態にあわててしまった。まるで話が通

ていなかったのだ。『誰が無断で一般人の治療を許可したのか。昨日勝手に治療を施した不届き者は誰か』という騒ぎになった。

それでも当日の担当軍医は話の分かる人で、結局われわれの希望は聞き入れられて、大分待たされたが特別に治療をしてもらえることになった。

待たされたのは忙しいせいかと思ったがそうでもないらしく、治療は実に丁寧にたつぷりと時間を掛けてやってくれた。

変色して固くなった死んだ皮膚を濡れた脱脂綿で湿らせて柔らかくしてからピンセットでゆっくりと剥いでゆく根気のいる作業だった。無理をすると沢田さんが痛がるし、患部は顔面に一杯だ。軍医は『死んだ皮膚をきれいに取り除かないと、ヤケドの跡が残るのだ』と言っていた。

日本でもこのようにゆっくりとていねいに治療をやってくれるのだろうか。

軍隊にヤケドはつきものと言って、軍医は自信満々であり、てきぱきとした軍人らしい態度には好感が持てた。

もう少し皮膚深くやられていたら、大事に至っていたらしい。不幸中の幸いであったのかもしれない。

治療の最中にヒンズー教の僧侶がわがもの顔をして治療室に入って来た。この軍人はよく彼の説教を聞いているらしい。インド人にはめずらしく、きれいな英語を話す感じの良い人であったので、しばらくは楽しく宗教論を交わすことが出来た。

日本からの海外遠征で、12人パーティのうち4人も大量入院することになったのはめずらしいのだそうだが、今回肝心の治療そのものについては、結果的にはおおむね適切な処置を受けることが出来たのではないかと思う。

この事に関してはインドの関係者に深く感謝せねばなるまい。特に治療にあたられた医師の方には誠意を持って一所懸命やっていただし、クマール氏もあのような劣悪な条件の下で、最後まで手抜きをしないで任務遂行のために努力をしてくれた。

日本では、インド人の勤労モラルについて必ずしも良い認識を持っていない人が多いが、今回の経験で私の認識も大分改められた。

私は少年時代に終戦を満洲で迎え、そこでソ連兵からひどい仕打ちを受けた経験がある。そのため、ソ連人に対して拭いても拭い切れない怨念を長年持ち続けてきた。しかしソ連領ハンテングリに登山した際には立派なソ連の人たちに会う機会を得て、おかげでつき物が落ちたように、その怨念がさっぱりと消えてしまい、自分自身の心が洗われたような気持ちになった。

それまでも多くの善良なソ連の人に会っているのだが、ハンテングリ峰が私を救ってくれたのかもかもしれない。

登山ではこうした『人間』や『想念』や『山川草木の心』を含めて思いがけない『もの』に巡り合うことがある。それは自分が生きていることを実感する時でもある。

書斎では得られない『もの』が行動を伴った世界には存在しているようだ。

これからも出来るだけ長く、額に汗をしてそうした『もの』にもっと遭遇したいものだ。



ヌン周辺の地質とか鉱物とかその他について

田村正勝

今回のヒマラヤ旅行に際しては、登山、風景、自然、人文風俗等に対する期待もさりながら、密かに地質、足元の石ころにまで興味を抱いて出かけたものである。果たして、それぞれに十二分に満足のゆくものであった。遠征費用の半分は、アプローチ段階での収穫で回収できたと考えている。終始車窓の景色に釘付けになり、観るもの触るもの聞くもの、すべて新鮮であり、驚異であった。興味と好奇心は、案じていた車酔いも許さず、あるいは、高度障害をも避けるもののように思われる。また、ヒマラヤでありがたいことは、大地の植生が薄く、というよりも全くなく、従って表土がないということだ。地質の観察にはこれ以上恵まれた環境はない。

まずはデリーから。ここは紅砂岩の大地の上であり、町中どこでも1mも掘ればざらざらとした紅い砂に突き当たる。硬いところは昔から広く建材や敷石に用いられている。郊外では煉瓦に焼かれている。細粒の石英がベンガラ色の鉄分で膠着されたもので、起源は砂漠の砂が浅海に堆積した砂である。ヒマラヤから運ばれてきたものだ。露頭は、IMF内のクライミング練習場。石切場らしい穴の中でたつぷりと観られる。

平原を北へ暴走のごとくひた走り、チャンディガールを過ぎると、大地いきなり起伏があらわれる。枯れ河の上を横切る、満々と水をたたえた雄大な用水路や、発電所が見られ、インドの産業基盤が窺われて興味深い。やがて道路が怪しげになってきて、丘陵帯からいきなり結構な峠越えとなる。ヒマラヤ山脈の前衛である。これを越えた谷沿いの家々が小奇麗なのは、屋根がスレート葺きのせいであり、なるほど、ヒマラヤでは片岩には事欠かない。発電用ダムを渡り、谷を縫って、マナリに至る。冷涼で緑濃い街である。

これよりマナリ、レーロードに入る。粗末なチベット人キャンプの脇を通り、牧歌ムードの斜面から断崖の下を谷沿いに進む。このあたり花崗岩が多く、ベグマタイトらしいものも観える。峰のルンゼには雪が下がり、昨日までの平原の暑さを

思うと変化の大きさに驚いてしまう。やがて谷も浅くなり、山腹を縫って賑やかなマリ休憩所。サフラン売りにつきまとわれる。ロータン・パスを越える。4,000m近くあり、早くも私の最高到達点である。平原からの湿風をもろに受ける位置にあり、残雪多く、ガスに覆われひどく寒い。これより先、北へ向かうにつれ徐々に乾燥度は増してゆく。下って谷沿いに進み、パッセオのキャンプ地で泊まり。すでにこのあたり、河の源流近くであり、流れ沿いにも木は1本もなく、段丘は緑色だが、朝な夕なに羊の群れが嘗めるように草をむしってゆく。山腹に走る幾重もの横縞は、羊の群れの踏跡だ。背後の岩山から雪渓が道路脇まで垂れ下がり、清水が得られる。雪を混じえた峨々たる峰々が夕日に赤く染まり、そして星が瞬きだす。軽く酒盛りをし、寝ついたが、一晚中悪夢に悩まされた。この高さは3,800m。高度に呼吸中枢が慣れていなく、息苦しさ目覚め、深呼吸して眠り、また目覚める。酸素不足を象徴する魔物ないし障害が前に立ちはだかり、夢の中でこれに一晚中つきまとわれた。

残雪豊富なバララチャ・ラを越え、下って河沿いにひた走る。河岸段丘の浸食地形が見物だ。道路補修キャンプのところで昼食。這松の仲間らしい、地にへばりついた木があり、葉は刺で、座ると酷い目にあう。現地人はこれを鶴嘴で掘り起こして、燃料にしていた。テーブルマウンテンの見える手前から河に別れ、再び峠越えとなる。中腹で、例によって車はエンストしてしまった。なんと、ラジエーターの水が切れたい。現地スタッフが水捜しに行くが、南斜面のため雪もなく、クラクラと来る乾燥だけだ。ミスター・クマールが崖錐を駆け降り、途中で作業していたトラックに水を貰いに行く。我々の飲み水をくれと言わないところはさすがだ。どうなることかと不安になったが、どうにか騙し騙し上に抜け、雪渓の水にありついて、車に鱈腹飲ますことができた。下ってこの日は終り。キャンプ地は5,000m近くあり、皆さんぐったりでおとなしい。1名酸素を吸う。

私はこれといって申告すべき問題もなく、食後に酒を一杯所望したが、明日に残しておくと、関根さんにたしなめられ、やめた。

睡眠中の息苦しさも昨日よりは改善されたようである。明けてすぐ峠を越え、ゴルジュを下り、段丘崖のみごとな模様に関心しながら河沿いに行くが、またまた故障。日光からの逃げ場はないが、清冽な河の流れが救いである。そういえば、この流れが綺麗なのは、あたりの地質が雲母質でないからだ。内陸性の、湖底堆積層である。道路脇の変成度の低い泥質の脆い堆積岩からは塩類の白い粉を噴き出し、舐めると渋い。明礬の類だろう。挟まっている大理石を採集する。

下ってパッティで休憩。丘に登ると朝鮮朝顔の類が咲いていた。再び登りとなり、やがてチベットの景色もこうであるという、広大な荒原に行く。寂寥感に胸締め付けられる、なんとも旅情を誘うところである。道は右に緩やかに曲がり、浅い谷間を緩やかに登って行く。あたりには石英塊がごろごろとあり、山腹に白い脈が見える。人手で掘ったと疑わしいところもあり、行って宝物を捜したいところだが、こういうところでは車は故障してくれない。山腹を延々と縫い、車は埃をもうもうと巻き上げながら進む。窓を閉めても埃は床の穴から容赦なく侵入する。

タンラン・ラに至る。5,328m。手前でトラックが路肩から片足を落とし、救出に道を塞いでいたが、やがて開通。万物が高度障害に沈黙しているが如く、峠は非常に静かだった。雲母片岩が埃に砕け、足下に30cmも積もっている。ふかふかとして、ゴム草履の素足に心地よい。気分は悪くはないものの、寝不足のようなクラクラした感があり、カメラのシャッターを切るとき、息を止めると苦しいのには面食らってしまう。長居は無用。一気に下る。

途中、ヨーロッパ人らしいのが捕虫網を持って斜面におり、羊を追う牧童も網を持っていた。金になる高山蝶でもいるのだろう。ヤクがいる。途中さらに1名発病、酸素を吸う。下りきって流れの辺で遅い昼食。病人には気の毒だが、相変わらず飯は美味しい。河原に塩類が吹き出し、あちこち雪のように白い。河沿いに下ると検問所から、や

がて人家があらわれ、用水路脇に棚田の麦畑の緑が眩しく、清々しい。特異な仏塔、チョルテンが目につきだす。小豆色の山体に目を奪われ、やがて谷は狭まり、深い溪谷沿いに道は下る。このあたりからインダス河までは、ヒマラヤ褶曲模様の博覧会場であり、全く車窓に釘付けになってしまう。地面に興味ある者にとっては、ゆっくりとトレッキングで下りたいところだ。

思えば遠くへ来たものだ、インダス河の上流を渡り、ましになった街道をいっきにレーへ。王宮の廃墟の麓、なんとも荒涼とした異境の都である。明けてレー近郊のゴンパ見物へ。ヘミスのゴンパ。岩山の斜面を利用し、石積みと泥と木材の組合せでできた何層かの建物。梁は木であり、石積みのアーチはない。光あふれる眩しい中庭、迷宮のような暗い通路とひんやりとした小部屋。光と影の王国である。極色彩の異境の大仏。がらがらのようなマニ車。風にはためき、経文をうたうタルチュー。このマニ車といい、タルチューといい、妙な合理性に関心してしまう。秋田の梵天のような幟がある。寺の外には珍しく森があり、くぬぎの類がある。一体に、ここらの木といえば水沿いにポプラと柳しか見られないが、昔は谷筋にこうした森もあったのだろう。さらに街道筋のゴンパに寄る。殆ど廃墟であるが、細々と修復も行われていた。大仏がある。まだあどけない小僧たちが管理しており、経文を空んじる。

古都の喧騒と雑踏の大通りをぶらつく。土地の装束の野菜売りの女たち。かぶ、人参、きゃべつ、カリフラワー、大根など、荒れ地で育ち、いかにも無農薬といった、小振りで締まった体のものである。宝石屋の窓に、野菜売りの女が付けていた類の、土地の首飾りが飾ってある。大粒の青石のつらなり。青石はラピス、ラズリだろうか。ラピスと空が照応しあったような、星が瞬きはじめて群青の空と、赤々燃える廃墟の夕焼け。深い憂いをたたえている。異境のたそがれ。

レーからさらに西へ進む。一層乾燥度は増し、やがてインダス河から離れる。辺りは半砂漠の態だ。鉄鉱石と疑わしい、糞の堆積のような汚らしい山。緑色の山。紫の山。丘巻はナミカ・ラ付近の山岳砂漠である。ひたすら荒涼とした無機質の

世界に、風が渡り、雲が流れる。

道すがら、人家に天を向いているパラボラアンテナのようなものを何度か見た。通信用か、多分太陽炉の類だろう。人家には杏が多い。

ところで、インドに来て、道路にトンネルというものを見たことがない。日本の直線的山岳道路に慣れきっているせいか、ちょっと奇異なものだった。地形の違いということもある。金がかかるし技術がいり、時間もかかる。早い話が、北部山岳地帯はごく最近までロバ道しかなかったのだが、ここに急遽戦略上の要請にせまられ、ブルドーザーを先頭に崖錐を切り崩しながら、その後ろをすぐ戦車やトラックがついて行って、今の道ができたのだ。切割も極力避け、土留もなく、ガードレールは一切ない。コンクリートは珍しい。山腹をはるばると縫って峠を目指し、河幅の狭隘を求めて大迂回する。要するに、いまようやくどうにか自動車を通れるようになった、という段階なのである。そしてこの、どうにか、ということが、インドでは最上段階なのである。車もどうにか走り、どうにか目的地に着き、電気はどうにかつき、電話もどうにか通じる。人々はどうにか暮らしている。

ヒマラヤの崖錐は、道路基盤としてはかなり安定しているもののように見受けられる。路肩の崩壊や落石など、心配したほど見られなかった。補修はスコップ一丁の人海作戦と、脇にいくらでもある砂礫の移動で賄え、安定したところでアスファルトを流せば、舗装道路の出来上がり。後にも先にも、これ以上の道路はインドにはない。ある意味では、理想の道路形態といえなくもない。

暮れなずむ頃、インダスの支流はスル河のほとり、カルギルに至る。町の灯にはっとする。軍景色濃い前線の町。回教圏である。発電用ダムが進行中。白濁した濁流のなかに魚がいる。橋のもとで売られていた乏しい量の物を見れば、鯉とうぐいすの類である。

スル河を遡って、ヌンの麓、タンゴール村に至る。河沿いは緑濃く、麦、えんどう豆などの棚田が開かれ、斜面の荒れ地には貧弱ながら柳の植林も行われている。冬には羊が植林の幹をかじるとみえ、若木には幹に空き缶を履かせたり、いばら

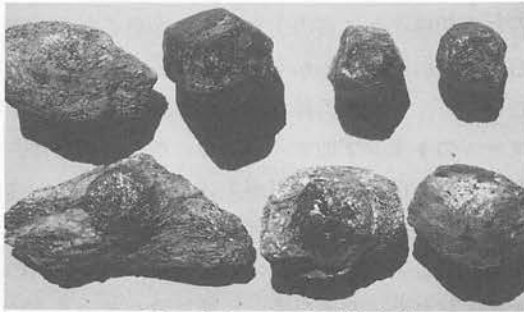
が巻かれたりしてある。ちなみに、屋敷や畑が石垣で囲まれてある場合が多いのは、所有権の主張ばかりではなく、家畜の侵入を防ぐためらしい。途中、あたりが緑色変岩の緑色の地帯があり、転石に透明感のある皮のようなものが見られた。あるいは玉の類があるかもしれない。スル河の左岸岩壁の下、クンの秀峰がみじかに眺められるタンゴールのキャンプ地で一日憩う。この転石は、変成岩類の白色雲母片岩が主体で、ざくろ石が含まれる。かささぎと、かけすがいる。

帰りのことだが、関根さんの後について、村の人家を訪れた。ひそひそと、頭蓋骨を求めるといふ。人骨かと思ってわくわくしていたら、山羊のことで、しかも1本の角でしかなかった。何層かの石積みの建物で、下には家畜が住む。穴倉のような暗い部屋で、床はブルーシート。目につくものは、真っ黒な石油コンロ1台と鍋ひとつ。布団が1組と、この脇の暗がりには溶け込むようにして、子供がひとりいた。長持ちがひとつあり、これに全財産が入っているらしい。マフラーのような織物を出して見せてくれた。これが全てだ。正直言って、この簡潔さは羨ましい。

谷を渡って花咲き乱れる放牧地を横切り、急斜面から雪の残るコルを越えると、センチック氷河の河原上のBCに至る。コルの左手に顕著な岩塔があり、氷河の水流はこれの東側を急激にスル河に落ちている。川は朝は水穏やかだが、午後には雪解けで増水して白濁の濁流と化し、毎日呼吸のように繰り返す。キャンプ地から河原を二十分ほど遡ったところの谷の真ん中に、小山のような岩体があり、氷河を堰き止める形で氷河の舌端を形成している。この岩体は長年の氷河の圧力に抵抗してきて、転石ではなく、地に生えた硬い岩体かと思われる。

キャンプ地入口脇、岩塔手前の変成岩中には一抱えほどの石英塊があちこちにあり、もしやと思わせるが、晶洞はなく、他に目につくめぼしい鉱物はない。この丘の草地には、たで科のお化けのような赤い花と、葱がはえている。ここからはスル河の谷とタンゴール村のアルプスの牧歌風景を一望にできて、大変眺めがよい。この川側のモレーンの中に、藍晶石が絡んだ岩塊があるが、

取り出しにバイルだけでは歯がたたない。ほんのりと藍色をした長板状の束である。河原を丹念に捜すと得られる。藍晶石はざくろ石とともに、ヒマラヤ変成岩の指標鉱物の一つである。



ざくろ石とその眼球状産状

BCから花畑を踏んで氷河に入り、右岸のがれ場からモレーンの堆積台地に登り、断崖脇の石溪を左手に登ってC1に至る。背景は、尖峰を頂いた高さ4～500mはあろうと思われる岩壁である。頂上からC1の登り口の雪溪基部に向けて西に落ちる尾根が認められる。C1峰西稜とでもしよう。登攀は快適なように思える。基部からトップまで、明確な地層が鮮やかに認められ、おおむね素直で、南北に水平にのび、東へ緩く傾いている。ヌン、クンも含めて、この辺り一帯が同じ向きにあるようだ。

テント場の上、岩壁下の崖錐で次のような石が拾える。真っ白い結晶質石灰岩、つまり大理石であり、粒状の方解石の集合である。さらにこれをルーペで観ると、正体は分からないが鮮やかな緑色の板状結晶が点在している。前者が薄い赭色に着色したものがある。より細粒で緻密なものがある。転石の大塊に、割れ目に沿って晶洞であった面があり、ここから1cm大の方解石の結晶が得られた。釘頭状結晶、犬牙状結晶、犬牙状が何個が連晶したもの等である。これら大理石群は、岩壁中段の白く輝く脆そうなオーバーハング帯に対応する。ザイルを持って宝捜しに行ってみたくところであり、その気になれば、尾根沿いにこのあたりまでは容易に行けそうだ。

真っ黒な鉱物からなる片岩がある。黒雲母ないし角閃石か。岩壁上部その他の黒色帯に対応する。黄緑色の硬い塊は緑簾石か。白色雲母片岩と、この白雲母に混じって薄緑色の雲母集合があり、クロム雲母か。石英塊があり、一部は緑色をしている。よく観ると、鉛ないし亜鉛の鉱物の小片が脇にあり、これが分解したものが染みこんで緑色を

してらしい。

崖錐上部を左に廻りこむと黒色の壁の下のバンドにでる。バンドの奥には可憐な雛菊がひっそりと咲いている。このあたりから、比較的まとまな形のざくろ石が得られる。層理に沿って石英脈が走っており、白雲母を挟んでいて、この雲母の中に、ざくろ石が多数埋まっている。径1cm以下のものがほとんどだが、結晶形がよく認められ、ほとんど真っ黒だが、赤色を示すものもある。このバンドの一段下のバンドを左に伝って、容易に尾根中段の広い肩の上部に出られる。テント場からも眺められる顕著なピナクルの下であり、裏側からこの上に立てる。このあたり、雲母片岩中から、大粒のざくろ石が得られる。片岩中に眼球状の白雲母の塊があり、この中にざくろ石が包まれている。手が届かなかつたが、径5cmを越えるものが露出していた。今回、3cmクラスのを何個か得た。雲母に包まれているため形は比較的まとまものである。道具を用意してじっくりと当たれば、良いものが得られよう。この辺りのざくろ石は、十二面体が殆どのものであり、色からして、鉄礬ざくろ石らしい。このあたりから上は、ザイルを持って遊びに行くのに絶好のところだ。下部はしばらく砂礫の台地である。野性の山羊のものらしい足跡があり、ケルンがある。岩から剝離したざくろ石等、礫地から拾えそうであるが、不思議に無いのは、人の出入りが結構あり、キャンプ地からの登山者か、土地の人が拾っていったからだろう。全くこのあたりは雲母の王国であり、テントの中の埃は、雲母なのか雲脂なのか、見分けがつかず、遠雷の稲妻と星の下、夜、外に出てライトをつけると、明かりの中に雲母片がきらきらと舞っている。

これより上、蟹鍬付近とヌン頂上に露岩が見られ、いずれも茶灰色の、くすんだ色の雲母片岩である。悪さする鳥がいる。C1付近には、嘴の黄色い小型のものと、普通タイプのもので2種類いて、C2のテントを壊したのは後者である。

帰りに、デリーのホテルの宝石屋で、ラピス、ラズリの原石を買った。塩素を含んだ特殊な鉱物で、青金石とも言う。瑠璃とも言う。重さ1.5kgほどあり、1万円であった。深い群青の中に、黄鉄鉱の金色が星のごとくちりばめられ、間違いなくアフガン、バダフジャン産のものである。眺めるたびに、ラダックの黄昏の空を想いだす。

インドヒマラヤ・ヌン峰 タンゴール村にて

沢田幸子

アクシデントの為はからずもみんなより一足先にC1～BC～タンゴールへと降りて、メディカルセンターで医師の手当てを受けることになった。少し気分も落ちついてきた14日朝食後、ドクターとクマール氏の案内で村の中を少し散歩してみた。

刈り入れを真近にした一面こがね色の麦畑を通りぬけ、向こうの木陰から子供達の声が聞こえる。村のオープンスクール、つまり青空教室である。小・中学生くらいの子供達が細長い（たたみ2枚をつなげたような）敷物に座り、クラス別に先生を囲んで勉強中だった。緑陰子供会のような雰囲気、青年のような人が先生である。ドクターに案内されてきた私を見て生徒の1人が、かたわらにあった椅子を持ってきて坐るようにと言う。

授業を中断した上級クラスの子供達の教科書を見せてもらう。ここカシミール地方の主要言語であるウルドゥ語、ヒンディ語、英語と国語だけでも3つのことばを習う。あとは算数と理科などである。社会や体育、芸術関係の図工や音楽というような科目はない。オープンスクールとはいっても、子供達の服装はきちんとしているので、ある程度経済的にゆとりのある家庭の子供達なのだろうか。日中、村で見かけた子供達は、実にホコリっぽく裸足で服装も貧しくみえた。

教科書を広げてみると、英語は日本の中学生が使うのとはほぼ同じようだ。あとはヒンディ語も何もまるっきり分らない。私の素朴な質問にも丁寧に答えてくれて、皆礼儀正しい。授業は9時30分から5時までで、昼食は各自持参してみんなと一緒に食べるというから、毎日がピクニックみたいに思える。ごく少数の子供達がカルギルやスリナガールの上級学校へ進むそうだ。私がこんな怪我をしていなかったら、もっともっと子供達にとけこんで半日でも1日でも一緒にいたいと思った。

ヒマラヤの西端にあるこのカシミール地方は、インドでも有数の風光明媚なところで、かつては「アジアのスイス」とも呼ばれていたという。イスラム教徒主体のゲリラによる分離独立運動が高まりをみせている現在、このタンゴール村では少

しもその緊張感はみられない。住民のほとんどはイスラム教徒で、礼拝を欠かす人はまずいない。ドクターも然り。クンの鋭峰が眺められる村の中腹に建っているモスクは、昨年から建て直しが始められ、あと1年くらいで完成するそうだ。一般の人の住居が石と泥で固めたようなほこりっぽいのに比べ、コンクリートで作られているモスクは未完成でも立派だった。

メディカル・センターの斜め前の家に赤ちゃんがいる。毎日夕方になると母親があやしながら現れる。とっても表情の可愛い赤ちゃんだ。歩けるし片言もしゃべっている様子からみて2才くらいだろうか。母親が何か作業をする時には背中へばりついている。まるで猿の子供みたいに確りとつかまっている。母親は毎日夕方の礼拝をすませると、子守歌をうたい、その小柄な赤ちゃんにほほずりをする。まるでなめまくる……という感じである。でも着せられている1枚の衣服の下、おしりは丸出しである。近所の母親が6～10ヶ月くらいの子供をつれてきてのおしゃべりのひととき、やはり着物1枚で、下は丸出し。しかしそんな小さな赤ちゃんでも、頭にはちゃんとストール(?)を巻いている。だからきっと女の子なのだろう。かぶりものをしていない女性は、まずいない。

昨日の夕方お腹が痛いといって父親に連れられて、ドクターを訪れた7～8才の可愛い女の子は、フリルのついたピンクのきれいなストールをまいていた。また夜訪れた老婆の頭には、こげ茶色のストールがあった。イヤリングもブレスレットもつけていた。でも足は——足は生まれてから多分ずっと靴など履いたことはないだろうと思われるような足だった。そして女の子から年配まで女性はみんなイヤリングをつけている。あんなにホコリッポイ農作業をしているのに、身を飾ることがチグハグのように私には思える。

夜も8時か9時を過ぎると、どの家も暗闇にとざされ、シーンとして赤ちゃんの泣き声も聞こえない。この村には電気はないし、無線も通じない。

河の水を引いた水道は広い村に1ヶ所、ローソクもドクターの駐在しているここだけのようだ。

短い夏、あと1ヶ月もすると雪に見舞われる。今は麦が色づき、祭りが終わったら取り入れに忙しくなるのだろう。チャパティの原料となる小麦の他、青豆や少しの葉物野菜ぐらいしか育たない高地だ。冬になると羊や牛と共に干し草の中で生活し、燃料はそれら家畜の糞を乾かしたものを使う。雪の中で暮らす9ヶ月なんてきくと、インドは暑

い国なんて単純に思っていた自分の無知が恥ずかしくなる……。

夕方懐かしい声が出た。私が12日に託したメモを見てBCから吉岡さんが見舞いに来てくれたのである。アタックは1回目は不成功で、再度試みているという。「とりあえず、これだけ持ってきました。明日又きますから……」と言ってBCへ戻って行った。せめてもの朗報を心待ちにしながらシュラフにもぐり込んだ。

HNE - 91

吉岡 俊博

7月某日、母校の関係者が内輪で壮行会を行ってくれた。学年では1年後輩であるが、ヒマラヤ登山では大先輩であるHAJ田辺君が、「ゴロゴロ・ピーといったらこれはまちがいありません、肺水腫です。」と言ったのが、かなり酔っぱらった頭に残っていた。蒸し暑いニューデリーを発ち、ダークグリーンターバンに機関銃が緊張感を与えるチャンディガールを経て、涼しい登山基地マナリーに到着。翌日から5,000mを越える峠越が始まるというのに、成田で買ったグレンリベット1リットルは、あっという間になくなってしまった。こうして、3日間にわたる苦しい峠越えは2日酔いで始まる。ロータン峠では元気に丘を登った。その日の幕営地で、隊のバス運転手に勧められ強いインドラムを流し込む。翌朝、テントをたたむ元気があった。いよいよ5,000m近い峠。雪の残る峠でも、シャッタを押す元気はあった。バスの中で何となくだるく、暗くなって着いた4,000m近い幕営地では、食事をやる気力もなかった。テントから10mほど歩いて小雉を射つが、すぐそこに見えるテントをこんなに遠く感じたことはない。やっとの思いでテントに入り、深呼吸すると“ゴロゴロ”といった。暗いテントの中で何回も深呼吸を繰り返す。帰国後、会社の上司に「吉岡君はまず酒に気をつけろと言っただろ。」と言われた。5日間の入院による出遅れより、再発の不安が行動を制限した。登山活動では、全く隊に貢献することができず、不本意であった。C3まで上がることはできたが、上部ではいつも再発の不安がつ

きまとう。体質的に高所は無理なんではないだろうかとも考えたが、5,400mのC2に5日間滞在したことで少し自信を取り戻すことができた。もう一度、高峰に挑戦したい。

ヌン登山隊、隊員の皆から学ぶべきことは多かった。HAJの方々、1カ月半の長期休暇を許可してくれた会社の上司、インドの関係者にも感謝している。家族も理解は示してくれたが、もう1度行くことには強く反対している。賛成してくれる、“家族”を早く作らなくてはと思う。



アイスフォールを登る

ヌン13年目の邂逅

中岡 久

ヌンは僕にとって正に13年目の邂逅である。1977年頃所属山岳会でのヒマラヤ登山を模索していた僕は、様々な資料等を漁っていた。しかし、それは結局実現できずに終わった。そして僕自身は資料漁りの中からH A J（当時はH A A J）の存在を知り、翌1978年H A Jヒマラヤ登山校隊に参加したのであるが、その登山学校隊の当初の目標の山が、ヌン7,135mの頂きであった。そして、参集してきた多くのメンバーの動機の一つは、僕自身がそうであったように、現在と同様やはり目標の山がヌン・7,000m峰であったことにあった。しかし、このヌン登山は当時のインド登山情勢の変化により、許可取得が困難となり、目標の山をトリスル峰に変更していったのである。（その後、この年のヌンはH A Jのたゆまない渉外活動等の努力により結局許可を得ることが出来、実施された。）そんな経緯もあって、それ以来ヌンは心に残っており、憧れの山であった。

参加したトリスル隊には、その後H A Jの中核となった人達、又、その後所属山岳会でヒマラヤ登山を実現した人達と、多くの有能なメンバーが参集していた。稲田隊長を初め、野中副隊長・亀井登攀隊長・飛田・角田・八嶋・釣部（現姓小泉）・安中（現姓森）隊員らの面々である。その他の隊員達もその後登山活動に積極的に打ち込んでいた人達だった。亀井登攀隊長は、ヌン登山の直前、不幸にしてカラコルム・ハチンダールキッシュにて遭難死され、又、野中副隊長も谷川岳東尾根にてヒマラヤ登山への準備山行中遭難死されたが、八嶋隊員は、トリスルの直前、許可されたヌンに参加していたし、飛田・角田両隊員は、その後、1983年のヌン登山隊に隊長・副隊長として登頂に導き、又、小泉隊員は、1987年ヌン女子隊の副隊長として登頂した。（角田隊員は、1985年ナンガバルバットに隊長として参加、遭難死された。）

このように、ヌンは当時のトリスル隊メンバーにとって宿縁の山であったかとも思う。そのヌンに縁あって僕も13年目にして相まみえることがで

きた。感慨無量の思いであった。しかも今回は因らざるも隊長ということであった。参加が決まっただけからは、当時の資料を引っ張りだし、13年前を思い出しつつ、僕なりの準備活動に入った。しかし、当時とは状況が異なるとはいえ、又、H A Jの過去4回のヌン登山隊の経験があるとはいえ果たして僕に無事隊長を務まるかと案じていたが、関根副隊長及び橋本・伊藤（守）両登攀リーダー・全隊員の良好なチームワークでもって3名の登頂者を送り出すことが出来、無事に帰国することができた。本当に感謝の気持ちで一杯である。

相まみえたヌンは、やはり予想通り素晴らしい山であった。さすがにカシミールの盟主である。スノープラトーから望んだその白く輝く頂きは、どっしりとした山容で僕等を迎え入れ、いかにもその頂きに招くようであった。それは正に神々の微笑みであった。僕自身は、登頂はならなかったが、それでも一つの宿願が叶ったということである意味では満足している。しかし、もう一度ヌンに相まみえたい気持ちもあり、いずれはという気持ちになっている。

そして今感じるのは、13年前予定通りヌンに行っていたら果たして今の僕が在っただろうかという思いである。人というものは、面白いもので一つの結果で右にも左にも行ってしまふ。13年前トリスルには登頂できたが、ヌンだったら果たしてどうだっただろうか。多分無理であっただろう。だとしたらその後のヒマラヤ登山が成し得たかどうか。そういう意味では13年前のヌンあるいはトリスルというのは僕にとってヒマラヤ登山への分岐点だったのかもしれない。そう考えるとヒマラヤ登山というものなかなか妙味があるものだと思う。

13年という年月は長い。僕も中高年と言われる年代になってしまったが、さらに人生は長い。（多分長いと思う。）その人生をさらにより良いヒマラヤ登山に向けて行こうと今考えている。

高山病雑感

関根幸次

スリナガールの政情不安により、空路スリナガール經由カルギルのルートはとれない。仕方なくレーからアーミーロードを使用しなければならなかった。このアーミーロードは陸路でレーに入る道で、最高の標高がタンラン・ラ(5,342m)の峠を越さねばならない。砂漠の高所山岳ロードで、高所順応もなくバスは走り続ける。

マナリ(2,800m)に泊り、翌日パトセオ(3,800m)は富士山と同じ高さで、隊員はこの高度は経験済みで、既に多少は順応しているようで、高山病的症状は現われなかった。

7月18日、デブリン(4,700m)時のキャンプでは殆んどの隊員は何んらかの高所障害が出て、12名の隊員中3名が夕食を食べたに過ぎなかった。その中で、Y隊員は早々に肺水腫の危険な高所障害が出てしまった。O₂を吸入幾分おちつきをみせてきた。H隊員はY隊員を一晩中看病していた。私と同じテントのS隊員も頭痛に悩まされ、典型的高山病の症状であった。19日の朝は一部の隊員を除き、朝食も食わずバスに乗り込む姿は痛々しさを思う。

1991年度サマーキャンプ隊員募集要項の中に、「アプローチをマナリ～レー・ルートになろう。この山岳道路はバララチャ・ラ(4,954m)、タンラン・ラ(5,342m)と云った高い関嶺を越え、4,300m位(実際には4,700m)高所にキャンプしていくので初期高度体験としては少々辛い。唯、アプローチでこれだけの高度経験をしていくので、BC入りした時初期高度順化は楽になる」と記述されているが、実際に経験してみると方程式のようにいかなかった。

バスに依る高所障害は、歩行に依る高所障害よりダメージが大きく、長時間尾を引くような感触を受けた。

レーに着く前に3名の隊員が肺水腫の初期症状でO₂の吸入を受ける結果となってしまう。早々レーの病院で診断を受け、病院に入院し治療を受けることになった。入院した3名は2～3日レーの病院に留まり、回復を待ち、BC入りと決まる。

私はデブリン(4,700m)のキャンプで風邪をひき微熱が続き、時折り身体がだるい。パニカルの

ゲストハウスでは食欲もなく、明日のBC入りが心配で、眠れぬ夜となってしまう。パニカルからタンゴールまで2時間の歩行は苦しかったが、道の両側に咲く高山植物の色彩に慰められながら辿り着けた。

タンゴールに着き「今日は村のお祭で、ポーターが集まらず明日にBC入りは変更する」と言われた。今朝から37度の微熱で体調が悪く、今日のBC入り延期は助かる。隊員が氷を採り、氷枕にしてくれ、皆様に心配をかけてしまう。夕方には35度の平熱に下り、明日のBC入りができると安心する。26日はBCへ隊荷がタンゴールから上ってくる。到着した隊荷を確認するため、LO、沢田、関根がBCに残る。沢田は高山病で頭痛がし、BC周辺をぶらぶらしていた。

27日C1へ荷上げ、若い連中と同じ登行を続け「ビスタリー」の鉄則を忘れ、一気にC1へ登ってしまった。下山はビスタリーでBCまで降りたが、私の高山初期症状の胃けいれんが起きてしまう。BCに着き30分ほどで回復したので元気を取り戻した。28日は沢田と同行し、ビスタリーに徹し、他の隊員より1時間遅れのスロー・スピードでC1入りした。結果は昨日とは異って足のだるさはあったが、胃けいれんの症状は出なかった。ヒマラヤはビスタリーに限る。

過去3回の遠征で4,000m～5,000mの高度で、高所障害が出るのが私のパターンである。この高度で自分の異常を感じ、下山するなり休養等の対策をとらねばならない。高所障害も3,000mを越すと、高山病の症状が現れてくる。これも、個人差があり、同じ人でも、その時の体調や環境によっても違ってくるので、一口には言えないが、朝起きて異常を感じたら決して無理をしないことである。

今回は隊員全員に健康手帳なるものを渡し、毎日の自分の健康状況を知ってもらった。健康手帳で自分のバイオリズムを知ることができ、「今日は気分が優れない」とか「身体が何気なくだるい」といった初期の感覚を大事にする。高所順応の経験を重ね、自分のバイオリズムを作っておくのも、高所障害を知る意味で大事なことである。

高山病にもめげず

滝口良二

91年にヒマラヤへ。仲間と計画していたが、中止になってしまい、H.A.J ヌン登山隊への参加を決める。

登山が終了して、思い返せば、色々な思い出と失敗ばかりの49日間であった。

特に、先発隊から（病気で病院に行った事もない身でレーの病院に4日間入院）後発隊になった事が一番印象的である。

7月18日

デブリン到着後、食欲もなく少し食べて寝てしまう。

7月19日

朝食は飲み物とマンゴーのみ。マナリ～レーロードの最高所ランタン・ラ 5,328mの見渡せる地点までくると調子が悪くなり酸素吸入となる。

ホテル到着後、レーの病院へ診察に行く。

7月20日

ホテルで休養。（ほとんど寝ていた。）

15時頃、再度病院へ出向き胸部レントゲンの結果、肺水腫と診断され3名共即入院となる。

※思えばマナリでウイスキーを飲んだ人間ばかり

7月21日

O₂ 吸入（23日迄）と坐位姿勢が続くが、長く寝そべてしまい、再三同室の吉岡君に注意される。注射の時間になり看護婦が、多くの針の入った物を持って来る。一応煮沸消毒がしてあるとの説明であるが気味悪くポーターのバスンに町まで行って注射針を買って来てもらい使用してもらう。

途中トイレに行くがビックリ。やはりここは野糞の国であったのだ。これ以降、食事の時間前になるとゲップが出て、何も食べれなくなる。

7月22日

採血（手の親指に注射針で穴を明け血を押し出してホースで吸いガラスにこすりつける。）

検尿（日本ではコップであるが、入口の狭いこのビンにはどう入れようかと考える。）

注射1本（入院中合計3本）

良く寝れるが、わざわざホテルから持って来てもらう食事もうけつけずジュースのみ。

I T B Pの人が来る。明日も又来るとの事。

“せめてラーメンでも食いたいノ”

7月23日

入院生活が続くと減入るのでホテルへ戻れる様に支配人のMr. トシとDr. ヌルボに相談する。

I T B Pの人達が4人心配して来て下さる。隣の森山君の部屋には、ヨーロッパの女性がレーで高山病にかかり入って来てにぎやかである。

7月24日

レントゲン撮影及び眼底検査。

眼科医にはレーより下るか、デリーまで戻る様に宣告されるが一応退院してホテルで様子を見る事になる。17時退院。

“入院費は無料。ただしレー・ラダック州のみとの事。あなた達は日本人であるが現時点ではラダック州人とおことば” どこかの国の厚生省にも聞かせたい話である。

ホテルで日本人観光客が置いていったというみそ汁を戴く。

7月25日

9時頃シャワーを1週間ぶりにあびてスッキリ。

夕方シカル社のクマール氏とDr. ヌルボ氏が来て明日出発する事に決定する。

7月26日

5時30分ホテル出発。途中シカル社のコーチと出会う。その先の村ではラダックの祭りの最中であった。14時30分カルギルのホテル・ゾーヅラに着く。

明日はバスンが、早朝バスで出発しBCまで往復して食糧テント等を下ろす予定。

7月27日

カルギルを出発して2時間程で待望のヌン峰、白い大きな姿を表わしてくれた。

昼食も食わずにパニカルを通過してタンゴールに到着するが人影もない。

16時頃食料とテントが持ってこられてさっそく日本食を腹一杯食べる。1人、クン峰の見える大岩の下で寝る事にするが、本隊はどこまで行ったのだろうか、と気になる。暗くなる頃村人3人と

と医者が来たのでタバコをプレゼントする。いよいよ明日はBCノ

7月28日

8時タンゴール出発。途中は一面のお花畑。疲労感もなく10時30分BCに到着。本隊と合流する。

8月6日

いよいよC3まで往復する事になる。少量ではあるが、荷上げもさせてもらうが、やはり高度も上り8kg減量の身ではつらい。途中ルート工作隊の3人と出会い、もうすぐカニのハサミと聞いてホッとす。フラフラになりながらC3到着。写真の方はカメラの巻き取りが出来てなくC2より上部の写真はシャッター音のみ、は残念であった。

しばらく休憩して1人C2目ざして急降下。C2に着くと例のカラスが又やってきてゴソゴソやっている。追っ払いテントの中に入り水を作るが泡でもない物が湧き出てくる。よく見ると油の気泡である。数回コップを変えて沸かすが同様

で周囲は油で真黒である。クエート油田のガスがここまで飛んで来た物である。

8月7日

朝から紅茶だけ飲んでC1へ向う。長いプラトールを歩いている時はいつも天気が良くヌンの頂上も真近に見える。今日はC4へ向う二次隊の姿が見うけられる。登頂を願いつつのんびり歩く。

8月23日

レー以外では悪くなかった体調が、朝からおかしく、観光バスに乗りしたカルカッタではバス内にダウン。特に成田行の飛行機内では油汗、下痢、はきけの三重苦である。「帰国拒否症」であろうか？ 成田へ到着して快方へ向うが、これからまた土産のボッカに苦しみながら帰路に着いた。

今回あたたかく送り出してくれた肉親、友人、会の仲間、職場の皆さん、そしてHAJ事務局、隊員の皆様へ心から感謝御礼申し上げます。

ア グ ラ 滞 在

森 山 英 穂

ジャイプルの中央バス・スタンドで、念のため前日に予約をしておいた。列車よりも速くつくし座席も良いので、近距離の場合は、バスの利用価値は大きい。イドガー・バス・スタンドについてオート・リクシャーを適当にみつけ、ホテルに着く。

途中、真暗闇となったので不安になったが、無事着いた。

翌朝、もっとタージ・マハルの近くに泊りたくて、ホテルを移る。散歩がてら歩いていくと、オート・リクシャーが、ひっきりなしにしつこく声をかけてくるが、無視して歩く。アグラ城の前を通過して、公園通りをぬけると、タージ・マハルの西門につきあたる。リクシャーがたむろし、インド人の観光客も大勢いる。やはり、インド人にとっても、タージ・マハルは、一見の価値があるのだろう。南門にまわり、目的のホテルを探す。

部屋を決めて、屋上へあがると、タージが、すぐ目の前に見える。ホテルの前の雑踏を眺めているのもあきない。

タージは、すぐに行けるから、まずオート・リ

クシャーで、アグラ城、イディマッド・ウグダウラー廟を見物に行く。ヤムナー河の流れは、予想よりはるかに速く、しかもとてもきたない。これが“聖なる河”なのかと驚く。ホテルで休憩して、いよいよタージ・マハルへ行く。じっくりと味わいたかったので、観光バスに乗らずに、とっておいた。赤砂岩の正門から、一步々々、芝に囲まれた正面通路を、大ドームにむかう。大きな玉ネギのようなドームがなかなか愉快だ。雨が降ってきたので、中で雨宿りする。大理石で造られているため、チャットルでは、足元が滑りやすく怖いおもいをした。小降りになった隙についてホテルに帰ると、ヴァラナシーから、日本人が2人来ていた。ソーダを飲みながら、情報交換をする。

翌日、ムガルの旧都、ゴースト・タウン、ファテプル・シクリーへ観光バスで行く。アグラの南西37kmの遺跡は、道すがら、かつてのおもかげを、400年後の今日まで、かすかに伝える。

ヴァラナシーへの列車の時刻まで、もう一度、タージを訪れる。やはり壮大であった。

夜空をバックにヌン峰を撮る

伊藤 守

登山も終盤を迎え今日3人が頂上に立った、C2泊も今夜最後である。残り少ない食糧を中岡隊長と2人で食べる、テントのベンチレーターからのぞくと今夜も星空が美しい、日本の山で見る夜空はどこでも地平線に町の明り、光害に汚染されている、それに比べこのC2(5,350m)は穂高の涸沢カールより二周りも大きく地平線をふさぐのはヌンの北西壁とD41峰程度だ。そして肝心の星空は夏の天の川がスノープラトーの地平線方向からクン峰のはるか上を通りヌン北稜、南空へ延びている、日本での天の川に比べ星の数はあまり変わらないが天の川の中に点在する暗黒部、星の集合した部分がまるで清流の中に点在する飛び石、光かがやく水面を思わせるほどにはっきり見ることができる。これをカメラに収めない手はないがあるのはカメラだけレリーズはC1、三脚はBCとなにもない、代りになりそうなものはないかとテント内を見回わすが、たいしたものはない、それでも高所障害の頭は、自分勝手にアイデアを模索し、洗濯バサミのまるいバネと輪ゴムでシャッターをおしっぱなしにすることを考え、ベニア板2枚で雪面にカメラの背中を固定することにして、いざ実行となった。まずは、洗濯バサミを壊しまるいバネを変形させ輪ゴムでカメラに固定、試してもうまくいく、外にでて、雪面をスコップでならしベニア板の位置を調整し、カメラをセット、まずは準備OKである。ベニア板の温もりで雪がとけカメラが動いてはいけけないので30分後にシャッターをきり、その夜は、露出20~70分、合計4枚の写真を午後11時まで、撮り続けた。

翌朝アタックメンバー3人がC2に無事降りてくる、中岡隊長とメンバーの感動の握手をわたしはビデオカメラのファインダーを通して見ている、胸が暑くなりカメラは揺れた。ヌンに来て本当によかった瞬間でもある。

C1から上がってきたハイポーターらとC2に残る装備を担ぎ下山する。スノープラトー端、アイスホールに下りかけるところで最後のヌンの勇壮な姿を眺めアイスホールへすいこまれるように

降りた。

スノープラトーから昇るオリオン

最後のC1泊夜中、テントからゴソゴソと起き外にでる。空は薄明前なので星空は墨を流したように暗い、スノープラトー上にオリオン座が昇ってきている、星座を形どる右下のリゲル1等星が昇るまで待ちシャッターをきる、スノープラトー上の空が紫そして紺色に変るD41峰が紺色からだいたい色に変る、素晴らしい場面である。メンバーを起こして見させたいくらいだが、岩に腰かけ自然の流れに一人背いしれた。

BCで流れ星の観測を実行する

最後のベースキャンプの夜は食後の雑談で毎度盛り上がる、程無く酔ったりエゾン・オフィサー(L・O)が輪中にはいる、メンバーによって好き、嫌いのL・Oではあるが登山スケジュールに文句のいわない、BC滞在型L・Oは好きである。今夜は三脚、レリーズがあるのでカメラ撮影は楽だ。89年ガンゴトリでは天気が悪く星の撮影がままならなかったのに比べ今回は連日晴れである。

今夜は流れ星でも見ることにする。テントから寝袋ごと外にでて夜空を見て流れ星が出現した時刻、明るさを等級で記録する100分で7個の流星を観測することができた。多分標高4,200mでの観測は日本人でも数人であろう。

流星観測記録用紙 (軽路記録用) No.199102

観測者: 伊藤 守 観測地: インド J&K 州 { 経度: -75°58' }
ヌン山 B.C { 緯度: +34°03' }
{ 海拔: 4200m }

月日: 1991-08-17/18	平均雲量: 0	係 数: 0.8							
観測開始: 22h 00m	月令: 一 方向上の方位角: 一	修正平均: 12.5							
観測終了: 22h 30m	記録流星数: 一	観測方向: Peg							
観測時間: 30m	数えたるもの: 5								
時刻の精度: ±1min	合 計: 5	備 考:							
視 相: G (最数量: 5.5)	一時間平均: 10.0								
番号	出現時刻	確 度	目撃者	光度	速度	色、痕、その他	群	出現位置	通番号
-	22h 05m			1		Tr.			3
-	13			2					4
-	14			3					5
-	15			4					6
-	18			0		Tr.			7
									-
Time is J.S.T.									



ムン北西壁（露出70分）



スノープラトローから昇るオリオン（露出10分）

レーの出来事

伊藤英世

4,000、5,000 mの苦しい峠を越え、やっとレーに着いた。1日、8時間もバスに乗っていたので、休みの日ぐらい街中をブラつきたく、マナリ同様中山さんと歩き回った。

チベット人が目立つ、この街で人がいいパキスタン似の、おじさんの手招きで郵便局前の建物へ連れていかれた。（まるで、香港でコピーのローレックスを買うように）その小部屋で、おじさんは何枚ものシルクのカーペットを広げてみせてくれた。120～200 \$もする、なかなかのものだけに、昼食後、又来ると言ってきた。（買う気はもうとう無い）

しかし一軒だけで、よせばいいのに「見るだけ見るだけ」と一応、日本語を喋べる、これ又パキスタン似の兄ちゃんの宝石店に入ってしまった。中でネックレスを見せてもらった。ラピスが、たくさん使われている、ネックレスは105 \$もした。色々と見せてくれるが、買う迄帰らせてくれなく、そのうち宝石へと話しが、もつれてしまった。その兄ちゃんは、アタッシュケースの中に厚紙に包んだ宝石を、とりだし皿天びんを使って、1カラット、何 \$ かって英語で説明しだした。ガーナ、

ムーンストーンは1カラット、7 \$。ゴールドントパーズは15 \$。そしてアレクサンダラは20 \$も、するのだった。宝石の値段の判断は一般の人では難しいので、この場合高いのか安いのか分らないのだが多分、我々外国人には、ふっかけてきているので、この店も昼食后又来ると言ったら、その兄ちゃんはガメつくなくなってしまい中山さんの白いボールペンを、とり上げて、次に来たら返すと勝手に決めつけてしまい、とうとう返してくれなかった。中山さんには申し訳けがないけど、ボールペンは勘弁してもらい逃げるようにホテルに戻ってきた。

その後、1人で街をブラついていたら、その宝石店の、おじさんと兄ちゃんに見つかってしまい、シカトしたのだが中山さんは夕暮れ、最初の店の、おやじにバッテリー会い、えれえ怖い顔で、明日の午前中に必ず来いと、おどされてしまったのだ。

翌朝、早くカルギルへ出発するのだが、昨日のおやじがホテルの前で待っているんじゃないかと思い、僕は辺りをキョロキョロ見わたし、バスに乗りカーテンをしめて、ビクビクしていたのはもう、言うまでもなかった。

遠征中の小遣帳

中山裕朗

7月14日に買った上野～成田のスカイライナーのキップ、指定は1号車1番A席だった。

7月15日、デリーに着いてブラブラ出掛けた。ホテル・ジャンパスからコンノート広場に向かう途中、チベットの土産物屋がある。のんびりしていて、11時頃ぼちぼち店が開きだす。ここで買ったズボン、ブルーでしゃれたデザインの物だった。ところが股の間から破けてきて、7月20日、仕立屋に縫ってもらった。生地が弱くこの後も破け、BC撤収日にゴミと一緒に燃やした。

7月15日にヨガの本を買った。登山期間中にヨガの練習をするつもりだったが、まったくしなかった。帰ってきたら体が堅くなっていた。

7月20日にマンゴーを1kg買った。甘く水々しいマンゴーはおいしかった。日本のスーパーなどでは1パックいくらというのが一般で、計り売りするのは肉位か。むこうでは果物、野菜、鍋釜に至るまで、希望の重量をてんびんで計り売りしていた。この方が客に対して良心的だと感じた。

7月20日から21日はレーに滞在し、日本語が達者で強引な(手をつかんで引っ張る)店員の「ミルダケ、ミルダケ」につられ、みやげ物屋を見て回った。店員がソーラー電卓に興味を持ち、見せるとうるさい。ドルで買うより物で交換した方が安く済みそう。

街頭の靴修理屋に頼んでサンダルの底へ、タイヤのゴムを張ってもらった。踵だけで15ルピー、底全面で70ルピー。高いと思ったが全面のコースで頼む。タイヤのチューブをノミの様な刃物で器用に切っていく。何時まで開店してるのかと聞くと、指で空に半円を描く。おてんとう様の出てる間という事か。彼等は時計を見る必要のない、のんびりした生活を送っているのだろう。

登山が終って下りてくると買い食いしまくっている。ツァモサ(ジャガ芋の揚げ物)、ビスケット、ジュース、チョコレート。ビスケットは、素朴な味でおいしかった。屋台のジュースは「帰るだから少々腹こわしても」のつもりで飲んだ。

8月22日、オールドデリーで果物を買う。マン

ゴー、リンゴ、バナナ、パイナップル、ヤシの実。ホテルに帰ってから1人で食べてしまった。ヤシの実はとても堅く、ナイフで5分位かけて穴を開けた。コップ一杯分で甘かった。

買い食いばかりしていないで、地図や写真集や民芸品を買っておけば良かったとも思う。オールドデリーの乱雑な町並み、人込み、屋台のジュース売り、牛、ヘビ使い、猿回し?、騒音……の中で汗をかきながらのウインド・ショッピングは楽しかった。またインドの町並みをサンダル履いて歩き回ってみたい。

【小遣帳】

日	品名	数量	値段	日	品名	数量	値段
7/14	立川～上野		640円	7/21	ジュース		8RS
	上野～成田		1630円		ミルダケ		25RS
	空港使用料		2000円	7/22	地図		25RS
	缶ジュース		100円	7/25 ～ 8/17	登山期間		
	酒(ロイヤルハイランド12年)		2900円				
	タバコ(マクドナルド)	1カートン	1200円				
7/15	ズボン		75RS	8/18	ジュース		7RS
	ミルダケ		19RS		ツァモサ		1RS
	ジュース		11RS	ビスケット		13RS	
	本		60RS	ジュース		8RS	
	テレビゲーム		5RS	8/19	ビスケット	2コ	9RS
					チョコレート		7RS
7/16	ミルダケ		17RS	8/21	おみやげ		1005RS
	チップ		3RS				
	ジュース	2本	8RS	8/22	マンゴー	1/2個	25RS
	ジュース		6RS		リンゴ	1/2個	
	ジュース		5RS		バナナ	1/2房	
	細引	20本	40RS		パイナップル	1コ	
セッケン		17RS	ヤシの実	1コ	6RS		
				ジュース	3本	15RS	
7/17	ジュース		7RS	ジュース	2本	8RS	
7/20	ズボン縫い		5RS	8/24	成田～上野		1630円
	ハガキ	5枚	70RS		上野～立川		640円
	マンゴー	1個	18RS		缶ジュース		100円
	ミルダケ	2本	20RS		べんとう		300円

① ¥合計 ¥11,140

② RS合計 RS1,588 = ¥7,940

(1RS=5円)

③ 合計 ①+② ¥19,080

ジャイプール

伊藤英世

インドで列車に乗って旅行へ……。なんて息込んで、駅に行ったものの、切符1枚を買うにも一苦労した。まずデリー駅の問い合わせ窓口で、列車名、2等席と時刻表を指差し説明する。窓口さんの指示で申し込み用紙に必要事項を記入して再度窓口へ、あやふやな英語と隣りにいたフランス美少女にフォローしてもらい、やっと切符を手に入れた。(300km, 急行券、乗車券で57ルピー)

チャタク・エクスプレスという急行列車は8時間もかけて300km離れたジャイプールに着き、夜は乗客専用の仮宿泊所に泊まる。2人部屋で80ルピー。蚊にさされたがデリーよりは清潔で、新聞、ティーサービスもあった。

ピンクシティを歩いて、風の宮殿ハウワー・マ

ハールを見に行ったが、バザールの人ごみは大変なもので、また期待したハウワ・マハールは意外に汚く、興味は薄れた。帰りぎわの天文台は広々として休まるスポットだ。なんといつてもしつこくせまってくる人がいないのは最高だ。

他にもガルタやアンベール城にも行きたかったがモンスーンの長雨とスパイシーなターリーで下痢したりで翌日はホテルで休養。丈夫な伊藤守さんは、昼はビール買い込んだり、夜は知らない兄ちゃんと中華料理にと急しそうだった。

その翌日も雨なので予定より早くデリーへ帰る。

車中ではいろいろな人が声をかけて「ネパール人か？」って聞かれたのには驚いた。日焼けした我々を見ると当然のコトかと納得する。



デリー～ジャイプル
乗車券

私の英語力

吉岡俊博

関根さんが、200 Rs のとてもおいしい紅茶があると教えて下さったので買いに行く。この1か月半で、私の英語の“ブロークンさ”は更に磨きがかかり、店の奥に居た経営者らしいおばちゃんに、スラスラと200 Rs の紅茶がほしい、と言ったつもりだった。おばちゃんは、それまでの上目使いの面倒臭そうな態度を改め、次々と棚に並んでいた高そうな紅茶の封を切って、これも香りが素晴らしい、これも高級な物だ、と言い出した。

値段を聞いたら、どれも200 Rs 以下である。ホテルに帰って関根さんに確認しようと思い、それらしいものを1つくれと言うと、おばちゃんの目が真剣になって、200個じゃないのかと聞く。まずいと思い、今日ホテルで味を見て明日必ず来るからと言って逃げるように店を出る。関根さんに聞くと、これだということだったので、翌日沢田さんに頼んで、お土産として必要な残り12個を買ってきてもらった。

隊 務 報 告

食料報告

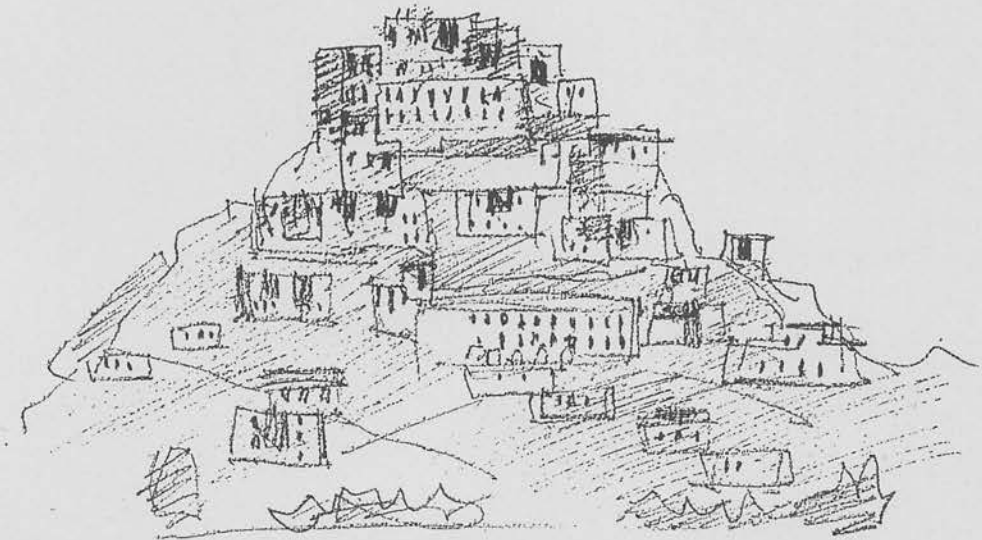
共同装備

医療報告

高所症状について

ごみ処理について

タクティクス



1-10部9号
1991. 7. 20
切23

食料報告

中山裕朗

1. 概略

アプローチ及びBCの食料に関しては、エージェントにまかせた。C1より上部は自分達で用意した食料を調理した。C1からC3では調理に圧力釜を使用した。

食料のメニューは主食・行動食・テント食について、表に示す内容でA～Dの4種類を用意した。主食と行動食は3人分を1パック、テント食は20～30人分を1パックとした。パック数は「予想される各キャンプ地の延べ人数」から算出し、表に示す数を用意した。梱包後の総量はブラパールボックス（中）9ケ・204kgとなった。

アルコールは成田の免税店で1人1本ウィスキーを購入し持って行った。

2. レーション化

メニューは全て日本でレーション化し、次の手順で行った。

- ①メニュー表と必要パック数から、個々の調達品の総数を出した。
- ②調達品をそろえた。
- ③調達品の過剰包装を取った。ビン詰め物はビニール袋に移した。
- ④必要数（メニュー毎）の③とビニール袋を並べた。
- ⑤1パック毎にビニール袋に詰めた。
- ⑥⑤をブラパールボックスに詰めた。

3. アプローチ

アプローチ中はホテルの食事か、エージェントの食事だった。香辛料のきいた物が続き、日本の味が懐かしくなった。アプローチ中に食べる分のお茶漬け、漬物、味噌汁も用意しておけば良かった。

カルギルのホテル「D' - Z O J I R A」の夕食は大変美味しかった。コックを呼び、皆で拍手したのを覚えている。

4. 主食

8月7日に荷上げがほぼ終わってみると、休養

日の昼食にラーメンを食べたりしたせいか、C1で主食が足りなくなった。不足分はBCから上げた生米、卵、タマネギで補った。予備のラーメンがあっても良かった。

缶詰を寄贈して頂き、メニューで多数用いた。手軽で美味しいが、つぶして荷下げするのが面倒だった。

アルファ米の分量は3人分で2袋（140g × 2袋）用意したが、足りないパーティーがあった。

調理に圧力釜を用いたので、上部キャンプでもアルファ米、ラーメンは美味しく食べれた。

5. 行動食

行動食は少々余った。

カロリーメイトは不評で普通のビスケットの方が人気があった。アメは色々な種類が入ったものが好評だった。個人的に行動食のCは甘い物ばかりで嫌いだった。もっと塩気のある物を入れても良かった。

6. テント食

テント食のC、Dでペットシュガーの数が足りなかった。5割増しは必要だった。

レーション化した時、コーヒーの袋にプラスチックのスプーンを入れておいた。便利で良かった。

休養日はお餅やホットケーキをよく作って食べ、楽しみだった。お餅は油なしでフライパンで焼くか、箸に刺して気長に焼いたりした。



高所では圧力鍋がグー!!

共同装備

吉岡 俊博

共同装備は、HAJ女子隊及び兵庫教員隊の記録を参考に決定した。我々の隊の隊員数は少ないが、実働日数が少ないため必要最小限の共同装備で機動性を持たせるように心掛けた。このため、個人装備、食糧を含めてのインドでの隊荷は、プラパール大15、中7、その他8である。隊費での購入品は、リエゾンオフィサ支給品と一部消耗品のみを抑え、その他の共同装備は、①HAJカンチェンジュンガ遠征隊（ITKE-91） ②HAJシカル社デポ品（'90サトバント隊のものが主） ③個人供出及び寄贈 によった。

①ITKE-91により、フィクスロープ（1,800m）、スノーバー（40本）、細引き、ペフマット及びEPIカートリッジを同隊の隊荷で事前に輸送することができた。また十分な数のしっかりしたテント、登はん具、酸素ポンペを入手できた。

②シカル社デポ品から、テント、調理具、O₂バック及び工具類等を使用した。当初、確実に利用できるかどうか不安であったが、今回はほぼ問題なく使用できた。

③隊員からは、隊員所有の装備及び隊員の職業・縁故を通じて入手できる竹竿、コンロ台、ビニール袋などの装備を供出してもらった。電池の一部は東芝、望遠鏡はミザールより寄贈して頂いた。

以下、共同装備に関して感想を述べたい。

1. 登はん具について

今年のヌンの斜面は、今まで報告のあるものよりかなり雪量が少なく、上部では氷化あるいは腐れが進み、スノーバーが効かない領域が多々あったようである。特に、カニのはさみでは支点を取るためにロックハーケンも多用した。また、アイスハーケンに頼らざるを得ない氷化した斜面も上部で出現している。このため、アイスハーケン、ロックハーケンは、今までの報告にあるよりも少し多めに持参した方が賢明である。フィクスロープは、カニのはさみで21ピッチ用いたこともあり、上部斜面での不足も考える必要がある。

2. 酸素ポンペについて

当初、2本としていた酸素ポンペを、「アプロ

ーチの峠越えで使用する可能性がある」という尾形HAJ事務局長の助言で4本に増やした。調達したITKE-91のものであったため、インドで変更できた。現実には、峠越えのアプローチで3名の肺水腫患者を出し、約2本の酸素を使用した。レーの病院で、酸素を充分利用できるとはいつても、急速に高度を上げ、2～3日の4～5,000mを体験することも考えられる今回のアプローチでは、アプローチ用の酸素を考慮すべきである。

3. EPIカートリッジについて

インドデポ品に余裕があったため200本持参した。登山期間のほとんどが好天に恵まれたためもあり、純粋に調理用のみの使用には多過ぎたようである。

4. その他

スノーブラトラーでは、度々カラスの攻撃に遭い、貴重なテントが破損するのを指をくわえて見ていなければならなかった。HAJのインド登山隊にとってこの貴重な財産であるテントを守るために、姑息なことかもしれないが、カラスよけ対策の工夫ができたらと思う。

最後に、共同装備はヒマラヤ初体験の吉岡が担当したが、国内準備ではそのほとんどを伊藤（守）隊員をはじめ隊員の助言・助力によるところが多く、現地では吉岡が高山病により実質的な行動ができなかったこと、それでも何ら支障なく作業が行なわれたことを付け加えておく。



共同装備（一部）

医療報告

関根幸次

高山病や医療・薬品の知識もなく、医療係として引受けたこと深く反省している。特に高山病の症状については、自分の体験によるもの以外は何も持ち合わせはない。隊員の中にヒマラヤ経験者も少なく、隊長始めH隊員の体験的知識に便り、その場で対処しサポートしてもらい助かった。

レーへは空路を使用せず、アナリ～レー・ロードの陸路をバスで移動した。標高3,800mと4,700mの2ヶ所にキャンプ。デブリン4,700mのキャンプは、日本では経験できない標高の泊りとなった。歩きの移動よりも、バスの移動は高所障害が大きかった。Y隊員は夕方から肺水腫により、O₂の吸入をするまで悪化してしまった。Y隊員に続きデブリンからレーへ移動中にM、T両隊員共に肺水腫になってしまう。レーには大きな病院があり、早々診察してもらった。結果は3人共に肺水腫と診断され、入院させられてしまう。

HA J・91・ヌン隊は高所経験者も少なく、初期の高山病（頭痛・吐気）等の比較的軽いものは隊長も覚悟はしていたようであった。しかし、登山活動に入る以前に戦力の若い隊員が3人も、肺水腫の宣告を受けてしまった。

1. O₂・O₂パック

O₂ボンベはカンチ隊の残りを使用させてもらった。お陰で6本のO₂とO₂パックを持参でき、O₂不足の心配もなく行動できた。BC、C1、C2にはO₂ボンベを上げ、C3・C4にはO₂パックを上げた。幸にBCから上部ではO₂の使用はなかった。

2. 抗生物質はエリスロイマジン・タビリットの2種類用意したが使用しなかった。

3. 鎮痛剤・解熱剤はバッファリンの単品で用量も少なかった。

4. 感冒薬・鎮咳剤は市販薬のルル・パブロンS・トローチを各100T用意した。高所は乾燥しており、風邪気味で（喉）の痛む隊員も出ていた。感冒薬と鎮咳剤は多目に持参すべきであり、予防薬にうがい薬を使用すべきであった。

5. 胃腸薬・腹痛薬は総合胃腸薬センロック、

脂肪消化剤にセブソーPを各50Tを個人用に、1パック渡す。高所での消化不良の助剤としたため、不足気味であった。

6. ビタミンは総合ビタミン・ハイシー等を用意したが、ビタミン不足の疾患はなかった。

7. 下痢止はお国がら、一番に気をつかった薬品であった。正露丸は各隊員に渡し使用してもらった。ワカ末・ミヤリサン・エリスロシンはC4を除き、常備薬とした。

8. 利尿剤は高所におけるむくみは、尿排出の関係でむくみが出る。化学薬品のクロセミットは利尿剤だが副作用が出る人もあり、非常用とした。サトバント遠征に使用し、好評だった漢方薬のキササゲを食後、お茶がわりに飲んでもらった。利尿の効果があったと思う。

9. 睡眠薬（精神安定剤）を10Tほど用意したが、使用せずに済んだ。

10. 点眼剤は特に雪目の疲れをとる、フラビタン5mlを各隊員に渡し使用してもらった。抗生点眼剤タビリット5ml1本を用意した。

11. 外科薬剤に抗生物質軟こう、オキシドール、マーキロン、ガーゼ、三角布、バンソウコウ（25mm×1、12mm×1、ほう帯4本、ピンセット1本）を用意した。

外傷薬の使用例はレーの病院に入院したY隊員が尿瓶を使って、大事な部分に感染し、消毒薬を使用した。その他キャンプ地で足の爪を剥した程度の使用であった。外傷薬は可能であれば、各テントに常備すべきであると反省した。S隊員の火傷の薬品は何も備えなく、反省している。

各隊員のバイオリズムの一端を知る意味で、健康手帳を記してもらった。体温計は各自1本、血圧計は2台持参し、1台はC3まで使用した。

毎朝、起床時に計測をお願いした。その結果を自己診断し、体調を判断してもらった。

入山時に3名の肺水腫が大きな病気で、登山期間中は多少の高山病軽症者が出た。幸にも3名の肺水腫も回復され、C2及C3まで登って来られた。登山も予定のタクテックスで登頂できた。

高所症状について

沢田 幸子

日本での測定値はないが、デリーを出発してからマナリ～レーの間で高度を上げたパッセオやデブリンでは体調をくずす者がでてきた。

車に乗ったままで、一步も歩かずに高度を上げるというのは、高所順応にはならないと思う。

BCへ入る前にデブリンのキャンプ地で、かなりの隊員が体調をくずしたのも、たとえば30分か1時間でも車から降りて歩くようにしていたら、

あれほどひどくはならなかったかもしれない。

BCへ入ってからは各人少しずつ違ってきたが頭痛・吐き気・下痢・咳・喉のかわき・むくみ等典型的な高度障害の症状がみられる。尚上部キャンプは記録がないので不明である。

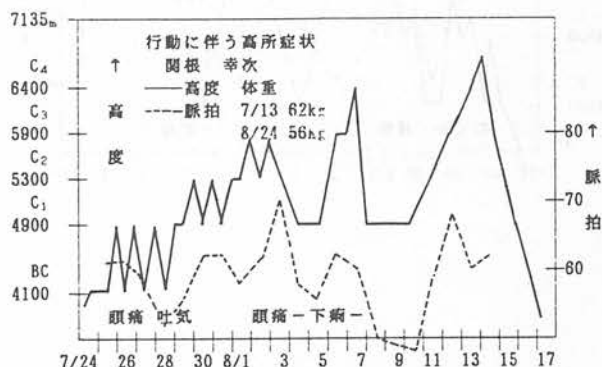
レーで入院することになった3隊員が出発前、特に体調が悪かったわけではない。改めて自己管理の大切さを十分認識したい。

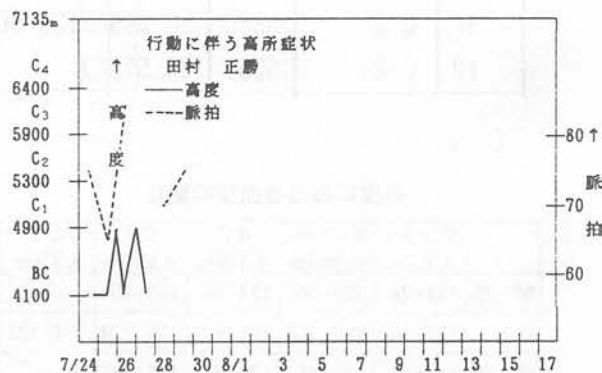
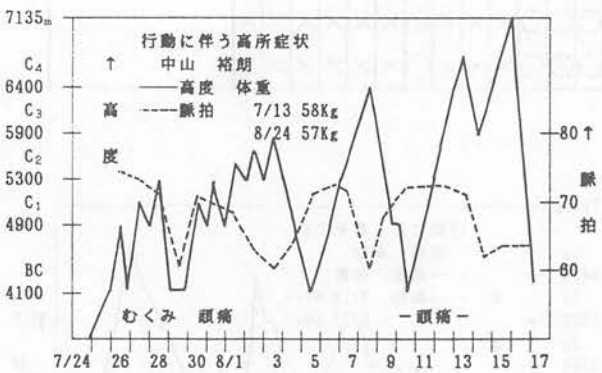
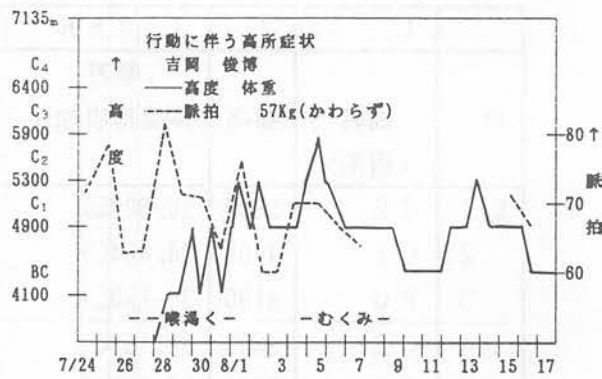
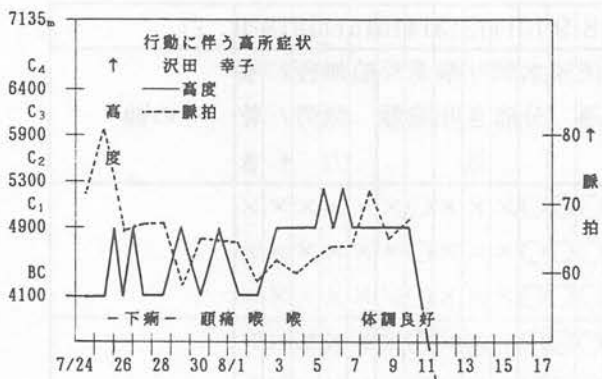
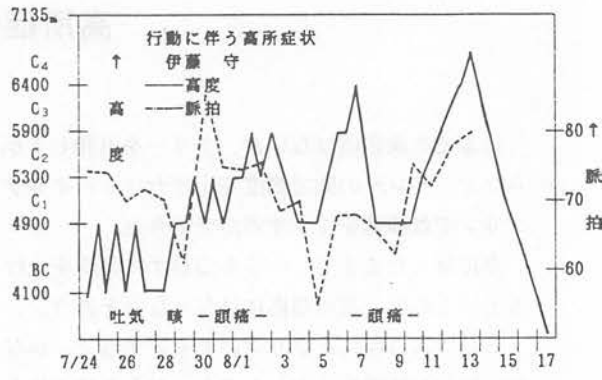
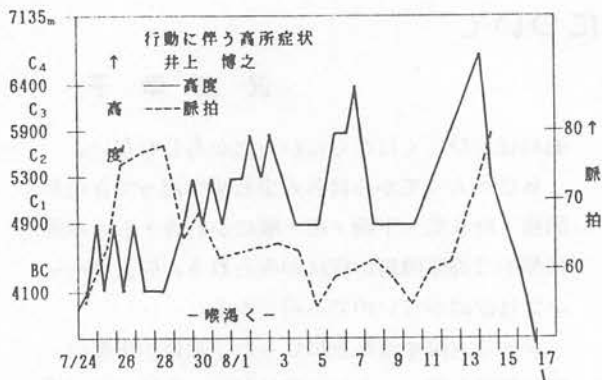
【健康手帳】 (2/2)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
日	地名 (宿泊)	標高	体温	脈搏	呼吸	血圧	食欲	便通	尿分	水分	頭痛	吐気	嘔吐	意識	浮腫	咳	無力	疲労	耳鳴	喉乾	その他
8/1	C 2	5350	36.6	69	○		○	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
2	C 1	4900	36.4	64	○		○	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
3	B C	4100	36.8	60	○		○	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
* 4	C 2	5350	36.7	67	○		○	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
5	C 3	5900	36.4	72	○		○	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
6	C 2	5350	36.1	75	○		○	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
7	C 1	4900	36.0	73	○		○	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
8	C 1	4900	36.4	60	○		○	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
9	C 2	5350	36.2	69	○	139/90	○	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
10	C 2	5350	36.5	73	○		○	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	

高度における血圧の変化

	デブリン 4,700m	タンゴール 3,350m	BC 4,100m	C 1 4,900m	C 2 5,350m
関根	133-78	130-95	133-86	140-93	
井上	162-100	140-104	133-82	155-124	164-122
伊藤	113-67	99-66	124-94	126-98	
吉岡			134-90	137-102	
中山	139-79	129-82	141-78	134-87	130-90
伊藤 (英)		122-72	112-79	124-72	
沢田	145-97	129-92	126-93	144-111	





ごみ処理について

田村正勝

毎日こまめに集め、焼却するのが一番。纏めて後で、などと考えると決してうまく行かない。BCで、私は朝飯前にパトロールと称して、ビニール袋を持って辺りを一巡し、拾い集めたゴミを石積みの簡単な炉で燃やした。やがて各天幕からゴミ袋を持って隊員が集まって来、焚き火を囲んで手炙りと談話がはずみ、コックがお茶を持って来る。朝と限らず、暇を見つけてはこれをやれば、二三日もすれば、かなりきれいになる。ただし相当執着が必要である。岩の間に首をつっこみ、埋まったゴミをはじくり出し、へばりついた便所紙を剥がし、遠くにそれらしきものあれば、わざわざ出掛けてゆかなければ気が済まない。なんと楽しい作業だろう！ 私は楽しかった。

BC付近は、各登山隊ともそれなりに撤収清掃をするとみえ、比較的きれいだが、これがC1一带となると、なかなか賑やかである。主に田村、橋本、山中で可燃ゴミを処理するのに、休養日を3日かけた。

ここヌンのC1では、酸素ボンベとかテントとか、大物はないものの、他はなんでもある。各国語の食品の外装をはじめとして、梱包材、喰い残し、腐った衣類、使い棄ての下着、使用済の避妊具、わけのわからない薬品類、半焼けのプラスチック類……これらを相手に色々考えることも楽しいものである。半焼けのごみが多いのは、撤収時にばたばたとやったことを示している。

残置の1斗缶があり、重宝した。便所の脇にこれを置いておき、使用済みの紙をこれに入れ、他のゴミと一緒にこの缶で焼却する。登山隊は、少なくとも1斗缶1～2個は持ってゆくとよい。各天幕から出るゴミは、概ねこれで処理できる。梱包時の選別、剥ぎ取りの際、燃えやすい紙類はある程度入れておいたほうがよいようだ。

周辺の古いゴミは、何箇所かに集め、積み上げて焼却した。近くがきれいになると欲が出てきて、周辺に少しづつ清掃範囲を拡げて行き、また、日に日に細ってゆく雪溪の下から次々とゴミは生まれ出てくるので、毎日のパトロールは欠かせない。

可燃物とともに、夥しい金属缶類、電池等が散乱しているが、我々はあえてこれに手を出さなかった。ごく単純な考えとして、自隊のゴミを完全処理し、加えて前隊のゴミを少しでも始末すれば、少しづつでも、今後山はきれいになってゆく筈である。不燃ゴミの処理は今後の隊にお願いしたい。

一箇所に纏めるだけでも、すっきりとするだろう。

本隊の缶詰類はすべて潰して下に降ろした。といっても、東京まで持ち帰るとまではゆかず、BCの、現地スタッフの掘ったゴミ穴に埋めたのだが。

大量のガスボンベは、ありがたいことにポーターが引き取ってくれた。再充填用にもするのだろうか。

ここヌンは乾燥地帯であり、焼却補助の石油類の必要も感じず、連日晴天続きで、ゴミ焼却は楽であり、楽しくもあった。しかしこれが、雪上や寒気、雨天や荒天の中では、辛い仕事となるだろう。

上部キャンプのゴミは、すべて降ろして処理した。

乾燥地帯とはいえ、茶殻、残飯等、濡れ物の処理は厄介なものである。風に飛ばされないよう、適当な入れ物を工夫して乾かそう。ネット類があればよい。胃袋は最良の焼却炉と考え、喰えそうなものは全て喰って処理すること。

とはいえ、考えるほどに厄介に思えるのが排泄物の問題であり、立ち入れれば自家撞着に陥るは必定。排泄は自然のうちと考えて、あまりこだわらないほうがよいようだ。BCにしるC1にしる、汚物はかなり目立っており、紙の散乱は見苦しいものである。本隊では穴を1箇所掘って便所とし、紙は分けて焼却したが、これがベストではなからうか。しかし現地スタッフ連は現地式に適當にやっていたようである。文化の違いということもあり、徹底するのは難しいものだ。



ゴミは分別して処理

C2では雪面に穴を掘り、用いていたが、10日の嵐で埋まったあとは、ばらけて適当になってしまった。便所用雪洞とかテントを設けるのが最良だろうが、負担が大きい。若干の後ろめたさが残るものの、クレバスの脇で用を足し、スコップで汚物を割れ目に投棄、というあたりが妥協策と思える。他のゴミは止めたほうがよい。

フィックスザイルは、結局、残してきた。回収

するのが最良としても、この問題は私には判らない。時間と体力の余裕が要り、そして危険が伴うことは明らかである。ちなみに、ヌンでは、現地人がC2の上、かなりまでの残置ロープを回収してくれる。お互いに得をするとも考えられるが、もしこれで事故でも起きた場合、問題化するという懸念がないでもない。

タクティクス

伊藤 守

登頂率53%の西稜タクティクス

本隊は13名（最終は12名）と大所帯であり、かつ大原則である全員登頂を目標にタクティクスをねりあげた。まずごく一般的な基本方針（P.69）を立てパーティ編成並びに行動概要を決めた。各キャンプの設営にかかる日程は実際登頂した隊の87年HAJ女子隊を参考に設定した。

基本方針から各パーティーの行動をパソコンの表計算で各キャンプの滞在日数（延人数）を算出し食糧の配分を設定した、装備に関しては各キャンプでの燃料（EPI）が最後まで未知数となった。

固定ロープの各キャンプ間の使用量は過去数隊の報告を参考にした、89年兵庫教員隊、及びHAJ女子隊のをたして2で割る計画ですすめた。

さてここまでは教科書に沿ったやりかたでなんら難しいことではない、難しいのは、不確定要素

つまり「隊員の高度順応、天候、隊員の行動量、ルート状況」と不安要素が大変多い中、あまりがっちりした計画をたてると息苦しく感じるので、行動計画に大きな差が生じたときの修正方法をメモ的に箇条書程度にとどめた、多分そうゆう状況下でかつ高所障害の頭で考える能力がどこまであるのか自分ながら不安なためすべてではないが機械的に処理するのが良いと思ったからである。

したがって「いきあたりばったり」ではないが現場でミーティングを行ない修正することで決めるようにした。

出発3ヶ月前の4月下旬、帰国日が1日早くなり登山日程が1日減ったこと、6月、隊員1名不参加と大きな修正材料はあったもののそれによる修正はアタック予定日を1日はやめることでかたづけした。

登頂率（年度別）

年度	パーティ数	登頂	成否	備考
83	8	4	0	
84	10	1	6	資料不足
85	8	5	1	良天候
86	2	2	0	
87	9	6	1	良天候
88	8	3	0	
89	8	1	0	?天候不順
90				

ルート別登頂率

登頂隊 / パーティ数

北稜	5/13 = 38%
東稜	2/6 = 33%
西稜	9/17 = 53%

西稜のキーポイント

- ①スノープラトロー（5,200m）があり、ルートの間で安全地帯がある。
- ②平均的斜度がいくらかよわい。
- ③キャラバン、BCが一番近い。

1, パーティー編成

4 パーティーに分ける (3名+3名+3名+4名)

ルート工作+装備荷上+食料荷上+休憩 (もしくはキャンプ整備)

パーティーリーダー 中岡、関根、橋本、伊藤を基本とする。

2, パーティー行動概要

パーティーの力量(強) A > B > C > D A、Bパーティーにて先ずルート工作をする。

3日行動1日休憩を基本とする。

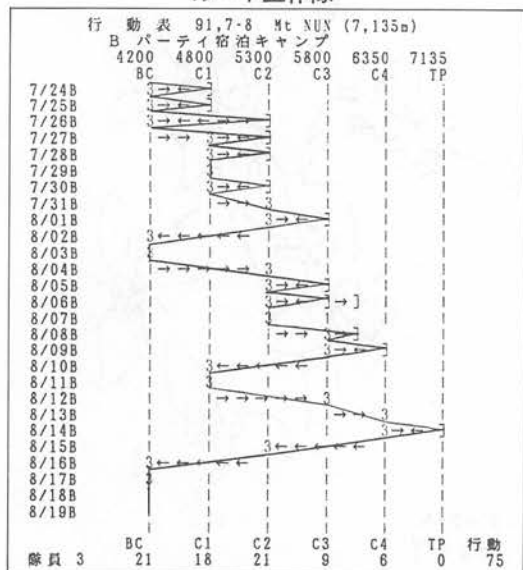
アタックパーティーは 第1次 6~7名 第2次 6~7名 がアタック体制には
いれる形を基本とする。

2, 各キャンプの設営日とアタック日々程表 (案)

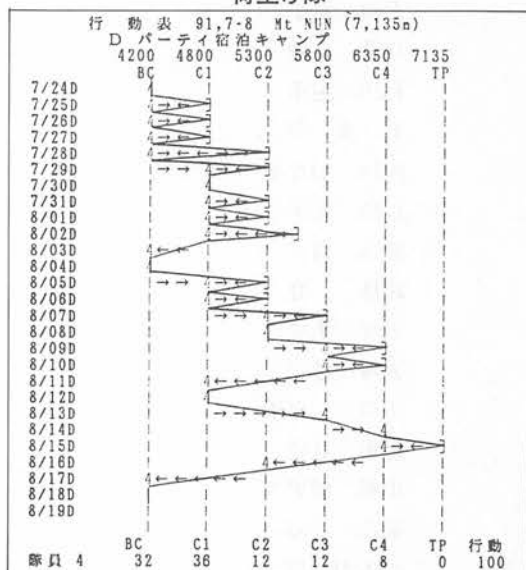
各キャンプ	高度	87女子隊 設営日数	HNE-91 設営日数 M/D	備考
BC	4100	0 8/5	0 7/25	7/24タンゴール →BC
C ₁ (ABC)	4800	1 8/6	1 7/28	サイドモレーン上 アイスホール下
C ₂	5300	7 8/12	5 7/30	スノープラトー上
C ₃	5800	1 8 8/23	1 3 8/7	カニのハサミ乗越 下降した基部
C ₄	6300	2 1 8/26	1 5 8/9	西陵取付部
休憩	4100 4800			BC C ₁
TP	7135	2 2 8/27	2 0 8/14 2 1 8/15	第1次 第2次
BC 下山	4100	2 4 8/29	2 2 8/18	8/17撤収準備 8/18 BC→カルギル

作成 中岡、関根、
橋本、伊藤

ルート工作隊



荷上げ隊

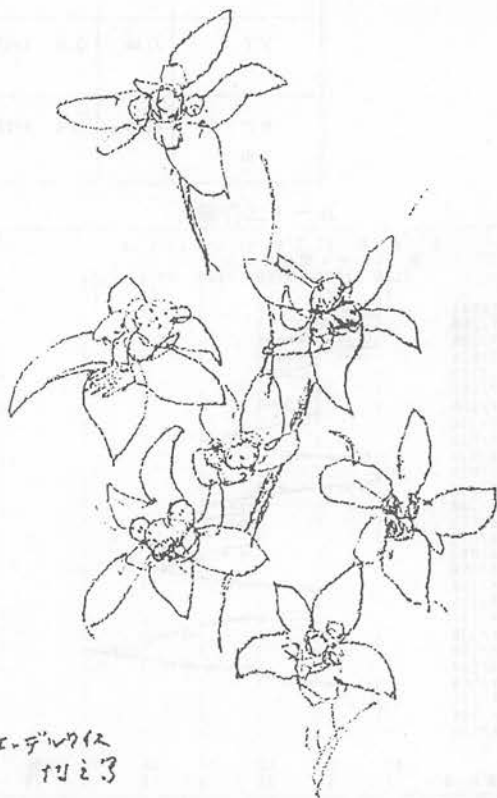


御協力者名簿

(株) 旭洋
 アルム化学
 I C I イシイスポーツ
 泉オフィスサービス(株)
 インド登山財団 (IMF)
 民宿 雲天
 内田商店
 (株) 国際水産
 黒稜山岳会
 佐藤眼科
 (株) 池袋一秀山荘
 住友銀行高島平支店
 大洋漁業(株)
 (株) テイ・エッチ・アイ
 東芝電機(株)
 在日インド大使館
 87・H A J ヌン女子隊々員
 (株) ミザール
 (株) 森源
 わらじの仲間

小林 睦子
 近喰 司
 後藤 信郎
 坂上 利明
 佐藤 文保
 住本 芳克
 関根 吉江
 高取 英明
 田辺 紀子
 都築 直久
 中島 和彦
 保坂 昭憲
 宮川 裕子
 吉崎 四一郎
 山森 欣一
 渡辺 秋雄
 樋口 育郎
 高橋 義則

相島 美枝子
 天城 敏彦
 新名 香代子
 有馬 左知子
 石渡 育子
 伊藤 豊
 稲田 定重
 五十嵐 明
 内田 つた子
 江頭 和子
 遠藤 京子
 遠藤 登
 大塚 英史
 大塚 浄子
 小原沢 恵子
 尾形 好雄
 川瀬 能男
 菊池 秀昭
 小太刀 健



エドワード
 1973

編集航海記

「皆なのそれぞれのヌンは終わった。」

終わったんだなと日本に帰国した時、確かに実感があつたが報告書の原稿が山のように積まれ（ショットおおげさか！）ることで私にはまだヌンは終わっていない、編集パーティで再度アタックせねばと言う気分になった。

沢山の原稿をフィックスロープとし、荷上げに中岡、関根、中山さんに絶大なる協力を得てキャンプを一つ一つ上げていった。高所順応がうまくいかないときはそれぞれの原稿を読んで葉がわりにさせて戴いた。

一時は、なれない仕事のため黄色い旗でもふって敗退しようと思ったが、「HNE-91隊の解散は報告書が出来た時だよ」と中岡隊長の言葉が頭をめぐり、気を取り直しここまでやってきた。振り返ると隊が構成してから登攀計画、装備、梱包、先発隊と一連の仕事を任せられ、最後の最後、報告書まで頭を突っ込ませて戴いた。時間的には楽しいことより、忙しいことのほうが多いというのが率直なところだが、登山に限らず沢山の人達に見守られ、期待されたことが一番の収穫でもあり結果、我々HNE-91は成功したことのあかしと私は確信している。（伊藤 守）

秀麗ヌン峰を攀じる

—ヌン峰登頂記—

発行	1992年6月30日
発行人	H A J ヌン登山隊1991年
編集人	関根幸次、中岡 久、伊藤 守
発行所	日本ヒマラヤ協会（H A J）
	〒169 東京都新宿区高田馬場 3-23-1
	淀橋食糧ビル 506号
	03-3367-8521
振替	東京 0-48954 「日本ヒマラヤ協会」
